

第三章・山手・山下地区

第二節●外国人居留地

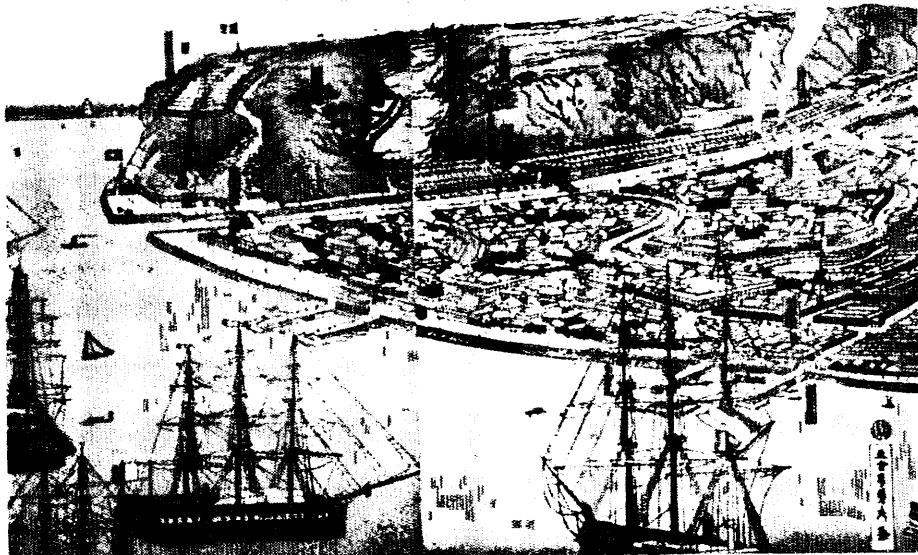
(1) 外国兵駐屯

●地区——ここである山手・山下地区は、現在の山手町と山下町である。山下町は本来関内地区だが、ここでは山手町と合せたものである。町についての呼び方は、山手・山下、或いは居留地と一括する場合もある。面積一九六・一ヘクタール。

地理的には、山手町は丘陵地、山下町は平坦地で、山下公園から横浜港の海岸に面した地区である。二つの町山手・山下をつなぐものは、堀川にかかる谷戸橋と谷戸坂である。

このふたつの町には地形上の共通性はないが、開港以来密接な関係にあった。いま、それが希薄になったとはいえ、相変わらず相互は不可分の関係にある。

●開港によって——この山手・山下の土地が利用されるのは開港以後、外国人居留地となってからのことであった。それまでの山手は一望の丘地で、原野とも山林ともつかない丘陵地で、そのなかに畑が点在していただろうと想像される。また山下は、山手



“改正横浜細見図”五雲亭貞秀画(部分)——山手と山下が克明に画かれている、慶応2年発行



生糸荷造り風景



ジャーデン・マセソン商会(明治中期)

の丘陵地から延びる横浜村の洲干の一部と、内海であった。

山手・山下は沿革編で述べたように外国人居留地ときめられた。これによって、山手・山下は、現在に到るまで外国とのかわりを、宿命的に持ちつづけた。

●英一番館——居留地山下の地区に第一步を印したのは、香港に本拠をもち中国貿易で活躍していたイギリスのジャーデン・マゼソン商会で、安政六年の開港とともに日本に進出してきたものであった。日本へはウイリアム・ケズウィックが派遣され、現在の山下町一番地で旗上げを行った。英国で一番なので英一番館といわれた。ついで、居留地二番の位置にはアメリカのウォルシュ・ホール商会が進出、ここは「亜米」と呼ばれた。

英一番のはじめの建物は、太田屋源左衛門が建てたといわれ、十間に三間位の和風白亜二階建と、板張りの倉庫が一、二棟ついていたという。西洋建築になるのは慶応二年の大火（豚屋火事）以後のことである。

居留地には商館が逐次でき上って行ったが、文久年間には、一番から百十番まで、約百軒の外国人商館が並び、現在の町域の約半分近くに達していた。

これらの外国商館はすぐ貿易を開始するが、英一番、亜米一に和蘭七、英三、英十、英十四などが最初に生糸を扱った（鈴木隣松談『横浜どんたく・上巻』より）という。

●土地のせり賃——文久二年までには、神奈川にあったフランス

公使館は弁天境内に、同領事館は連上所向側などへと、すべてのコンシル館は横浜に移転してきた。

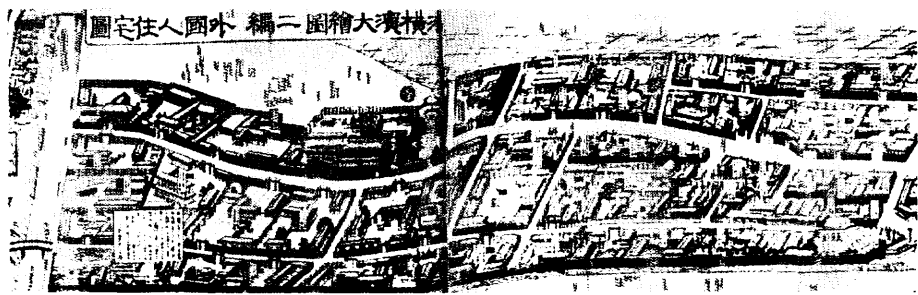
そしてこの年に埋立の追加工事が行われた。結局これは明治に入って竣工するが、横浜居留地（新居留地）といわれる部分であった。それでも文久三年の記録によれば居留地面積は総坪九万四、四八〇坪（約三一・二ヘクタール）に達したという。

そして外国人商人は次第にこの地に増加した。外国人は適地を希望した。しかし埋立の土地は、その面積の大小、土地の湿潤や利便がよいか否かで、その貸付けはむづかかった。そこで幕府は英国公使の意見を容れて「土地競貸借規則」を設けてせりによる貸付を行ったのであった。

●外人屋敷——文久二年刊行の「御開港横浜大絵図 二編 外人住宅図」を見ると、広く敷地をとり武家屋敷を思わせる木戸と屋根迄の板塀にかこまれ、所々に植え込みがある。ほとんどは平家建だが、中には二階建の大きな建物がある。そのなかでも、英一番館の入母屋造りに洋風の建具がはめ込まれ、和洋折衷が見られる。

絵図をそのまま信用すれば、完全に隔絶された外国人居留地として、ほぼ完成した街並みの形成と見られる。

『珍事五ヶ国横浜はなし』（文久二年刊行）のなかに、「異人の住居冬はビイトロ障子を立きり、内には炭八方に沢山おこし置也。たき火の煙は銅の筒にて外へ出すなり。内には少しも



“御開港横浜大絵図 二編 外人住宅図”

けむらぬ仕掛なり。夏は角力のまわしの様なる物居上へつるし、幅六尺位、立五尺程の物をつるし、仕掛にて引は、うちのは如く大風の出るなり。奇々妙々也。あかりはビイドロ仕掛にて昼よりも猶あかるし。座敷向は壁なし、皆はり壁なり。木の見ゆる所老つもなし。皆ぬり柱なり。外廻りは皆石垣なり。着類は冬は毛織にて、大寒にはツ、ポウ二枚も三枚も重て着るなり。夏はいつれも白衣麻織なり。食事は二度食也。……」(『神奈川県郷土資料集成 第2輯』)

と紹介されている。

●街並み形成——こうした街並みが形成されるなかで滞在の外国人のためにホテルが必要となった。その起源は明らかではないが、『横浜沿革誌』には安政六年(一八五九)に「本町通に寺院の如き平家一ヶ所堅瓦海鼠壁の平家ホテル一ヶ所建築成れり」という記述があり、『横浜市史稿・風俗編』では文久三年にイギリス人シメッツが自宅をクラブ組織の社交室とし、旅館を兼ねた、と記し、さらに、同じ文久三年居留地七十番とその隣地に、「横浜ホテル」と「アングロ・サクソン・ホテル」が建てられたとされている。そしてそれらのホテルには多くの外国人が宿泊した。一例として地質学者のリヒトホーフェンや、フランツ・フォン・シーボルト父子や、無政府主義者バクーニン、画家ハイネ、画家ワグマンなどが投宿している。(『洞窟雄』郷土よこはま』86・87号昭五十五・三)

横浜ホテルは広い中庭を囲んで三方に一階建の木造バラックで、片側には食堂と撞球場(ビリヤード)と酒場があり、向い側に居間と寝室、その背後に中央の建物に面して厩舎があった。日本風とヨーロッパ風半々であったという。

こうした街並みのなかでは、文久二年頃に早くも製茶場(お茶場)が稼働し、なかには日本人女工七〇人を雇った大きなお茶場もできた。

●清国人居住——一方この埋立居留地の新開地裏側には清国人が自然と集団をなして住みつくようになった。現在の山下町一二〇番から一六〇番にわたる区域と推測される。

「ハートレー氏が来日した時、居留地は次の街路、いや道路しかなかった。つまり海岸通り、木町通り、それに堀川通り側から一番、四十二番、五十番、七十番、八十九番までの本村通りと呼ばれた部分だった。それから向こうは「沼」と呼ばれ、二、三の中国人の掘つ立て小屋と飲み屋が建っている外、何もなかった」(『十五年間の興味深い思い出』『ジャパン・ガゼット五〇年史』市民クラブヨコハマNo.41所収)

●覚書——しかし外国人居留地はますます狭くなったので、元治元年英国公使オールコックの主導のもとに英・米・仏・蘭四カ国のあいだで、居留地拡張と、外国人が安住すべき諸施設の拡張や建設を内容とする覚書が十二月に調印された。その覚書は、掘割の向こうに訓練場のため日本政府の出資によって沼地を埋立てる

ことなど、十二条よりなっていたが、これは実行に移されることなく、慶応二年にいたってその一部を容れて、あらたに慶応の約書を取り交すことになる。

●居留地回り——開港以来、列国は各国貿易で優位に立つため、欠継ぎ早な要求・建議をくりかえした。当然外交交渉は困難をきわめた。

安政六年の開港以来、外国人の建物が漸次建築され、居留地の体裁がととのつてきたが、この諸外国領事のなかでも実力をもつ英国総領事オールコックは、居留民保護のため神奈川と横浜にわたって関門や見張番所の設置を提議、幕府はこれ実行し、町会所では市内取締りを置いた。武士のほか数人で太鼓を打ち鳴らし、居留地回りと称する警備が行われた。文久元年の一月にはあらたに外国御用出役がおかれ、慶応二年には、その仕事にたずさわる者一、五〇〇人に達した。一方居留地掛が置かれ、道路の掃除、暗渠くらみの疎通、そして居留地内の警備などを行った。一時、こうしたことは外国人自らに一任されたが、ふたたび神奈川奉行に移された。のちの慶応三年には居留地取締規則が作られた。

●横浜襲撃計画——第二章で述べたように、事実外国人殺傷が相次いだ。外国側の居留地警備要求は、もつとものものであった。幕末動乱期わが国では、攘夷派武士は外国人を目の敵として、外国人を殺傷するテロ行為に発展していた。その理由は幕府から外国に対する賠償金を支出させることによって、幕府の財力の衰微

をもくろんだものだったが、そのひとつとして、万延元年（一八六〇）三月桜田門事件ののち、攘夷派の浪士が横浜に乱入して、外国商館を焼き払うという風説が流れたこともあった。また新徴組の清川八郎・山岡鉄太郎などは関内や居留地に潜入し、横浜襲撃計画を練った事実もあった。それは不発に終わったものの、外国人はもとより幕府にとつては決してゆるがせにできないことであった。

●外国兵駐留はじめ——文久二年八月、鶴見区の生麦において有名な生麦事件が発生、大事件に発展した。次いで三年、井土ヶ谷において、フランス士官カミュが殺害されるなど相次いで殺傷事件が発生した。こうした一連のうごきのなかで、英（イギリス）・仏（フランス）両国の公使は、自国の軍隊を横浜に駐屯させ居留民を保護することを強力に主張した。

折から文久三年五月十日、長州藩は独走して、幕府によってあらかじめ予定されていた攘夷の期限を待たず、下関海峡において外国船を砲撃。このため、元治元年、各国の軍艦は横浜港に次々と集結・停泊した。そして長州の動静をうかがうのであった。

外国奉行は戦乱の拡大を恐れるあまり、長州への発艦を見合すように説得・交渉した。英国公使パークスはこれに対し、停泊軍艦に数カ月の生活をする士官・水兵は健康を害する恐れがあり、そのため陸上に屯営を借受けたいと要求してきた。幕府側はこれを了承、元町谷戸坂上（現、山手町）英国領事館の所、山手一五

○番に、英・仏両国軍艦の乗組員を駐在させることとした。ただし、これは幕府としては士官・水兵の休養のためのもので、あくまでも一時的なつもりであった。

「横浜に上陸したイギリスの最初の軍隊は、海兵隊軽騎兵隊の分遣隊であった。これらの部隊は、山手でテントを張って野営していた。海兵隊のあとに、第二十、第十、第九連隊が続いた。(略)……遅れて砲兵中隊が到着し、これは、横浜駐とん中に、日本産の馬を使用して騎兵砲兵隊に転換した。これもまた、インド部隊の分遣隊であった」(『横浜の移り変わりについての興味あることなど』『ジャパン・ガゼット五〇年史』市民グラフィコハマNo41所収)

●馬関戦争——長州藩の外国船砲撃にたいする幕府からの処分が、延びたのを憤って、英・佛・米・蘭の四カ国連合艦隊は横浜港を出帆、一路下関へと向ったのであった。いわゆる馬関戦争が火ぶたを切った。下関が砲撃され砲台は粉碎された。長州藩と列国は和議を結び、列国艦隊は横浜に帰港したのだが、なお下関には二―三の艦を留めて、和議の実行を監視したのであった。

幕府はそれらの艦が港外に出ることを促したが、これには応ぜず、さまざまな難題を出して幕府を苦しめるのであった。英公使パークスは下関から艦を撤収させようとするならば、山手屯営の築造を速やかに完成せよ、という難題を提出、幕府に迫った。この不合理な交換条件にたいして、幕府は要求に屈したのであった。



イギリス兵営と広場 (1870年) “市民グラフィコハマNo46”

屯所、総督住宅、炊事場、火薬庫、病院など三〇棟、延四、五九三坪（二万五、一八三・五平方メートル）、費用五万三、一五一兩二分。当時の横浜においては、実に広壮とした一群の建物が山手に出現したのであった。しかし、一時的な貸与のつもりは、明治八年にならなければ返還されなかったのである。

●約書——その上、外国側はこうしたことに輪をかけて、居留地を緊急に改造し、居留地安全の確保をすることが必要である、従って元治元年の約書をふまえて、再議すべきである、と英国公使パークスらは強硬に主張、遂に、慶応二年十一月、『横浜居留地改造及競馬場・墓地等約書』（第三回地所規則）が調印された。

日本側小栗上野介、柴田日向守、水野若狭守。外国側は英国のパークス、米国のファン・ファルケンボルグ、オランダのトデ・グラーフ・ファン・ポルスブルークであった。

この約書の内容は沿革編で述べたとおりだが、あくまで、列国居留民のためのものであった。

この約書は幕末には完全に実行されず、明治に入って二万七、四五〇坪（九・〇七ヘクタール）が追加埋立られた。新居留地といわれるもので、現在の山下町の一部に当たっている。

●居留地の拡大——その約書によって、元町、北方村、根岸村、中村の中間の丘を占める土地（現在の山手町）一帯をもつて山手居留地とするとされた。しかし幕府は、堀川から外へ外国人居留地が拡大されるのを避けて、これを容易に許可しなかった。

だが、旧居留地には次第に外国人が増加し、その上、洲干方面の各国領事館を建設する適地もなくなったことと、文久二年の、米国公使ハリスの要望を容れ、神奈川奉行所預入れの用地のうち六、〇〇〇余坪（約一・九八ヘクタール）を貸与、また前に述べた長州藩による馬関戦争の結果、英・仏両軍の駐屯を許した経緯もあったので、山手を居留地とすることを許可したのであった。

慶応二年（一八六六）二月、山手一〇番に英国公使館が五三七坪（一、七七五・二平方メートル）で建設されたのを始め、山手を中心に各国の領事館が立ちならんだ。

約書には、山手の地所については外国人は一カ年百坪に付一二ドルラル（ドル）の地租を払い、日本政府から外国人にこの約定の日より三カ月後に貸渡することとされ、翌三年には「山手競売規則」が制定され、その六月二十四日には第一回の競売が行われた。

明治三年（一八七〇）、英国技師の測量により施工された。この結果、市街地・公園・道路・掘割川の用地など総坪二二万三、七一一坪（約七〇・六ヘクタール）の土地を造成することとなった。土地はその後も増えてゆき、その大部分が競売された。明治七年九月現在では「地区数二四四区、その総坪二二万八、五三六・八五坪（七八・九ヘクタール）に達し、このほか総坪一万三、七二四坪（四・五ヘクタール）が未貸与地」（『横浜市史・第三巻下』）という状況になった。



居留地の境界石——昭和五十六年元町代官坂で発見されたもの

地代は約書のとおり一カ年百坪で一二ドルであったが、病院など何種類かは特別事情を持つ土地として地代を徴収しないで貸与された。いま山手がエキゾチズムに富む地域といわれるならば、実にこの頃の土地利用がその原形といえる。

慶応二年十月、末広町から出火した大火（豚屋火事）は少なからずこの第三回地所規則の締結と実施に影響を与えた。幕府との間にすすめられてきたこの約束は、実質的には明治政府に引継がれ、関内の沼地埋立・横浜・山手公園の造成、日本大通周辺の整備、川のしゅんせつ、居留地全般にわたる道路・下水道の整備などが新政府によって急ピッチですすめられてゆくことになる。

(2) 居留地の貿易

●居留地整備―横浜における外国人居留地は、慶応の約書によつて、もと太田屋新田沼地の埋立工事が実施され、明治元年にいたつて新居留地五万四、〇八一坪（約一七・九ヘクタール）が竣工した。幕府は慶応四年七月、さらに明治二年十一月、各国の領事を通じて、この土地を競売りの方法で貸付けようとしたが、湿地の埋立地で住宅に向きという理由から、外国人は好んで借地しようとする者がなかった。そこで、三年に水樋を設けて、排水を良くし、一面に盛土をして、住みやすい土地の造成を行った。

遊廓あとを造成した彼我公園（のちの横浜公園）の地続き、県庁裏手にあたり、その面積は二万四、八七五坪余（約八・二ヘクタール）となった。総費用二万二、四九一両を要した。工事は当

時燈台寮のお雇い外人プラントンに委嘱された。プラントンは「外国人居住の構造・数量を調査、適切に雨水と館内の汚水とのはけを良くするため、口径五寸（一五センチメートル）又は七寸あまりの瓦管を伏込み、寸法の同じ中央の下水本管に通ずるよう敷設した」（『神奈川県史料・第二巻』）のであった。

そして四―五年にわたつて排水工事、道路の整備などが行われた。川も川幅の拡幅、川底の掘り下げが行われた。ほこりっぽく狭い道路は急速に幅広く清潔な道路となった。そして洋式建築の商館や外国人の宿泊所（ホテル）などが次々と建てられていった。

●町並み―改造成つた居留地（山下町）は明治に入つてから、貿易の町としてますますにぎわいを見せていった。

そして外国人相互の自治的組織も結成されて、いよいよ居留地は、その整備とともに植民地的な傾向を現してゆくのであった。明治五年（一八七二）九月二十九日高島嘉右衛門らによつて、わが国はじめてのガス灯が関内では三百灯に点灯されたが、土地の整備中の山下町では数灯と、遅れをみせた。しかし八年五月には灯が街を照らすことになった。

六年九月には、来朝の外国人のために、横浜第一の規模を誇るグランドホテルが二十番に開業して、山下町海岸辺りは一段と外国人の町として体裁をととのえるようになった。

一方、日本政府が明治四年七月、清国と修好条約や通商章程を結んだことによつて、十年には大清理事府が一三五番（現、山下



横浜異人館之図

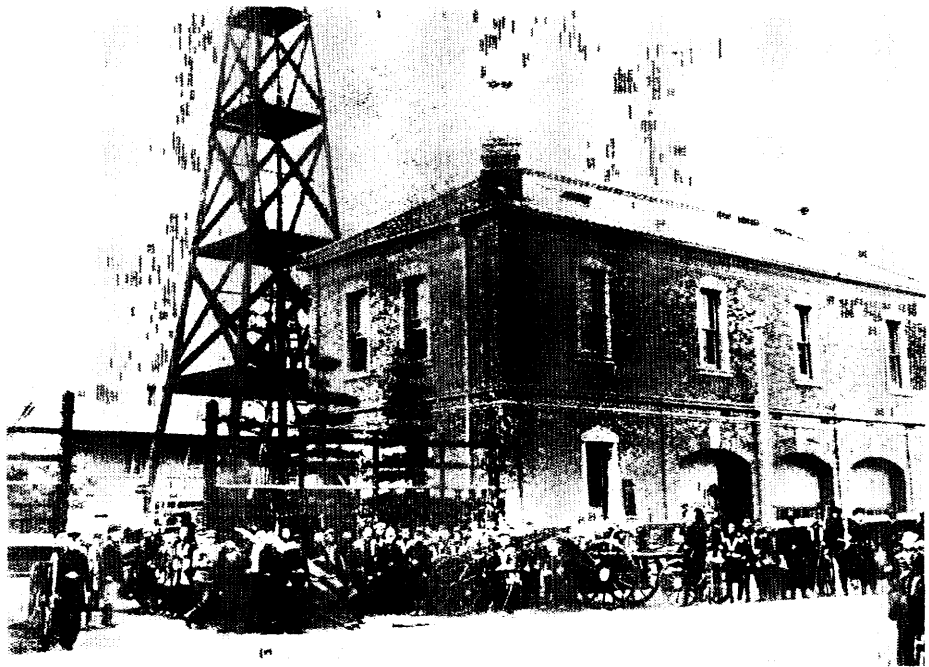
町公園)に設けられ、領事も赴任してきた。

●上町・下町——こうした国際的な取りきめと相まって、清国人の街には、中国本土から知人を頼って来日する者が多くなっていた。その人々は海産物の売込み商人、華僑を客とする日用雑貨の商人たちであった。

このため、西洋人を主体とする海岸通り一帯を上町、東洋人を中心とする地区を下町というように、地域の区分がかなりはっきりするようになった。

こうした居留地内では、生糸と茶を主流とする貿易の取引が盛んに行われ、輸出用の煎茶工場のお茶場が盛大に稼働した。そしてそれは「生糸と茶は横浜の経済を語り、市況を左右する唯一無二の輸出品であった」(『横浜市史稿・産業編』)が、しかしその取引は前章の関内地区で述べたようにいわゆる居留地貿易といわれる一方的なもので、日本商人は一方的に不利な取引を強いられていたのであった。外国商人と日本人売込商人が取引の際、その仲に立っていたのが、低かならぬこの地区の清国人たちであった。

●居留地消防隊——商館は軒をならべ、貿易は盛大の一途をたどっていたが、居留地の外国商人は、倉庫内の多量の商品の火災を極度に恐れていた。すでに外国人居留地の自治が始まっていたなかで、万延年間、外国人たちは、自衛のためポンプを購入、出火に備えていたが、操作員の下に肝心な下働きがいなかったことから、オランダ八番館雇人増田万吉が選ばれ雇われた。日本人七人の頭



薩摩町消防屯所——現在の中消防署日本大通出張所位置にあたる(石橋ロク氏提供)

となつて、以来、居留地消防組の発足を見ることになつた。一方慶応に入ると、英国側では、デビスを中心に私設消防団が編成され江戸高輪東漸寺の雇人で、東漸寺事件の際、英国公使オールコックを救出したという石橋六之助が雇われて、その頭となつてゐた。

明治元年になつて横浜の消防区画を制定する際、居留地は単独に消防組を組織することになり、万吉は居留地消防組頭取となつた。万吉はのちに清掃業のほかには潜水術を体得、神奈川沖での米国沈没船を引き揚げるなど、わが国潜水業の祖となつてゐる。明治三年、横浜にポンプを備えた消防の組織ができたとき、六之助は各隊の総頭取に任命された。明治十四年、オーストラリア人ニコラ・モルギンが来日すると、六之助は居留地だけの薩摩町消防頭取となり、大いに活躍することになる。

「六之助の消防隊は『そらゴミ六（六之助の通称）のポンプがききた。火は消えるぞ』といわれるほど信用があつたものですが、やはり火の中へ簡先もつて飛びこんでいかなきゃ火は消えないんだ。火という奴は水が一番きらいなんだよ。なにけがするつて、なにをぬかすんだ、けがすることのきらいな野郎にゃ消防はできないんだい。そんなやつあ家におとなしくひっこんでろ」といつた調子だつたようです」（石橋ロク談 男氣買われたゴミ六『横浜今昔』）

六之助と万吉とはこの間には確執が続いてゐたが、この確執は明治十六年になつて、モルギンの仲介で、両者はようやく合同、

両名社と称し、消防と塵芥清掃請負を後まで業とすることになつた。

この両者の確執の原因は、共に居留地の塵芥清掃という同業の作業上のもつれもあつたようだが、その際には、イギリスとオランダ兩國の居留地内での勢力争いがからんでゐたからといわれる。

●教会・女子教育揺らん——こうした居留地改正にはじまる横浜居留地（現、山下町方面）の一連の変化のなかで、山手外国人居留地も明治に入ると、外国人の定着化にともない、発展的な施設の新設が相次いだ。

明治三年には、山手居留地内に外国人取締局が設置され、山手の丘のほずれには、四年五月、六、七一八坪（二万二、二〇八・三平方メートル）が貸与されて外国人の公園（のちの山手公園）が開設され、この年の八月、山手四八番には、ブライン、クロスビー、ピアソンの三婦人によって、ミッシェン・ホームが建設された。これは外国人商人と日本女性との間に生れた混血児の保護と教育を目的としたが、所期の目的に反して発展することなく、むしろ英語を習得したいと希望する男女が多く、初めは男女共学であつたが、翌五年、山手二二二番に日本婦女英学校として開校してゆくのであつた（のちの共立女学校の前身となつた）。

五年十二月、宣教師ブラウンは山手三三番の自宅において、日本人子女のために英語、歴史、数学、物理、神学を教授する家塾



フェリス女学校の女学生（大正初期）〈落合辰五郎氏提供〉

を開いた。さらにフランス人マリー・ジェスラン、ラクロットらによって董女学院が建設された（明治九年頃までつづく）。

六年（一八七二）ジョン・サン・ゴープル、N・ブラウンなどの宣教師によって、七五番に教会堂が建設された。これまたわが国におけるバプテスタの発祥となった。いま元町代官坂石川家の前の、路傍には「日本バプテスタ発祥之地」と刻まれた碑がひそやかに建てられている。

さらに、一七八番には八年六月、ヘボン博士夫人によって、一階建大小一四教室、五〇人を収容する家塾が建設された。これはすでに明治三年夫人によって日本人女子のために設立され、五年には野毛山に移転、さらにこの山手に移ってきて開かれたものであった（のちのフェリス女学院）。これらにより、わが国の女子教育が、この山手の地に生まれたとさえいえる。

そして十年（一八七七）には、二二三番にメソジスト派の宣教師コクレイによって会堂が建設された。この会堂は十二年になると神学生養成のための美会神学校と変り、十五年には東京築地に移って、東京築地英和学校と称し、さらに青山南町に移って、のちの青山学院の発祥となった。

山手居留地の明治初期は、こうして女子教育揺らんの地として、さらにキリスト教教会の創設がつづくように、外国人自らの手によって、外国の思潮が確実に根を下してゆくのであった。

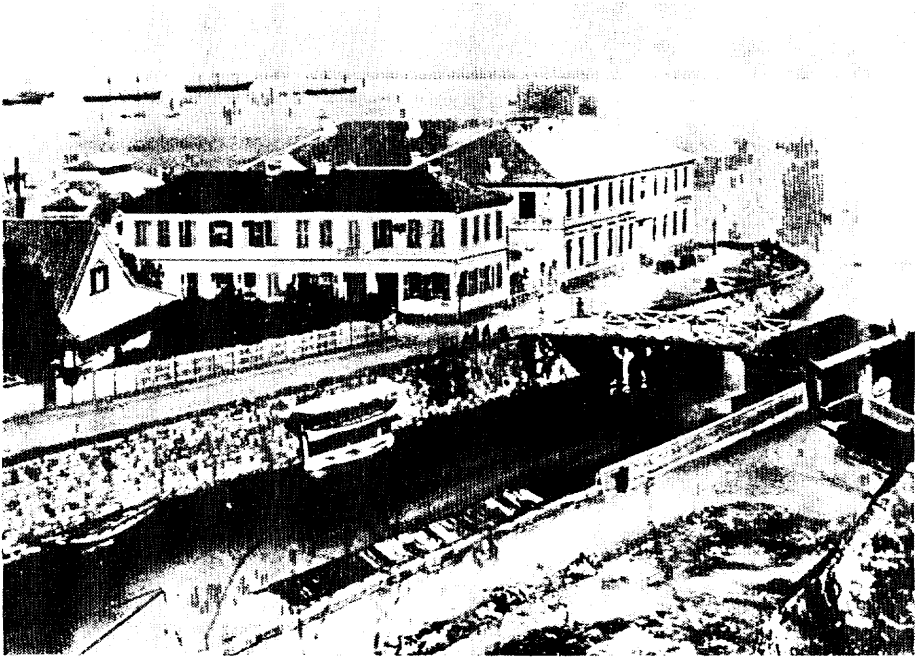
●居座り―こうした間、山手の丘の最も眺望のよい地点に駐屯

していた、英・仏両国の兵舎ほかの建物が明治八年になってようやく撤去されることとなった。この両国軍隊の駐屯は、前に述べたように、文久年間の馬関戦争発火を口実として、自国居留民保護の名目をもって強行されたもので、明治八年にいたる間、執拗なまでの居座りがつづけられてきたものであった。しかも明治三十二年（一八九九）の居留地撤廃後も山手や山下は永代借地権が残り、国際問題として尾を引き、土地が市民の手に戻るのは、実に明治も四十年代に入ってからとなる。

●三十力町——すっかり街並みがととのった横浜居留地内には、明治十二年一月に阿波町、上田町、蝦夷町、越後町、大坂町、小田原町、尾張町、海岸通、加賀町、角町、九州町、京町、神戸町、薩摩町、駿河町、長崎町、日本大通、函館町、花園町、琵琶町、富士山町、二子町、豊後町、堀川町、本町通、本村通、前橋町、水町通、武蔵町、武蔵横町の三〇力町が命名された。

これらの町名はいま加賀町警察署、薩摩町のバス停留所名、そして日本電信電話公社横浜営業所所管の電話線の支線名には、尾張町・越後町として、旧町名がいまに到っても使われている。

●租界地——こうして町名がつけられ、雑居禁止令が解除になつて、町は単に外国人だけのものでなくなつた感があつたが、依然として外国人の多くは独自の商業活動のなかにあつたとともに、自己の利権主張をつづけているのであった。ここの外国人居留地はまさに上海における租界地そのものの様であつた。



居留地と谷戸橋——川は堀川、左手、入母屋の屋根はへボン邸

明治十二（一八七九）年四月、神奈川県は政府に次の伺を立てているが、これは当時の状況を容易に想像させてくれる。

「居留地一六四番のフランス人トウルルは地租を納めず、しばしばの督促にも応じなかった。その理由は、同人が居住している前田橋通の地下水から悪臭が出て健康上に悪い、そのためとうてい居住できない、従ってこれを予防してくれば租税全部を支払うといっている。神奈川県は領事に訴え、領事から滞納の地租は支払ってもらったが、たしかに下水の悪臭はひどく、特にあたたかい四月ともなればその臭さはますますひどい。領事は一八二間余の下水全部に石蓋をかぶせよといってきたているが、四千余円と費用がかさみ、しかも他の工事の代金を支払わなければならない、木の蓋で工事をするにしたので、宜敷いかと政府に伺っている。この結果、了承を得た」〔神奈川県史料・二巻〕より〕

●**氣くばり**——さらに県は、居留地の維持管理には、特に氣をつかっていた。例えば、次のことにもうかがえる。

「明治十三年六月の指令によって、居留地税関前より同一番館前までの道路。遊歩道のうち元町一丁目より五丁目までの道路・下水の修繕。石川町一丁目より三丁目までの道路・下水の修繕。山手居留地の道路・下水修繕が行われた、二、七三九円三銭二厘六毛がその費用であった。」〔前掲書〕

と言った様なこまごまとした報告を政府に送っていることでもわかる。

「それに、前に述べた様に、明治三年、居留地改正にともない、お雇外人プラントンによって敷設された下水管は、すでに十年以上も使われ、その上、外国人居留館は増加し、不完全な下水となつてしまつた。従つて下水の量も多くなり、管も壊われている。各館の厨房からの汚物で、円形の管をふさいでしまつている状況なつた。止むを得ず明治十三年七月以降は各館の下水を、中央と管へ接続するような、新規工事を差止め、汚物流通の方法を調査していたところ、九月になつて英人レンニーという者が新築した自宅の下水を、中央水管に接ぎたいと申し入れてきたので、このような理由を申し述べたが、今度は公使へ直接苦情を入れたのであつた。

こうしたことから、国からは検査員が派遣され、実地検査が行われた。結局は改修されたが、このため十六年六月には工事費の支出は目的金七万六、三二七円二五銭、追加分六、三三三円四三銭であつた」〔前掲書〕

或いは外国人居留地と日本大通との境界には樹木が植えられて年々管理が行われていたが、十五年（一八八二）十二月二十三日県庁からの出火によつて、ほとんど枯れる状況となつた。といったように、樹木にいたるまでゆきとどいた管理が行われていたのであつた。

●**苦渋**——しかしこうした外国人居留地に対する県の氣くばりにもかかわらず、一つの事件が起つた。オランダ人エドワルド・シ



下水管——中土木事務所前にある。

ユネルにかかわるもので、期限がすぎても借地料を支払わなかった事実が原因であった。明治十九年八月、県は、知事沖守固の名のもとに、明治六年居留地一六九番を一年間洋銀八〇ドル八〇セントの地代で貸渡した。この際、地券には地代の支払義務が記載され、これに違背するとき、この土地にある家屋は日本政府の所有となることも記載されているが、借地料支払を怠っていると

て、登録の取消しと土地建物の引渡しを要求する訴状を、オランダ領事庁裁判局判断に提出した。判決は翌二十年日本側の勝訴となったが、外国人居留地にたいする県（政府）の苦渋の一端を示したものであった。

明治十七年（一八八四）山手外国人居留地内には、泉町、稲荷町、内台坂、大丸坂、貝殻坂、公園坂、小坂町、汐汲坂、撞木



居留地の外国人住宅（1870年）



—山手の後方（1873年）



—山手の家（1874年）

町、陣屋町、諏訪町通、高田坂、環町、地蔵坂、西坂町、西野坂、畑町、林町、富士見町、南坂、三ノ輪坂、宮脇坂、谷戸坂通、矢ノ根町、山手本通、弓町の二六の町名がつけられた。前にもふれたが電話線の名称に稲荷町支線とあるが、これはこのときの町名をそのまま受け継いだものである。

さてこうしたさなか、居留地内では、不利な条件の居留地貿易が相変らず行われていた。かねてからこの不利を打破しようとする日本人商人は、前の章で述べたように、外国に対する商権回復への努力が重ねられていった。これら一連の施策の結果、貿易取引の正常化が次第に図られてゆくのであった。

しかし居留地山下町の清国人たちは、欧米の外国人と日本人との間であって、買弁、或いはカンブとあって、その実権を握っていたので、商品取引の動きを左右することしばしばであったといわれ、陰の取引人であった。

●お茶場——さらに明治二十年（一八八七）前後、お茶場は居留地を中心として、二〇数軒あまりとなり、三〇軒ほどの売込商が出現した。

お茶場は『横浜市史稿・産業編』によれば、文久二年江戸で茶商を営んでいた伊勢屋藤兵衛が北仲通りに移って売込みをはじめたもので、海外の需要が急にふえ、慶応の末年には、スミス・ペーカー商会、モリソン商会などの製茶買入れ専門の外国商館が、大々的に取扱いを開始して、巴屋藤兵衛、岡野屋利兵衛などの売

込み商が盛んに取引をするようになった。

茶は、日本国内の産地から十分に乾燥されたものが横浜の問題に集まり、海外の評判もよかった。ところが評判がよくなると、産地の製茶法にデタラメなものが出て、湿気や加熱の具合で変質するケースも増してきた。そこで、横浜に集荷され、輸出品とするために、再び焙（ばい）じる必要からお茶場が出来たのであった。

この製茶貿易は、生産地から横浜に運ばれ、横浜で加工し輸出するという、貿易の都市としても理想的な形をとった最初の輸出営業であったが、この再製・加工の実権はほとんど外国人の手にぎられていた。

多数の男女を雇入れて輸出茶を製造する工場は、茶屋敷の隣地や付近に、石造で広大な建物を建て、一工場の焙（ばい）数は三〇〇以上のところもあった。少ないところでも一〇〇を下らず、この二〇軒あまりの茶屋敷での炉の数は、五、〇〇〇釜を数えたほどであった。（『横浜市史稿・産業編』より）

しかし、お茶場での労働は苛酷であった。

「お茶場は熱気でむんむんしていて、さながら焦熱地獄といえるほどいつも暑かった。再製茶をほうじるときは紺青、黄土、藍青などの色素をまぜ、これにろうを加えてつやを出したもので、ほんとうに青いきれいなお茶だった……。材料に使う粉末のためアネさんかぶりの女工さんたちの顔は一樣に茶いぶりに色づけられて、あやしいまでに青く光り、哀しいお茶場歌など歌って茶をか



茶の店先取引風景——“皇国製茶図会”より

きまわしている姿は焦熱地獄の感じを余計こくしていた」（西村栄之助「女工の哀歌に明け暮れた——お茶場」『横浜今昔』）

お茶場は大棧橋の入口の英一、香港上海銀行の英二など、二〇教館あつたと言う。

このような茶の輸出について現在、これを偲しのべるものはほとんどない。

さて茶の製品は輸出するのに木箱につめる。木箱にはラベルを貼はった。関内の本町ほか中央部からはずれた日本人街では、木箱師、刷師、経師屋というように、今でいう分業システムで行われた。輸出にたずさわる者も多かった。ラベルには茶園の有様、精製場の内景、名勝地の風景風俗などと外国文字が木版で刷られていた。貿易品としての体裁もとのえられていたのであった。

●商館風俗——明治十年代、ますます貿易盛況のなかで、横浜居留地も当然外国人の定着と発展をみせていた。

「明治十八・九年頃の横浜は、諸国から移住して落付かない人々の集まりでもあった。従って金が口を利く世界だから、人に尊敬されるには衣服を飾る必要があつたと見えて、皆立派な服装をして見栄を張る。当時東京の商店では、番頭が綿服に木綿の前垂を掛けて居たが、横浜では絹物を着て毛織の前掛を掛ける。外国商館の番頭の風俗が一番気がきいて贅沢なものであった。東京の風俗が段々贅沢にもなり、社会一般の設備が進歩したのも、横浜が先駆をなして居ると言っても差支えない。商館番頭の風俗といえ

ば、絹の衣服に角帯で絹の前垂雪駄ばき又は靴で尻ばしより、高価な帽子を冠るのが常で、それでなければ洋服である。袴を穿いた人などは百人に一人も通らぬ」(森無黄『私の居た頃の横浜』)

●中国料理店街の成立——この居留地裏を中心として居住していた清国人も、この頃になると、ほぼ完全な街区のなかに定着したようであった。そのうえ朝夕は飯店、昼は輸入関係というように、大方の店は兼業であったようだが、次第に食料品、織雑品などの輸入商が発生し専門化するにつれて、業種も分れ、さらに洋服、家具商などが発生したことによって、飯店も独立の営業形態を持つようになっていった。これが今日の料理店街の始めとなる。

一方、上町といわれる地域、即ち西欧人の地域は『横浜沿革誌』によれば、明治二十五年(一八九二)四月、外国商館は生糸買入商館が三〇、製茶買入商館一三で、国別では、生糸買入商館は、イギリス一四、アメリカ六、フランス五、その他の国々ではイタリア、ドイツが加わっているとして、製茶の買入商館数でもイギリス六、アメリカ四であったが、このほとんどの商館は海岸通りの地域にあった。

清国人居住区も二十七年頃には、人口は三、〇〇〇人を数えた(『横浜市史稿・風俗編』)というが、二十七年の日清戦争の勃発によって、このうち約五〇〇人が居残ったほかは、本国に引き揚げ、街は灯の消えたようになった。戦争が終ると、ふたたび横浜らしさにもどり、戦前に復することになった。清国人居住地について

は『横浜市史稿・風俗編』によれば、日清戦争前後の十年間を完成期と見ているようだが、「最も殷盛な街区は、百四三番から百五四番に亘る前橋町通りの両側と、夫れに続く裏町横町の一廓で、其表通りは赤煉瓦二階建の商家が並び、其他の横町や露路は、棟割りの大小雑多な陋屋で埋まって居る。

表通りの赤い煉瓦家の軒先や、店の内外を掩ふ金銀銅色の彫刻の装ひ、五色に彩られた看板、暗い硝子障子の裡の極彩色の雑貨、七面鳥や家鴨の卵、鱈の鰭、軒に吊した豚の肉塊と曝し首、其脇に掛けてある青龍刀の様な包丁、彫刻を施した椅子に長煙管を啣へて店頭に悠然と腰を卸し、雲雀籠に見入る好々爺、さうした走馬燈に似た雑然たる景観の表通りを、一步裏町に足を踏入れて見ると、脂の醜態と大蒜の重厚な臭さとに埋まって居る裡に……胡弓の音が夕陽に映ゆる色硝子の窓から漏れる。日清戦役後、上海あたりから進出した芸妓も来て、胡弓の音も優美に、裏町の夜更けに一情景を浮べて居た。それから此町の唯一の教育機関である大同学校の校庭には、駄菓子など商ふ小店が両三軒並んで居るのも、異色ある風景であった」とある。

●条約改正とあと処置——一方国家的には、日清戦争後、国威発揚にもなつて、英国との間の治外法権撤廃を目的とする条約改正の外交交渉が陸奥外務大臣らによってすすめられた。その成果は、明治三十二(一八九九)年七月に、条約改正が実施されたことである。これによって、外国人居留地はすべて撤廃され、日本

の市区に編入された。このことは横浜市だけでなく、同じ居留地を持った大阪市や神戸市にとっても、待ち望んだ朗報であった。

この年の八月、条約改正実施を祝う大園遊会が横浜公園で開かれ、梅田市長、渡辺市会議長がそれぞれ祝辞を述べた。市をあげて祝福したのであった。さらに撤廃後の処理として、山手町・山下町が独立の学区とされ、もとの居留地内一四六灯のガス灯代金を市瓦斯局が負担することを決定した。

そして、政府は、外交関係の円滑を図るため、これまですべて国費でまかっていた居留地維持行政費を市費にゆだねずに、横浜市に国庫補助金として支出することにして、山手町ほか六カ町の特別財政の創設が行われた。

さらにこの年の七月二十四日山手外国人居留地の三六カ町、外国人居留地三〇カ町が廃止され、山手町、山下町と町名が改正された。新町名はまさに旧来を一新したかに見えた。

●永代借地権問題―しかしながら居留地はすべて撤廃されたものの、永代借地権は有効とされた。そして外国人は永代借地に関して日本政府が現状維持を認めた以上、借地料以外は賦課すべきではない、と主張したことによって、後年に禍根を残してゆくのである。

このときの永代借地面積は、山下町が一二万九、〇六三坪（四二・七ヘクタール）、山手町が一九万七、二七一坪（六五・二ヘク

タール）であり、借地料は一カ年当り山下町三万六、一〇五四、山手町が三万三、六五二円であった。（『横浜市会史・第一巻』）

明治三十五年八月、イギリス・ドイツ・フランス三国は、永代借地権地にある建物などの課税をしているとして、日本を相手どりヘーグ国際仲裁所に提訴したのであった。だが三十八年五月十二日判決は下され、日本は敗訴となった。すなわち永代借地権地にある建物に関する一切の租税賦課を免除すべし、と決定されたのであった。この年の十一月、内務大臣からの訓令により、すでに徴収した家屋税は年五分の利息をつけて返還、将来一切賦課しないこととされたのであった。それ以来、百万円規模の当時の市税収の上で、重要な懸案事項とされていた。このことが大正元年頃から市会で問題視され、二年永代借地権の解消と在留外国人の徴税について意見書が提出されたのであった。

当時の荒川市長は、たとえ家屋税は徴収できないとしても、他の税を納めない理由はないとし、市会では自治体の当然の権利として、断固強制執行を行うべしと決議した。しかし政府からは諸外国と交渉中であり、当分の間、強制手段の実行は見合すようにとの通牒つうはくや内訓があつて、市としては板ばさみとなり、滞納処分ちゅうなごに手をつけることができないうままであつたが、大正元年になって政府から国際関係、日英同盟の手前があるので、市税徴収を従来通りにせよと通達されたのであった。この通達は決定的なものであつた。

政府は、のちの大正四年から、横浜市にたいしてだけ補給金を交付してきたが、もとより市税が徴収できないために、大正十二年では、滞納額から補給金を差引いても、なお累計二九五万七、六五二円の滞納が出る始末であった。

こうしたなかにおいて、関東大震災に、見舞われるのであった。

(3) 永代借地権

●商館の飾窓——条約改正が行われ、永代借地権が残ったこの地区、山下町は依然として貿易は盛んであった。山下町海岸（現、山下公園）には商館がひしめいていた。

そして、旧居留地の形態は色濃くこの町には残されていた。「三間ばかりある飾窓が、これがまた古風を極めてゐる、繩の形に彫刻した門型が三個並んでゐる、硝子が下から上へと七分どほりと謂ふもの灰色に塗り潰してある、さては窓飾は廃したのかと思ふと、上の方の三分ばかりは窓硝子らしい明るさを見てゐる、恐らく、横浜にある数もしきれない飾窓の中で、この窓ぐらゐ古典式のはどこの家にもない、それで二階の窓が白海鼠、西洋の古風と日本の古風とで出来あがってゐる」（磯萍水「地底の門」『吉備暖語』）

詩人佐藤惣之助も次のように描いている。

●開化のなごり——「私が横浜を知ったのは、明治三十年頃から



海から見た居留地海岸通〈横浜市図書館提供〉

であつた。商館番頭たちは洒落れてハマとよんでゐた。そして東京をトーケーといつた。老人達の唇にはまだ鮮かに『文明開化』といふ言葉が踊つてゐて、開化服、開化踊、開化井などといふふしぎな産物が市井に存在してゐた。

それから『二十世紀』という流行語が、人々のおしゃべりの中へ飛びこんで来た。『二十世紀の世の中だ。』『二十世紀の人間ぢやないか。』といふ、七つか八つの私は、二十世紀とは電気や瓦斯のことかと思つた。二十世紀と云はれるとパツと明るい街がすぐ想像された。『今日は半ドンだ。』すると明日は『ドンタク。』だといふことが、一年生の私にも解つた。『シャッポ。』や『ドールン。』や『テレスコープ。』も解つて来た。叔母の家が、今の境町、公園の前のお茶場の横にあつたから、正面税関の大通りから吹いてくる外国の国旗の風や、その生活様式をはっきりと観察することが出来たやうに思へる。

清国商人の色のついた帽子の珊瑚玉が珍らしかつた。亜米利加人の男の金指輪、手の甲の赤毛と雀斑、褐色や亜麻色や金髪の英利細少女、青い眼、灰色の眼。それからふしぎな言葉、馬車、珈琲、銀貨、婦人服等々、田舎にゐてかつてみなかったものばかり見せられた。家の二階の露台には、薔薇、夾竹桃、赤梧桐、仙人掌の鉢。台所には西洋鍋、食器。店舗には菓子、電話機、瓦斯。そして家の前には街路樹の植込み、瓦斯燈。向ふは公園、チャブ屋。それに丸い棒を持った巡査、印度人の果物売等、幼い私

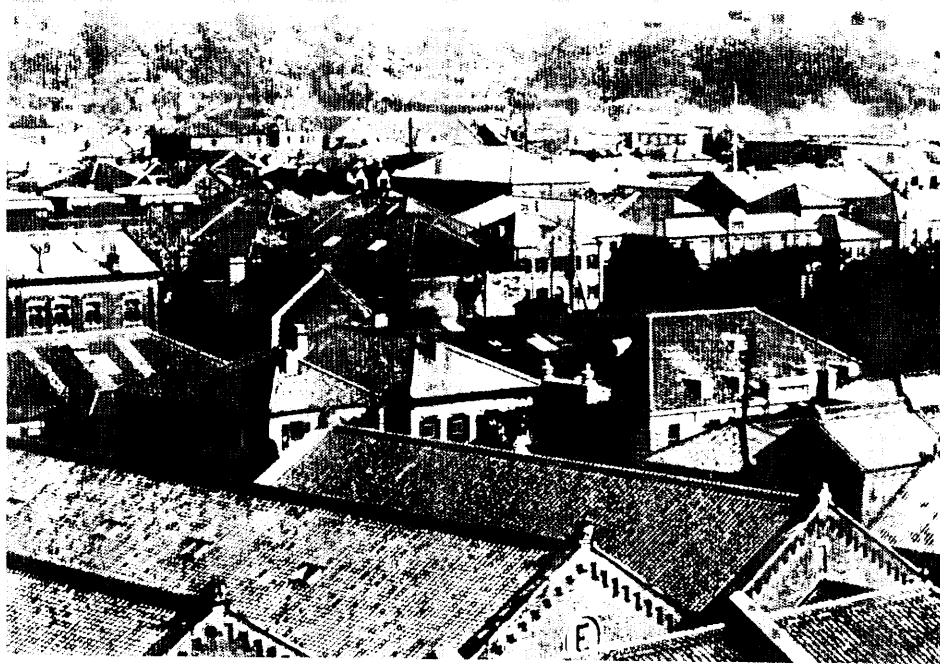
の視野をいたく驚かした。」(佐藤惣之助 横濱今昔記『改造』昭十・五)

●旧態――そして、作家藤子文六も次のように書いてゐる。

「店は、外人居留地のウオーター・ストリート(水町通り)の三五番地にあつた。父の死んだ時は、もう内地雑居令(外人の租界を認めない法律)の出た後で、居留地の名は、すでに失われているのだが、旧態のままだった。附近の建物も、ホテルとか、外人商社とか、領事館とか、ユダヤ人の菓子屋というようなものばかりだった。父の店は、海岸通りから、一側、次の通りの町角で、木と石を半々に使つた、二階洋館だった。

店の階下には、ハンカチ、肌着、ブラウス、バジヤマ、ガウン、絵日傘のような絹製品が、どれも、東洋的な刺繡や染め方で彩られ、ケースやガラス戸棚の中に、溢れていた。しかし、刺繡の壁掛けや屏風というような大物は、階上の陳列室にあつた。

また、ウオーター・ストリートには、ユダヤ人の菓子屋があり、店員に連れられて、そこへ行くと、主人の外人が、私の首へナプキンを巻いてくれ、店の中で、立ちながら、ケーキを食わされた。シュークリームとか、エクレアとかいう菓子は、この世のものとも思われないほど、美味だった。その頃には、東京の風月堂でも、その種のケーキはなかつた。その他、ドロップとか、シロップとかいうものも、東京の子供より早く味わい、その魅力に圧倒された。私が羊羹やカステラや、当時の子供の好物を、うま



居留地風景——右手は横浜公園、山手を望む

いと思わなかったのは、洋菓子の味を知って、香料の匂いに眩惑されたからだろう。

洋食の味も、父によって、覚えさせられた。横浜公園の中央に、社交クラブがあり、貿易や金融関係の人の集まる場所だったらしいが、そこは、居留外人クラブを継承しただけあって、すべてが洋風であり、洋食も評判だった。父は、時々、店へ出勤する途中に、私をそこへ連れて行き、午食を食わせてくれた。食堂は二階で、広い窓から、野球や蹴球のやれる、青い芝生が見えた。

それも、外人専用だったのが、法令改正で、日本人も使用できるようになって、間もない頃だった。その景色を眼下にして、純白のクロスのかかった円い卓で、父と対い合って、食事をするのが、非常にうれしかった。」(種子文六『父の乳』)

●山下町の街並み——また、この頃山下町については、次のような追憶もある。

一外国銀行といえは海岸通りにあったオリエンタル・ホテルはオリエンタル銀行の跡に建てられたものだが、これも震災でつぶれていまはニューグランドとブルースカイの間の空地になっている。チャタード銀行は現在のライジングサン石油会社の所にあつて、半円形に奥まった広い前庭があつた。赤レンガの建物で、現在の建物は震災後に新築された。旧チャタードの前には露清銀行が洋館の長屋の中にあつた。独亜銀行は加賀町警察署の官舎前の商館にあり、あとで薩摩町の角に移つたが、第一次世界大戦後震

災でつぶれ、いまはその地下室がスーベニヤの店になっている。

ナショナルシティ銀行の前身は居留地七五番にあったインターナショナル銀行で、後に新築移転したが、これも震災でつぶれ、現在のは再建築されたものである。香港上海銀行の入口は現在の裏手で、水町通りであって加賀町からまっすぐに突き当りのところにあつた。英国博物館式の石造建物で、道路から二間くらい下がつたところにあり玄関の前は大谷石を敷詰め、そこに人力車が両側に並んで群がっていた。

銀行の前の境界を年に一度、必ず鉄の柱と鎖で通行止めをした。それは居留地の永代借地権があるという意思表示にすぎないのであつたが――当時横浜正金でも為替相場を建てて取引していたが、香港上海銀行でも同様で、両銀行の間をプロカーが綱引きあと押し的人力車で勢いよく飛び回っていた。

(銀行は)一分一秒を争う職業だつたから無理もなかつたが、自然車夫の服装もキリリツとしたもので、向うはち巻きに紺の腹掛け、もも引きで刺し子のたびをはき、競馬の馬丁と同様の服装だつた。明治維新の志士のひとり、増島六一郎博士が銀行の顧問弁護士であつた関係から博士は月一、二回銀行に姿を現わした。そして支配人と談笑しているのだが、私はよくもあの小柄なからだから破れ鐘のような大きな声がでるものだと博士の話っぷりを感じて聞いていたものだ」(西山逸三「アシの町だつた中心地」『横浜今昔』)

●共存共栄のはじめ――明治三十二(一八九九)年七月、内地雑居禁止令が解除され、日本人もこの旧居留地内に居住ができるようになった。国権回復の一つであつた。このため、下町の住人は清国人と日本人、そして西洋人との混合となつて、この地域での大きな変化の一つを示していた。

ただし雑居禁止令解除の前にも、許可を得た日本人の居住が許されており、十二年にはすでに二七名が居住している。さらに四年後、十六年には無許可の者をふくめ居住者は二百名に及んでいる。

例えば地域の今泉家の場合、明治十二年二月、一一八番の土地を賃借し、十四年には借地権を得、二十二年五月にはその他の借

居留地海岸通風景(明治末期)



(大正初期)



(明治末期)



地権を競落^{ひらく}している。当時洋銀一ドルが日本札一円五十銭の相場だったとされているが、三十二年八月、条約改正の結果、自己の所有地にしたという。

こうした、雑居禁止令解除の山下町においては、日本人も多くこの地に居住、店舗を開く者も多く、外国人との共存共栄が始まった。この頃には絹物貿易にたずさわるインド人三〇人も来日、ますます国際化を深めてゆくことになった。

●チャブ屋——その国際色の一つのあらわれは、山下町がレクリエーションと享樂の場になったことであつた。

レクリエーションは、古くは条約により公園や競馬場やアスレチッククラブなどさまざまであつたが、この町に、大玉といわれたボートリング場、ニューグランド前にはボートハウスなどが造られ、港内で打ち揚げられる花火など、故国を離れて来たうきをはらすべき、外国人のためのレクリエーションであつた。

そして、明治末期にかけて、山下町にもチャブ屋（第八章本牧地区参照）ができた。波止場に近い山下町では、寄港する船員たちによって繁盛したのであつた。チャブ屋は一〇六番地から二三一番地にかけてならんでいたという。

「新会社の付近にはチャブ屋が多かつた。会社の前にはクリテリオン・ホテルというのがあつて、外人経営のもかなりあつたし、外人の売春婦もたくさんいた。全部で二百軒くらいはあつたらう。前田橋付近から横浜公園にかけてずらりと並んでいた。関東

大震災でみなやられてしまい、本牧へ移つたのだから本牧のチャブヤ以前あるいはチャブヤの先べんという時代だ。上下合せて三十坪くらいの木造二階建だが、いずれも洋館式で〇〇ホテルという看板に灯がともり、外国船員たちは入港のたびに波止場から一目散にとんできたものだ。なにしろ気の荒い水兵や船乗り相手の商売だし、女の方もしぜん強い、いわゆる、あねごタイプが多く、客に金がなくなるとポバイかいかりの入れ墨をしたホテルの主人が客のえりをつかんでボンと道路にほうり出す風景は子供心にもまでもよく覚えていゝる。南京街の中でメイン・ストリートの中華料理店街と並んでつねに活気があり、それだけ外貨もたんとかせいでいたわけだ」（村岡徹三「チャブヤのはしり」『横浜今昔』）

震災後、チャブ屋は官憲の取締りによって小港と大丸谷の地域に限って営業するようになり、山下町からチャブ屋は姿を消すことになる。山下町界限は外国艦隊などの入港の際、昼夜となく繁盛したが、外国人泥酔者がはい回し、また不良外国人が横行し、市民に迷惑をかける厄介な場所であつた。

こうしたなかでこの地区も大正に入つていった。明治以来、海岸寄りのいわゆる上町は、国際情勢の変化のなかにあつても、ますます貿易の町として続いていた。

●上町——「わたしは大正八年に山下にまいりましたが、山下町には日本の家屋というのはほとんどなかったですね。れんがと石造りの建物ばかりでした。それに倉庫が多くて、房州石を伐り

出して造ってましたね。

上町はほとんどが外国人の経営する商社で、日本字の看板はさらさなくて、全部英語ですね、丁度外国へいったと、同じようにね。

上町の方は万事外国式ですからね、十一時になると外人は山手の自宅へ馬車で帰って昼食です。二、三時間するともどってきて使用人の仕事ぶりをチェックするんです。日本人の使用人は唯いつけられたことだけをやっていけばいいんで、彼等のサイン一つでしたね」(山下町有志座談会というような談話のなかにも、この頃の様子をしのぶことができる。

こうした商館には、すでに明治初期から、その補助的或いは実務的に清国人がこれにたずさわっていたが、彼等は外国人と日本人との間に立って威をふるっていた。

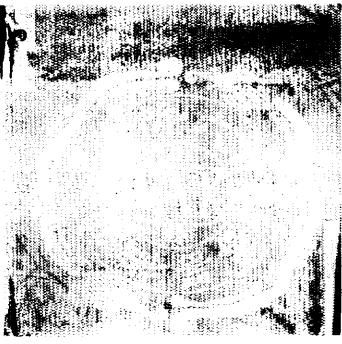
この商館番頭は、こうした旧状から脱して、商館の経営の中核に入ってゆくのも、明治末期から大正にかけてであった、としているが、いわば近代サラリーマンの発祥といえた。

商館には珍らしい商売もあり、サラリーマン生活の一端をのぞかせる。

「大正の頃、もとの居留地海岸寄りの一帯には食堂やそれらしいものもありませんでした。それで、居留地にある商館の人達がお昼を食べに行くと言っても大変なものですから、弁当屋というものがあって弁当を運んでいました。



商館番頭——山下町トーマス商会 <高橋榮蔵氏提供>



宣伝用の風呂敷(明治末期)
大貫寛治氏提供

私は弁当屋と呼んでいましたが、弁当をつくる訳ではないのです。商館に勤めている人達の家をまわって弁当を受け取り、お屋に配るということをやっていました。今でいう便利屋みたいなものです。車の床の低い小型の、まあ、荷車みたいなものを引いていましてね。車には、それぞれの家の名前を書いた木札をぶら下げていました。

一軒あたり、一カ月につきいくらという具合で請負っていました。私は部外者ですから料金のことは知りませんが、五十銭位だったんじゃないでしょうか。一円とは取らなかったはずですよ。

勿論、こういった所に依頼出来たのは、ある程度の地位の人達だったようですね。弁当箱は、今でもよくある瀬戸物の重ね鉢です。それを必ず木箱に納めて商館に運ぶんです」(野毛町 吉田衛談氏)

「各会社ごとに区分けされて事務の机の上に運ばれるといったもので、ハマのサラリーマンに腰弁当姿はぜんぜんみられなかった。こんな意味では東京人よりずっと小さいだった。弁当屋さんが遅れると皆腹をかかえて待つといった笑えぬ場面もよくあった」(村岡徹三「いきかう弁当姿」『横浜今昔』)

●下町——海岸寄りの商館街にたいする、いわゆる下町は中国の街そのものであった。街には中華料理の店が並び、大店はさほど多くはなかったが、裏通りにも並んでいて、そこには日本人も多く立寄った。横浜の名所であり、市民のおなかを満たすのであ

た。

「震災すこし前、料理屋がたくさんありましたけれど、今と違って店はずつと小さかったんです。日本人が経営している店もあるにはあったんですが、何といっても中国人の経営でした。つまりコックが向こうの人ですから、コック兼主人ということですよ。或る大店なんか仕入から料理もすべて主人でやり、初めは小さいところにおいて、三度目にあそこに大きく店を出したんです。町なかに日本人経営の間屋さんもまじっていましたね。市場通りは、中華料理に使う材料がいつも店に並んでいました。そしてそこには朝市がありましたね。いまの電話局の裏通り一帯は住いが多かったです。所々に外国人の商館がありました。そこに直接納品するような日本人商社はなかったようですよ。山下町にも、輸出品の木箱を作る箱屋さんが二、三軒あったようですよ。

中華の人がいたのは今の大通りを中心にしたそのまわりでしたが、前田橋通りは中華人が多く居て、軒並み簾を編んでいました。おもに藤椅子でしたが……。

前田橋のあの通りは本村通りとっていました。今の中華街のある通りは、昔からあのぐらいいのはばで別に広げた訳ではありませんが、道は特に立派ではなかったですね。学校の裏にお宮(関帝廟)があって、そこで幕なしの芝居をやっていました。どこが区切りか、何をやっているか、言葉がわからず、何もわからなかったですね」(山下町 新井市太郎氏談)

「昔山下町はほとんどが外人と中国人で、日本人は下の方に少し住んでいる程度でした。しかし、お茶場とか、印刷所とかの働き場が多かったため、山下町は活気のある町でした。屑糸を巻いて外国に送る。通称マケと呼ばれるものもあつたり、梱包屋も多かったものです。山下町には印刷屋も多かったですね。ジャパン・タイムスもここで始まったのですね。馬の金具を作る鍛冶屋もあちこちにありました。今の貯金局の所に大きな外国の鍛冶屋があり、その後、内田鉄工所になったんです。

山下町のお店は、何の店でもよく繁盛しました。服装は質素なものでしたが……。オグラベーカーも当時の主人が工夫をこらしまして、変ったパンなんか作って財をなしました。八百屋さんは二軒で、秦野屋と信濃屋でしたが、品物はトマト、パセリ、キャベツなど西洋野菜全部売っておりました。秦野屋さんの川島さんは別名「ニコピカさん」（ニコツと笑うと金兩がピカツと光るから）といわれ、大変なお金持ちでした。もうかって仕方なかったそうです。仕入は主に根岸からリヤカーで運んで来ましたが、競馬場のまわりが多かったそうです。根岸の一部にもアスバラガスのうねがズーとあって、ずい分作られてましたね。

この時代、山下町は非常に繁盛してました。レンガ造りの建物が多く、日本文字の看板はなく、ほとんど中国文字と英語でしたね……」（山下町有志座談会）

「その店は今でもありますが、震災前は、裏通りで小ぢやな店で

したね、それでも塩菜を主にしためんは、評判がすごくよくてうまかったですね。ところが、にわとりは放し飼いにしているわ、猫は店中歩きまわるはで……主間に落ちた肉の切れっぱしや麵のはし切れを、それらが食いにきてテーブルの下に寄ってくるのでに



山下町の街並み〈横浜市図書館提供〉



山下町の街並み〈横浜市図書館提供〉

わとりでも猫でもけとばしけとばしたべたもんです。

ところで、チャーシューと焼豚とは違っていて、チャーシューはくん製の初期のもの、焼豚はその名の通り焼いた肉でした。それに昔の中華まんじゅうは、鍋に油煙を入れて油をまぜてあんこを作るもんですから、あんこが黒々となりましたね、それに肉まんとうは、もともと料理の残り肉なんかを、まとめて入れて作ったものでしたね。少しばかりきたないんですが、これがまたおいしいものでしたね、勿論今は違います。

それと、料理の材料はすべて中国産をもっぱら使ったんですね、なまものは仕方がないので干物にしたのを使うという具合でしたね」(野毛町 吉田衛氏談)

これは中華街で胃の腑をみたした実例である。

こうした巷のなかに、商業活動は、一日も休むことなく行われ、資金のうごきもあつたのは当然であつた。そしてそこには中国人が登場する。次の談話がある。

●金の粉——「外国人はいつも貯金に来ておりました。その頃の一ドルは、一円八十銭から二円でした。その後浜口内閣の時に金に改定され、支払は全部金に統一されましたが、金貨が銀行では一円八十銭、札は二円で取り替えてくれました。金は目方がかかるので、運賃がそれだけ余分にかかり、札の方が高く取り替えられたそうです。

それで、山下町には両替屋がたくさんあつたんです。同じもの

でも、中国の両替屋に持って行くと、一円八十五銭で買ってくれました。中国の両替屋は、よそから五銭高く買った金貨を一晚中こするのです。すると、金貨のまわりのギザギザが取れて、金の粉が残ります。まわりがツルツルになった金貨を持って翌日銀行へ一円八十銭で売りに行くのです。銀行では一ドルは一ドルで、重さなどいちいち計りませんから少しばかり高く買つてもこすつて落とした金貨の粉の分だけで、高く買った額以上の儲けになります。こうして残したのでしょう。

彼らは金庫の中に、いつでも親指位の金の延べ棒を持っています。当時の銀行は、直接普通の人にはお金を貸さずに、「カンブ」といわれる中国人を仲立ちに入れ、その人から普通の人はお金を借りました。「カンブ」と呼ばれる人は、各銀行に一人か二人はおりました。銀行の中に店を張っていて、まあ銀行の代貸しをやったわけです。当時はナショナル銀行と香港上海銀行などでそんな制度がありまして、このカンブは金持でした。そして銀行のマネージャーが、カンブから、いくらかの上前をハネていたようです。お金は返す時にはカンブに返しましたが、なかなか借りるのは大変だったようです」(山下町有志座談会)

震災前、下町の商社、商店などは一三二店を数えたがうち、日本人経営は八一店で、多いのは生糸関係の貿易が一七店と同数の食料品だが、このうち九店までが食肉卸小売店で、中華料理との関係があつたことを示している。

華僑は二二店、うち五店は料理屋で中華料理は成昌楼、中華酒店、聘珍楼それに西洋料理蒸香号など。ほかにピアノ製造、藤椅子製造などがあつた。

西欧人の場合は生糸貿易や卸売業が大半を占めている。

●山手本通り―山下町がこうした国際色にあふれた地域で活気にわいた町並みとなったのに対して、山手の住宅地は、外国人の住宅地域として、相変らずの静かなたたずまいを見せていた。この状況は、明治中期から大正震災前までほとんど時間の経過を感じさせないようであつた。

明治がすぎ、大正と改元されても山手町には変らぬ外国人の生活があつた。これについて詳細な記録はないが、大正初期から、この山手に居住していた人は山手の一端を語る。

「この頃の山手は、今の様に隣りから隣りなんていうのではないんですよ。隣りの家に行くのにはいい加減いかなきゃ。あつちとびこつちとびでしてね。

私は谷戸坂の花屋につとめていまして、クリスマスとかイースターのようなとき、外人はほうぼうへ贈物をするんですよ。それを配達するとき一番困つたのはネ、次の家を聞くのに困るんですよ。何番の誰々なんてカードに書いてあるんですが、その番地に行つてどこの家に誰がいるかというのは全然わからないんですよ。それで表からベルを押すと外人の主人か奥さんが出るんですけどもおこられるんです。やつぱり裏に回つてきかないとネ……。

そいで裏に回つてアマさん（今でいうお手伝いさん）カコックさんに聞くと自分達の家にいる人はわかっているも、よそにいる人なんてわからないんですよ。だからまああの時分の山手つてゆう所はネ、不思議な所でしたね。不便てゆうか……まあその時分にヤ不便とは感じませんでしたけどネ」（山手町 安藤寅三氏談）

「わたしの母の話ですけど、山手という所は静かな所で昼間は森閑としていて、歩いている人は、アマさんが子守りをしていた位で……夜は恐いようでした。家の母はフェリスに行つてたんですが、これだけの距離ですが、学校が遅くなりまして、上の通りは危ないといふのでわざわざ下の元町に降りて、元町からにぎやかな坂を上つて帰つてきたとゆうんですね」（山手町 中山嘉子氏談）

「本当に静かなとこでしたよ。森の中を歩いてるみたいですよ。あの時分から見れば今は木が少なくなりまして。

アマさんとカコックさんとかは住み込みでしたよ。多いとこじや一軒にコックさんが二人、アマさんが三、四人もいました。こんなにて何するんだらうと思う位ね。外人屋敷では、食料品とか雑貨とかツケで買物をした場合、店ではその請求書を必ずコックさんとかアマさんに持つてゆくんです。それをこの人たちがとりまとめ、金額をトータルして、今月はこれだけ請求がきてますつてゆつて、それだけ外国人の主人から金をもらうんです。そうすると、それを店に支払いして歩くんですが、必ずそこでリベートを取られるんです。リベートを出さないと次からその店では買



山下のゲーテ座（明治二、三年）市民クラブヨコハマNo.45より

つてくれないんです。でないと店を替えたり、あたしは知らないよってやられちゃうんですよ。だから、必ずリベートを出さなきゃならないんです。それが大変でしたよネ、まア一軒や二軒じゃないんですから。あらゆる商人からですからね。

そのリベートも一率とゆうのではなくアマさんやコックさんによつて違うんです。一割をとるのも居れば五分しかとらないってゆうのもある。勿論、その主人や奥さんはそういう事は一切ノータッチでしたですけどね。」(山手町 安藤寅三氏談)

●消防の馬——「ゲーター座の近所はやはり住宅ばかりで、人力で坂を上って、音楽会とか芝居を楽しんだということですね。もちろん、商売の店は全然ありませんでしたね。

今の税関宿舎のところはアメリカの海軍病院だったの。それは大震災までありました。イギリス病院ってゆうのは今のアメリカの日本語研修所あたりにあったのがそれですね。

代官坂を上った所に、もと交番がありました、その裏、トンネルを出て少し右に上った所に、山手警察署があったんです、震災でつぶれて本牧へ行っちゃったんですが、ですからどこへ行っても山手警察署というんですよ。いま病院といいましたが、あの頃はほとんど平の家(平家)で広い庭のはじっこに建てられてて大震災の時はみんなここに避難したんです。

今のような消防署はなくて、イギリス館の前に消防の屯所があったんですが、そこには馬がいましたネ。それは外国人がつくつ

たもので、日本人を雇ってやってみました。そのポンプが朝から晩まで薪を燃やし通しなんですよ。年中薪もやしてんの。それでいざってゆうとチリンチリンやりながら馬が引っぱってくの。その馬も働かずエサばかり食べてるので肥っちゃったなんて話もありましたねえ。

ワシン坂の方も住宅がボツボツあった程度で、小港へおる道がすごい森だったですね」(山手町 有志座談会)

●谷戸坂——こうした山手町を山下町とつなぐ至近通路は、堀川にかけられた谷戸橋と谷戸坂であった。大正震災前までのこの谷戸坂について、地元の人は次のように語っている。

「あの谷戸坂の地形は震災前とおんなじですね。裏坂も表坂もまったく同じですよ。震災前谷戸坂は、坂の途中位なところからみんな表通りを店にしました、坂にそってずうっと店があったんです。いま坂の途中にマンションがありますが、あそこあたりから下が家があっただけで、上には家がなかったんです。

裏坂は昔とちつとも変わっていませんが、階段が今よりも下からずーと階段になっていたのが違う位のもですね。

それにフランス山のあたりが平らでそこから少し上ったところは一段又高くなって、その上に行くと又一段高くなってました。

坂の途中の店は表からだと一階なのですが、裏から見ると三階ですから地下に二階があるようなものでした。段々にしておか

谷戸坂

(明治末期)



(現在)

いと家が造れないのですね。」(山手町 有志座談会)

●外人は花―「表通りの店屋つてゆうのは全部外人相手でした。それからドレスと靴を売る洋品の店。それからずっと下の方に外人相手の葬儀屋がありました。

それにこの坂には花屋さんが四軒あったんです。富士屋、田島屋、朝日屋、それから飯島、それでも外人相手に商売がやってゆけたんです。普通の生活のなかで外人は花ですもの、生れたときから死ぬときまで花ですものね……。

私も花屋にいて知ってるんですが日本の花は全然扱わないの。その時分から日本花屋と洋花屋と区分があったんです。ですから葬儀の時なんか向うの人は必ず花輪を使うんです。丸いのネ、ところが日本花屋じゃそういうものができないんです。どうやってこしらえるんだか作ったことがないって。その替りに洋花屋は仏様の花ができないんです。

商ってる人はどちらも日本人ですけどネ。洋花屋のおばあさんでも外人相手に英語をべらべらしゃべるんですよ。それでその店の親戚に大学行ってる子がいてネ、びっくりして英語を習いたいから使ってくれて来たんですけど、大学で習った英語じゃ外人には通じないんです」(山手町 安藤寅三氏談)

●外人商売―「私しんとこの前にも銅工屋さんがあってネ、普段大した仕事がないので、何やってるかってゆうと、煙突掃除やってんだ。外国人の家じゃコック雇ってもらういろんな料理なん

で、大きな煙突があるんだ。その煙突掃除をコックさんが朝使う前にしとくんです。だから毎日グルグル回って歩いてやっていました。結構それがいい商売になってたんですね。

そして坂の一番上には本屋さんがありました。外人を相手にした洋書専門です。十字屋つてゆう名前が日本人の経営でした。

元は谷戸坂はメインストリートで賑やかでした。山下町の商館へは、昼食を入れて、一日四回ここを通るんですから往来は多いし、外人向けの商売がはやるのは自然でした。

第一、あの頃は代官坂は狭くって、不便で山手へゆくのは、谷戸坂と地藏坂の二つだけが便利だったんですもん。その時分元町はほんとうにさみしい町で、外人はおもに谷戸坂で物を買ってましたね。それで、その時分にこんど弁天通りがうんと盛んになったんです。で谷戸坂にいた十字屋が丸善になって、あっちにいったんですが、ですから外国船で観光にくる外国人が弁天通りをいきかうようになって、その観光客はたいがい人力でもって列をなして、赤い旗をたてて元町を通るようになってきたんです。それから谷戸坂がさびれていったんですが、やはり震災後のことで外人の家が減っていったからでしたね」(山手町 安藤寅三氏談)

「谷戸坂の栄えたといえますのは、幕末から明治にかけて急に栄えたんだと思います。で、私の家は江戸の初期から横浜村の名主だったんです。代々、太郎左衛門という名前を継ぐ事になってるんです。中山太郎左衛門と。それで明治十何年の写真つてゆうの

があるんですが、それだと谷戸坂の裏坂と表坂までが一つの区画になつてゐるんです。前は住宅だったのが急にひらけたような感じですね」(山手町 中山嘉子氏談)

第二節●瓦礫がれきのなかから

(1) 丘の上と下

●震災被害——震災直前の山下町は、外国人居留地として繁栄していた。商社、銀行、ホテル、それに婦人洋服店、貴金属店などの洋館が並んでいた。往来する者はほとんど外国人で、日本観光の外国人にとっては、唯一日本みやげの買い場所であつた。

関東大震災の激震が襲うと同時に、れんが造りや石造りの旧式の建物は一斉にぐずぐずと倒壊した。建物内の人はもちろん、通行人も数十人以上、瞬間の死に見舞われた。

二〇分ほどたつて、二〇〇番、二四〇番、二五九番のあたりから発火、関内地区からも延焼し、合流した火は折からの強風によつて火の海となつた。人々は避難するのにも黒煙につつまれて、逃げ場を失い、煙にまかれて多数の犠牲が出た。

建物の倒壊・焼失したものは、商館ではイギリス一五一(内インド五八)、アメリカ五四、中国一三六などで四三三棟に及んだ。諸外国の総領事館をはじめ、ホテル、学校など多数を焼失した。

わずかに三井物産株式会社の倉庫、露亜銀行、岩井ビルディング、中央電話局、米領事館などの耐震建物は、倒壊こそしなかつたが、猛火には耐えられず内部は焼失した。

この地域を流れる堀川と派大岡川にかかる橋も、ことごとく被害をうけた。谷戸橋は破壊、前田橋・西ノ橋・花園橋は焼失、吉浜橋は陥没した。川に逃げて溺死した者も多く、焼けた小船には黒こげの死体が散乱した。

この地区のなかでも、中華街は、料理店や雑貨、藤椅子製造、洋服屋など軒先がつき合うほどに密集、建物は、れんが造りで脆弱で、町の通路は狭く、避難は困難であつた。そのため被害はひどく、建物はことごとく粉碎され、中国人五、〇〇〇人のうち逃げ場を失つた二、〇〇〇人は惨死した。

●めちやめちや——海岸寄りのグランドホテル、オリエンタルホテルなども、またたく間にぐずれ落ち、昼食時でもあつたため、この二つのホテルだけでも約一四〇人の死者を出した。

山下町、元町、関内を管轄する加賀町警察の調書では、死者四、八九〇人で、そのうち山下町だけでも約二、四〇〇人にとほつたとされている。

震災の惨状を外国人は次のように記した。

「一まとまりになつてぐずれ落ちたもののように思われた。見渡すことのできる限り、大きく裂けた壁やめちやめちやになつた数数の道路以外のものは何もなかつた。電信柱は倒れたか、もしくは



山下町の被害〈村上盛一氏提供〉



山下町の被害〈村上盛一氏提供〉



山手町外人墓地の被害〈スタンチ・サカエ氏提供〉



山手町の被害〈スタンチ・サカエ氏提供〉

は自分の電線に気がいじみた姿で支えられていたし、またもつれた電線は、残骸の上に落ちていた。――(中略)――

何か月もの間、人々に捨てられた残骸の固まりの状態のようであって、引き裂かれた壁や扉は、死に絶えた過去の上をおおっている墓石のようになり、この日は土曜日の午前で、山下、山手の外国商社はいずれも執務をしていたので、人的被害も大きかった。外国人もなすことなく茫然としていた。まだそのころ、あたりは焼崩れた煉瓦の山で、処々に焼倉庫だけが淋しくとり残されていて、雨水が溜り、僅かに荷車の通れる程度の道が出来、崩れた煉瓦を取り除くと、無残な犠牲者の遺骸が各所から掘り出されたものであった」(O・M・プール『古き横浜の壊滅』)

●荒涼の丘――震災直前の山手の丘と、その周辺は景色のよい静かな町であった。

「震災前の山手は、デコボコの多い土地で、丘の下とはゆるく道はばの狭い小さな坂で結ばれていた。坂を上りきると、外人が金にあかせた住宅が建っていた。白ペンキ塗りの家、赤い石造の家など、思い思いの建物であった。

白いベール地の服の女を連れて、軽いステッキを持って、愛犬をつれて三々五々散歩する外国人が見られて、山手は外国そのものだった」(山下町 市川準之助氏手記)

れんが造りや木造ペンキ塗りの洋館が、樹々の生い茂った間に並んでいた。そして丘には学校、病院、教会、ホテルなどがあつ

て、異国情緒そのものであった。総数一、六一七戸、五、三七二人、うち外国人は七一戸(一、六八八人)がここに居住していたのであった。

しかし、激震は、これらの異国情緒もなにかも容赦なく壊し、焼失させ、一九四人もの死者を出した。惨状を目撃した一人は次のように記している。

「学校ノ隣ノ外人屋敷前ニ、三十前後ノ外国婦人ガ地面ニノタウツテキタ。救ツテヤラウト思ツテ側ニ行クト、其婦人、自宅ヲ指シテ、『八ツ六ツ四ツノ子供』ト言フ。見レバ三人ノ子供ガ二階ノ窓ニ出テ泣キ叫ンデキル。ヨシ助ケテヤロウトソコニ向ツタガ、距離ガアツテトモ助ケ出サレナカツタ――子供ハ遂ニ焼死シタラシカツタ」(元町小学校教師手記)

山手で焼失した主な建物は、山手警察署、元街小学校、キリンビール株式会社、西班牙公使館、秘露公使館、秘露領事館、佛国総領事館、智利総領事館、玫瑰総領事館、それに横浜一般病院、英国海軍病院、米国海軍病院。学校ではフォーレンス・スクール、セントジョセフ・スクール、サンモール・スクール、ドイツ小学校、ロシア中学校、紅蘭女学校、董女学校、女子聖經女学校、共立女学校、女子神学校、フェリス女学校。教会ではユニオン教会、クライスト教会、ローマカトリック教会。その他、テンブルコート、ブラッフホテル、フェアモンドホテル、桜山ホテル、ゲーター座などであった。墨西哥総領事館だけは倒壊しただ

けで、焼失はしなかった。

山手本通り筋はわずか三、四軒の建物を残し、石造りの残骸がつづく荒涼とした丘に変わってしまった。

●死者多数——丘の崩れもすさまじく、現在の新山下町上のげけも住宅三戸とともに崩れ落ちた。三〇間（五四・五四メートル）が陥没、七〇間（一二七・二六メートル）が崩壊、落下した。地蔵坂上のテンプルコート（日光屋敷）が崩壊し、石垣もろとも坂の中腹に転落、炎上した。代官坂上の建物の煉瓦造五階建の外国人共同住宅には、ロシアの亡命者四〇人ほどが滞在していたが、その大半は圧死。外人墓地の石塔も大半が転倒した。

この地域は割合に人的被害は少なかったといわれているが、外国人の尼僧、日本人コック、ボーイ、アマ、庭職人などが多数死亡していた。

大震災によって、外国人で家を失なった者は、中国人二、五〇〇人、アメリカ人一、二〇〇人、ドイツ人一三〇人、イギリス人七七人、フランス人一五人、ロシア人三〇人に及び、死亡した人はアメリカとフランスの横領事をはじめとして、アメリカ人七二人、中国人三四〇人、その他三五〇余人にのぼったという。

〔神奈川の写真誌・関東大震災〕

外国人のなかには関西や上海方面に逃れた者が多かった。

●応急処置——山手に罹災の処置が行われたのは、幸いにも無傷であった当時花屋敷といわれた山手公園で、罹災者五四人が木蔭



被災地の片づけ、山下町〈スタンヂ・サカエ氏提供〉

山手の外国人住宅



応急的に建てられた外国人商社



を利用して避難したが、関西から寄贈されたバラック、奥行き四間、間口一五間の四棟が建てられ、そこに六五世帯二六〇人が収容された。これらの人々は山手や山元、北方方面の人々で、外人住宅内のコック、ボーイ、阿媽達も多かった。

山手町では町をあげての復興活動は起らないまま、各人各自の住宅を求めて花屋敷を離れた。のち、このバラックは元街小学校の仮校舎として利用され、授業が行われたのであった。

●復興はじまる――応急措置のうちに、山手、山下地区も復興に入っていた。この地区においては、山手の丘、壊滅をまぬがれた地点に、昭和二年（一九二七）外国人住宅数棟が建てられ、復興のはしりとなった。数こそ少なかったが、罹災外国人の救済の一つの方策であった。

そして、早々と山下町には二年十二月、ニューグランドホテル（現、ホテルニューグランド）が開業した。有吉市長の肝入りで工費一二〇万円、ユニークな建物で最新の設備をととのえた。

しかしこの地区は、外国人居住地域であったため、震災復興にあっても他の地区とは違っていた。地区内の大部分は、外国人の永代借地であったため、区画整理の必要があっても、その実施は市において手控えられた。特に山下町の場合、区画整理は単純に実施できるものではなかった。

だが、外国人側からは、山下町に区画整理が行われないのは「遺憾」として、しばしば陳情、請願が行われた。その結果、横

浜市では外国人全員の同意を得ることを条件として、山下町のうち海岸寄りの上町の地域、五万六、五二八坪（一八・六八ヘクタール）を対象として区画整理することに決定した。

●マーシャル・マーチン――この事業実施のため、イギリス人六人、アメリカ人五人、フランス人二人、中国人一人と日本人土地所有権者三人によって区画整理委員会が組織され、大正十五年三月から七月に亘って数度協議が行われ、委員長には、外国人を代表して内外人に知人も多く人望のあるイギリス人マーシャル・マーチンが就任した。マーチンは自費で事務所を置き尽力した。

しかし、永代借地の土地区画整理は、外国人からその承諾を得ることは非常に難航した。マーチンは外国人ひとりひとりを説得した。当時外国人の多くは神戸方面に避難していたので、そこへ赴き、さらに日本を離れて戻らない借地権者を追って、アメリカ、イギリスなどにまでわざわざ渡航して説得、了承を取りつけるなどの努力が重ねられた。その結果、マーチンをはじめとする外国人の協力によって区画整理事業が開始されたのであった。

●結晶――事業は着々と進み、旧居留地の形状を残したままの狭い道は拡張され、行き止りの袋小路も開かれ、効率的な土地としてよみがえり、昭和四年（一九二九）二月には事業は完成した。

そして、一方では山下町の人々によって、山下町復興会が結成され、早期復興の運動が展開された。国会や大蔵省に盛んに陳情が行われた。官民一体、そして外国人が加わった並々ならぬ努力

の結晶で復興した。

山下町の区画整理が終わった昭和四、五年頃、さらに街並みの復興のテンポは早まったが、それは多くの華僑が震災にめげず、この地区に踏み留まったことが原因の一つとなった。しかし欧米人の場合は、海外に避難してそのまま帰らない者も多く、外国人商社のなかには再建がままならず、地区内では所々に歯の抜けたように罹災地跡の空地が目立っていた。その空地は、震災後復旧しなかった外国商社の跡地であった。こうした状況は昭和十年頃まで続くことになる。

◎街並み——この頃復興した主な建物は、海岸の通りでは、香港

上海銀行、横浜倶楽部、アメリカ領事館の仮建物、バターフェルド・エンド・スワイヤー、ニッケル・エンド・ライオンズ商会、大正回漕店、スタンダードオイルカムパニー、それにホテルニューグランドだけで、中通りは西加奈陀太平洋汽船鉄道株式会社、ドットウエル会社、ジャーデン・マヂソン会社、ジョージ・ロビンソン会社、横浜印刷所、塚越商会、バームトログランド・メグレー商会自動車工場、ガナマルナラウム商会など、それに倉庫数棟であった。

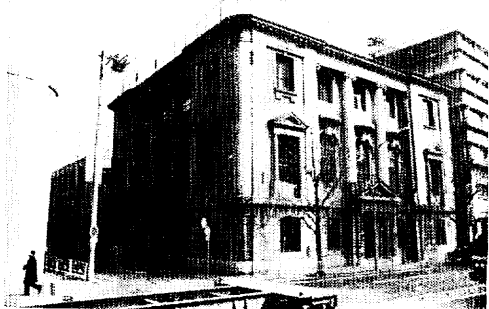
さらに、谷戸橋から県庁前までの道をはさんで、オリエントバリー、アデカンエリス商会、アデカンブルトス商会、日瑞貿易会



平安楼



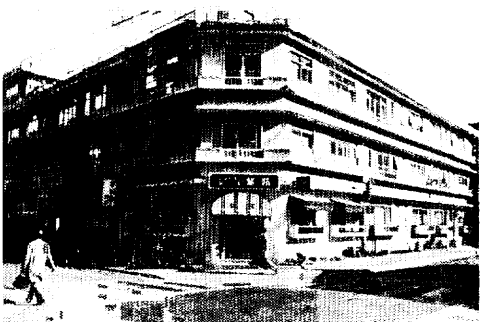
ヘルムプラザ商会（現、県警分庁舎）



露亜銀行（現、警女病院別館）



同潤会アパート



互楽荘アパート

社、太平洋貿易、上野運輸会社、露亜銀行などであり、そしてヘルム商会、通信局電話係員派出所、道の向い側には大阪海上火災保険会社、米国ナショナル銀行、この裏、下町との境にはシーベル・ヘグナー商会、ゼネラルミルクインポテイング商会、デルオロ商会、ストラス商会などの商社が街並みを形成した。

下町では、その中央部に加賀町警察署、その向うには通信局電線修理品置場が広い面積を占め、現在の中華街の本通りには中国料理店の聘珍楼、金陵、安楽園、桃園などができた。裏道には間口の狭い住宅が並んで建てられた。そのうえ、小規模な店が増加した。町のなかには中華学校、中華公会、それに公設質屋、山下町共同市場、中華領事館、山下町病院、三光家具製作所、神奈川モーター商会などができ、さらにカフェーの数軒も見られるようになった。

●アパートメント―そして同潤会と互楽荘のアパートメントが建設された。近代的デザインと設備が設けられ、横浜における近代アパートのさがげ的存在となった。互楽荘について

「互楽荘とはいふ名前である。開館式の時に招かれた私は住み心地のよきさうな雰囲気浸った一人だ。……山下町に明朗な姿をうかべる互楽荘の存在は、街の美観の上から云つても決して悪くなく」(山本禾口『横浜百景』)

この二つのアパートは現存し、この頃の面影を伝えてくれる。「同潤会アパートには、私は独身時代住みましたが、床にしても

コルクを五センチぐらい敷きつめてあつて居心地満点、近代的で快適に暮せました」(港北区大曽根町 石井保彦氏談)

●町に新しく―横浜公園前にはY.M.C.A、ベリック商会、ストロング商会、帝国製麻倉庫、帝国蚕糸倉庫をはじめ、商社、倉庫が並んだ。大岡川沿い、市電の花園橋から吉浜橋にかけて逸逸領事館、横浜専修学校、横浜小学校とその裏に横浜市土木局や水道局、村山病院、横浜港湾統計事務所が建てられ、ここにも倉庫が並んだ。ほかに秋葉染色工場、佐藤貿易株式会社、チエンウァンテイピニア商会倉庫なども新設された。

一方、堀川沿いの西之橋から谷戸橋間には、ジャパン製水会社、東神製水会社、オドワイエシヨージスの工場、西村貿易が見られ、その後ろにはシーエマール商会、蚕糸合名会社、智利領事館、ヘルム倉庫、それに和親劇場、ナポリタンダンスホールなどがここに建てられた。

各国領事館をはじめ、外国系日本系それぞれの商社、銀行、官公署、学校が復興、新設され、大きくこの地域の街並みを更新した。その幾つかは、けなげにも風雪に耐え、今次の戦災からものがれ現在に残っている。しかもそれらの建物の手のこんだ技法やデザインは、現在の近代的建物と比べて、その格調は遜色がなく。

現存する建物は、加賀町警察署、県警分庁舎、警友総合病院別館、互楽荘アパート、同潤会アパート、ホテルニューグランド、

デスコビルなどである。

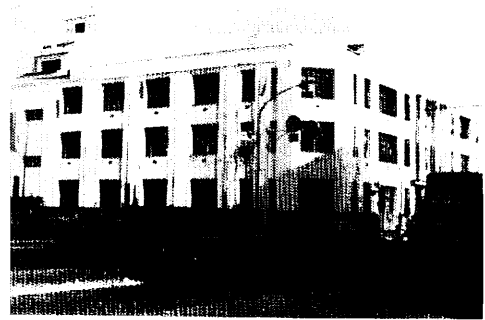
●ホテルニューグランド——ホテルニューグランドの場合、最新の設備とフランス料理は海外に大いに宣伝されるなど、震災による失った景気を挽回するかのようであった。

開業披露の新聞広告では、「このたび、当地に旅館を開き、諸事欧州の例にならって家具は美しく、あらゆる食器は清潔そのもの。お客の便利を第一とし、欧州諸国の旅館と少しも異っていません。食事は常食に分け入念に調理いたします。非常食は四人から百人まで注文のあり次第すみやかにおつくりします。また、お好みによりなんでもできますので、貧富の別なくどなたさまでも気軽に「おいで下さい」と宣伝された。

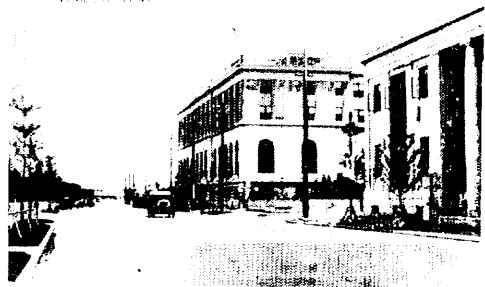
ホテルニューグランドは、内外人に珍重された。それはあたかも復興の象徴であるかようであった。関内生れ関内育ちの作家、北林透馬は小説のなかで次のようにいう。

「ホテル・ニウグランドの、ロツヂのホールで、デインナ・ダンスがあるといふ土曜日が来ました。ホールが狭い為無制限に人を入れる事が出来ないで、あらかじめ外国人五十人、日本人五十人と人数を限って、言はゞホテルの御常連以外の人々は此ダンス・パーティーには出席出来ないやうになっていました。この事が或る意味で一層このデインナ・ダンスに権威と精彩を増すことになりました」(北林透馬『街の国際娘』)

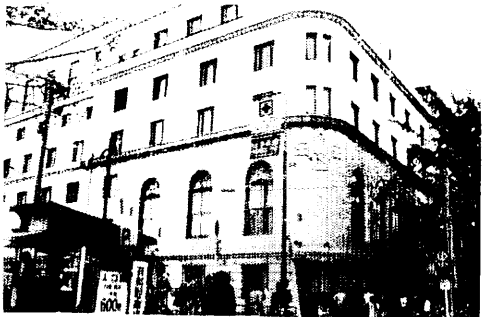
のちに、作家大佛次郎は、「霧笛」などの作品をこのホテルの



ライジングサンビル



復興成った海岸通(貝道正一氏提供)

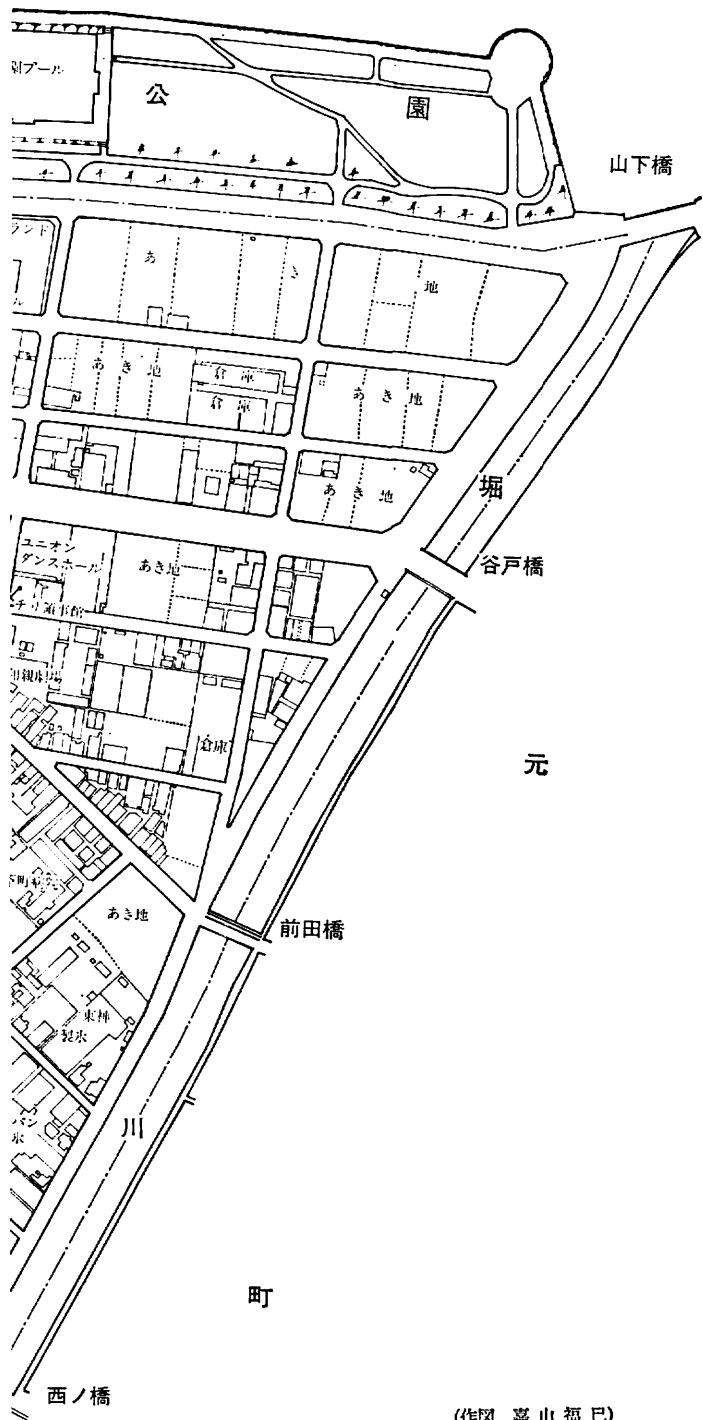


現在のホテルニューグランド

一室で執筆したが、市内の内外人はもとより、東京から有名人がわざわざここで宿泊、横浜港の夜景とかもし出されるエキゾチズムを味わったのであった。

●肉饅——この地区は、着々と震災から立ち直ってゆくのだが、中華街の場合も同じように、より繁盛を見ることになった。地元にはいた人は次のように記している。

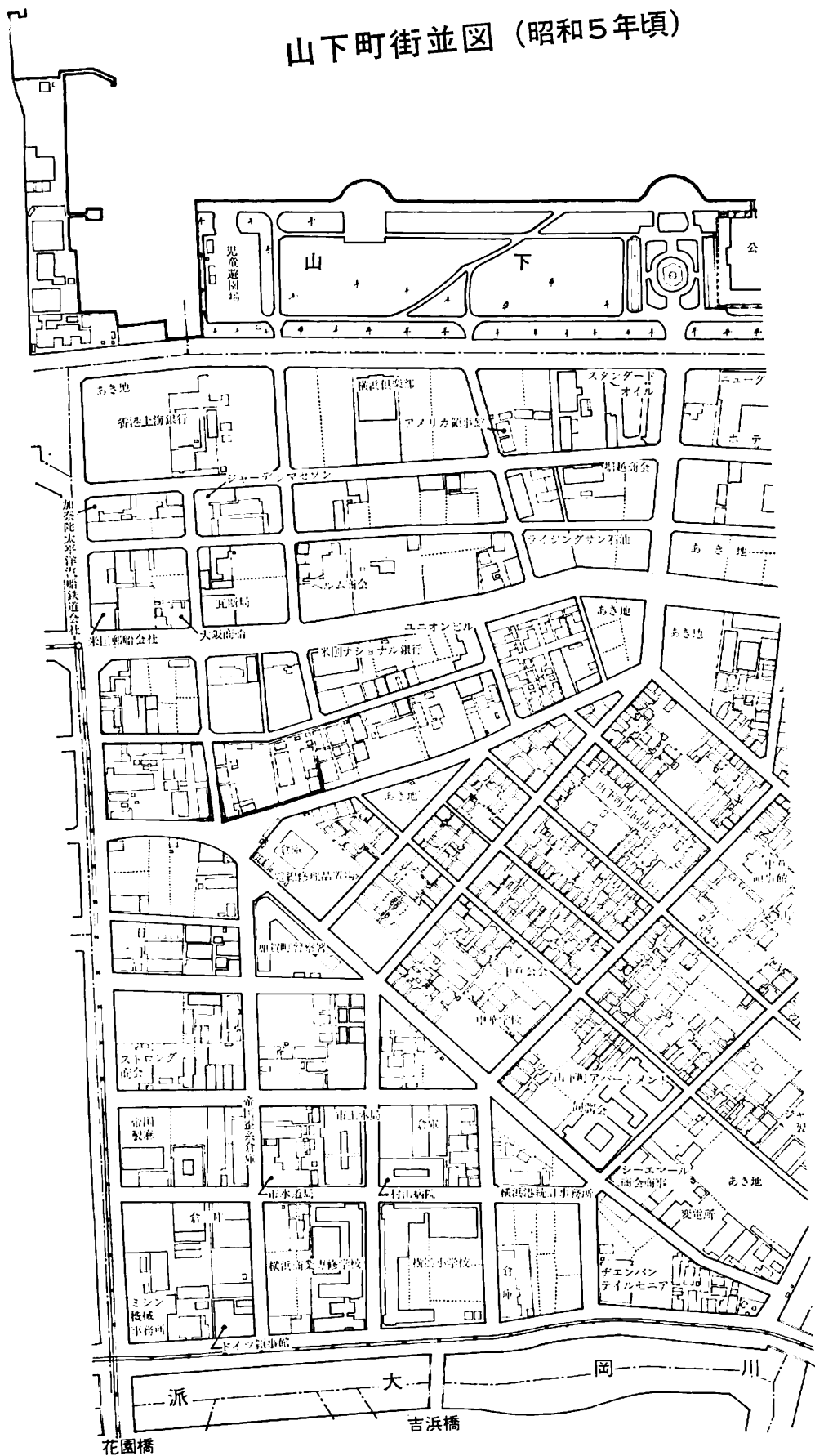
「市場には魚が溢れていた。活きた海老、渡り蟹、蛙、大鯉、大刀魚、鱧、鮎、なまこで、メニューは、簡単なもので、平貝や青柳のサラダ、ホワイトソースをつなぎにしたコロッケ、西洋野菜は店に溢れていた。アテイショ、シャンピニオン、ピーツ紫キャ



(作図 嘉山福巴)

山下町街並図 (昭和5年頃)

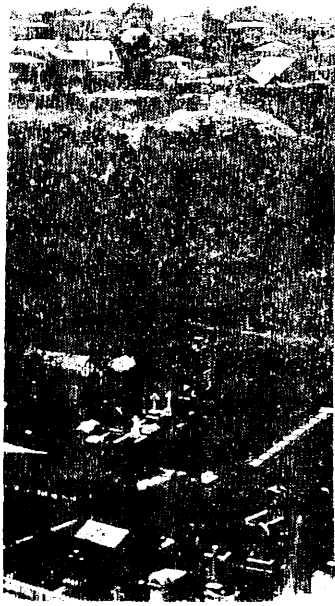
●地区編 ●第三章 山手・山下地区



ベツ、レッチューサラダ、今なら当り前の野菜も日本の家庭では使われなかった。シャンピニオンは、綿を布いた木の箱に丁寧に一個づつ並べてあった。根岸の競馬場の馬糞が肥料に最適だと聞いた。香りは抜群だった。洋菜を作る農家は根岸や磯子の奥に点在していた。磯子の奥から荷車の後押しをして来た少年は「黒川弥太郎」だったと、祖母から聞いたことがある」（山手町 川島あゝ氏手記）

現在の「中華街」をここまで発展させた華僑の人達の苦勞は並大抵ではなかった。

「裏通りには洋服仕立屋、藤職人、床屋、刺繍屋が並んでいた。表通りの料理屋は、宴会ができて、太鼓橋をかけた仰々しい店から不潔な小さな店までさまざまだった。喧騒と乾物の香料と油の煮えたぎる匂いの中の光景は、何ともエネルギーで圧倒された。当時を知るハマツ子は、今でもお饅頭の皮をくるりと剥ぐ習慣がある。当時の肉饅は賽の目に切った豚バラと筍がたっぷり入って、肉のジュースが掌にこぼれないように注意しながら口へ持っていったものだが、このおいしさを再現してくれる店はもうな



い」（前掲手記）

山下町の山下公園に並行した通りは、各国の領事館、その一つ目の裏通りは貿易商館、空地は原っぱ、そこに倉庫が点在するといったようになった。日本人通りに入るまでの中通りはインド屋敷と呼ばれ、貿易商が並んだ。

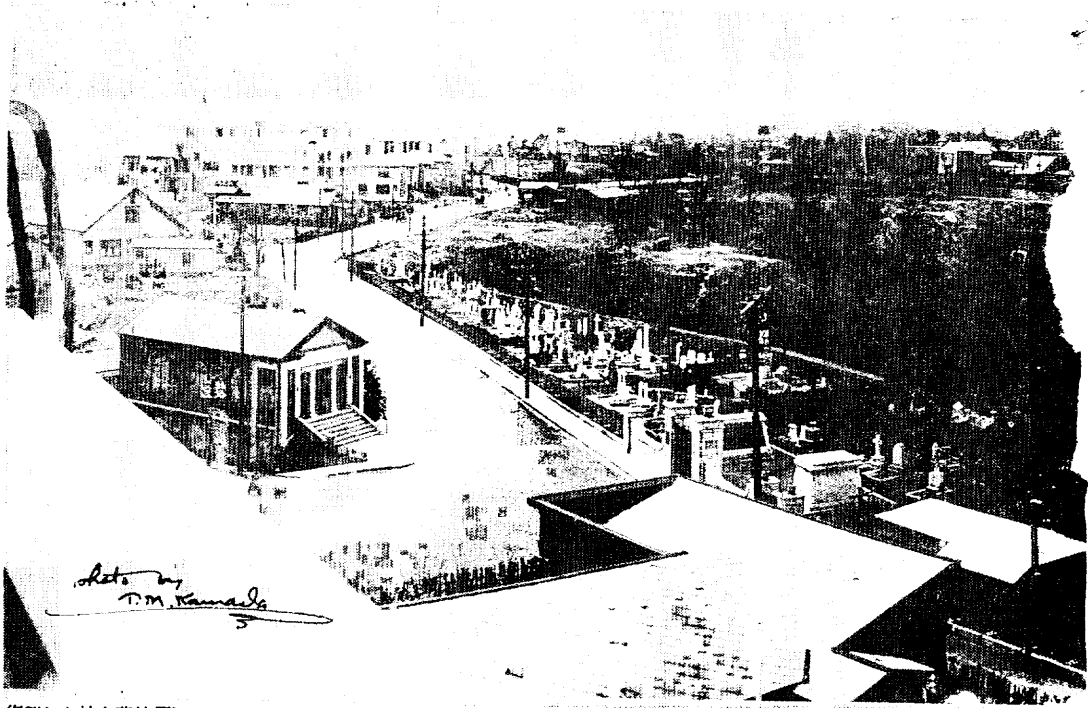
そして、そこでは

「いま以上に肌の色の違う人達が雑多な営みをしながら、相手の習慣を認め合い、バランスを保ち、上手に暮した知恵と気構えは素晴らしい。外国の文化をとり入れ、模索した揚句、生活の糧とした人達。必然が生んだ国際性。ピンと筋を通しながら自由に生活した、山下町の商人は、何と活気に溢れ、躍動感あふれる町を作っていたことか。

そしてまた、夕暮れを告げる汽笛、ニューグランドのコック場から流れるスープの匂い、地下室の小窓は道路に面し、覗くと白い帽子が右に左にまるで戦争のようだった。肉のエキスをセロリの香りが混り合った懐しい匂いが容赦なく胃を刺激した」（前掲手記）
といったような雰囲気をもも出し出す情景があった。

●山手復興——しかし、山手町の場合は、震災の復興状況はまことに遅々としたものであったが、それでも四、五年になると、外人墓地のまわりには、いち早く住宅ができていった。

それに山手町では昭和四年（一九二九）六月、鉄筋三階のフェリス女学校の校舎新築、五年谷戸坂上で個人経営の船舶信号所が、



復興した外人墓地周辺

株式会社万国信号所として新発足、八年（一九三三）十一月には山手教会の献堂式が行われた。

しかし、山手町の復興は、きわめて個別的で緩慢であった。それに土地の利用は、山下町の商業地に対して山手町は住宅地という区別をより鮮明なものとし、その性格は、震災前とさして変化もなかった。その街並みの特性は現在へと引きつがれている。

●山下公園——このように、地区が復興してゆくなかで、震災復興事業の白眉ともいえるべき山下公園が。旧居留地の波打ちぎわ、通称海岸通りに建設された。

山下町の地先の海岸には焼土が秩序なく捨てられていたので市は、海岸延長約七七メートル、幅約五〇メートルに亘って山下町の瓦礫や焼土、それに元町百段のがけくずれ、さらに打越の切通しの工事などの土をもって埋立てた。

「元町の浅間山百段の階段とがけが震災で崩れたので、その土を荷車でもって今の山下公園の所に運んだんです。当時私は一七、八歳でしたが一日一円五、六〇銭で市から雇われて仕事をしました。それと山下町の焼けた土や煉瓦を運びました」（岡門町有志座談会）

瓦礫をもって埋立て、公園を造成することはマーシャル・マーンチンらの献策であった。山下公園は昭和二年三月に竣工、同十五日に開園した。芝生と植込み、花壇、現在に残る沈床花壇も作られた。それにボートベイシン（端艇溜）も設けられ、停泊の船か

らポートでここに直接上陸することもできた。

総面積二万二、四六〇余坪（約七・四ヘクタール）、工事費七
九万七、四〇〇余円を要した。

遠く山手の丘を望み、海岸通りの洋風建築との風景とよく溶け
合い、横浜公園とともに、横浜を代表する公園の登場であった。
そしてここが横浜復興大博覧会の会場となるのであった。

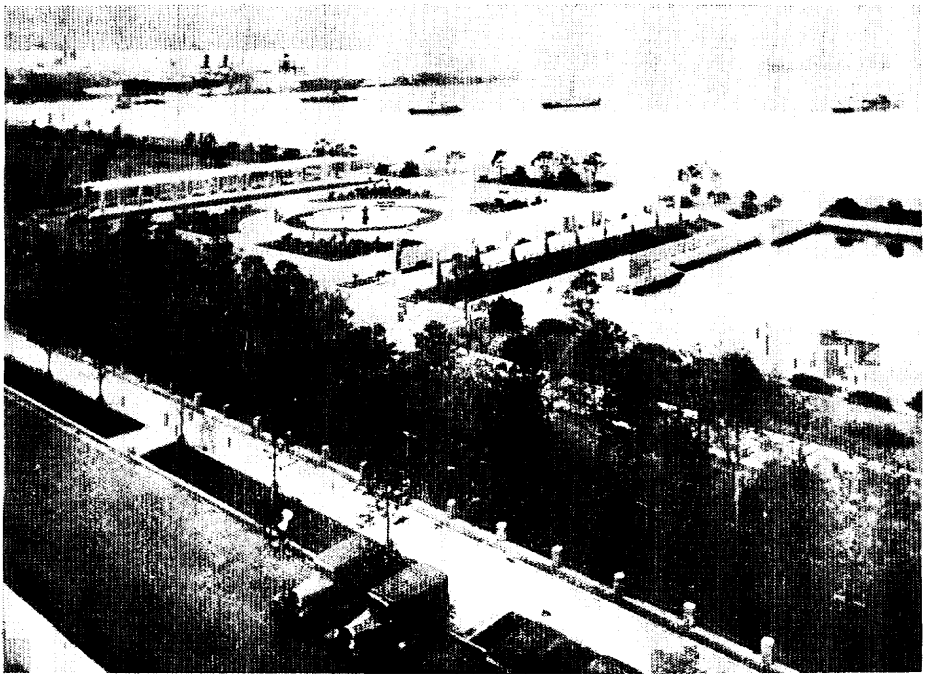
(2) 復興博と永代借地権問題

●復興博―山下公園は、震災復興事業の大きな成果であった。
そして昭和七年七月、納涼博覧会が開催され、早くも市民に親し
まれ、まさに市民の公園となった。

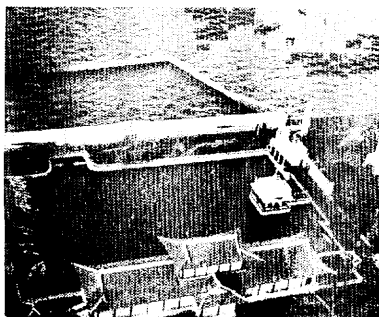
昭和十年（一九三五）三月、復興記念横浜大博覧会がこの公園
で開催された。三月二十六日から五月二十四日まで、入場者は延
三三二万九、〇〇〇人、実に横浜市民七〇万人の四・六倍が来場
した。一日最高三〇万一、〇〇〇人、一〇万人以上が入場した日
は七日間もあった。復興の喜びをかみしめながら、市民はここに
集まり、さらに全国各地から見学に来た。

この開催はすでに昭和八年五月に決定された。趣旨は復興事業
の完成を祝い、内外各方面からの援助にむくい、わが国の文化と
産業を展示し発達の状況を内外に顕彰しようとするもので、国内
はもとより植民地や欧米諸国の出品を求めたものである。

会長は大西横浜市長、神奈川県と横浜商工会議所の後援であつ

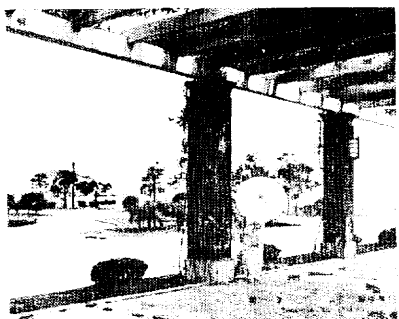


開園直後の山下公園―右手は現在の沈床花壇の位置



復興博覧会の生鯨館（横浜市図書館提供）

山下公園から港を見る



た。

公園正面には大きなアーチ、展示館三棟、外国館五棟で、東京をはじめ都道府県の物産が展示された。開港歴史館、復興館、海洋発展館、近代科学館などで、また海面には生鯨館として大きないけすをつくり、鯨五頭を泳がせたり、現在のTVKテレビの付近にあった外国余興場は、カウボーイやインディアンがロデオなどのショーを見せたりした。

そして、複葉飛行機から宣伝ビラがまかれた。市民はもとより、全国各地からこの博覧会場に人々が集まり、全国的な人気で沸いた。

●独立祭の花火——ひとしきり復興博覧会に沸いた横浜に、それと同調するかのように、十一年の夏、米國独立祭の花火が港の夜を彩った。新聞は次のように報じた。

「浜ッ子の誇り、昨夜の独立祭の花火

浜ッ子が英語読みまでして一寸誇って見たい異国情緒豊かな米國独立祭花火、震災後山下町の米人が滅切り減って一時中絶してから復活二年目の昨夜である。暑熱一段と加はり寝つかれぬ夜に涼を追ふ人々の足を誘って人出正に二十万、日が暮れると共に、市内は固より東京、湘南方面からも繰出して山下行きの市電バスは殺人的鈴成りの盛況。

海岸通りは文字通り人の波、港を囲む丘や高台は縁台まで擠出した見物の山」(『横浜貿易新報』昭十一・七・五)

●地区編●第三章—山手・山下地区



復興博覧会の歴史行列の一部

この花火はもともと横浜の名物であった。はじめは明治十年頃、横浜在留米国人の祖国独立記念舞踊会の余興としての花火打ち揚げからはじまったもので、明治三十年頃からは奇抜な仕掛花火なども行われて、きわめて盛大であった。それは「夜涼の風、海波に和む仲夏の空は五彩に輝いて百花繚爛、海上に舞踏する様真に壯観を極め、東京両国川開きを持つ大江戸情緒に対して、横浜特種の香り高き異国情趣を横溢した」(『横浜市史稿・風俗編』)と記されている。

しかし花火も大正三年(一九一四)から八年まで第一次世界大戦で中止、十二年から昭和三年まで震災のためふたたび中止、四年一時的に再開されたが、十年までまた中止、十一、二年と再開したが戦争によって二十二年までまた中止、二十三年一時再開されたものの公園が接収されていたため、結局二十七年夏に日米協会の主催としてようやく再開されて現在にいたるが、この花火の打上げも、まさに時代によって変遷してきたものであった。

とにかく、この公園もまた、時代とともに、市民とともに存在してゆくのであった。

●永代借地権買収―こうして、この地区山下公園は復興博覧会の会場として華やかなフィナーレに彩られたが、この地区にはあたたかも澁(しぶ)のように、国際的な課題が残されていた、それは外国人の永代借地権問題であった。

しかしそれが震災によって、問題解決のきっかけとなったのは

皮肉であった。震災によって永代借地権者の死亡、行方不明が多く出たが、前に述べたように、建物を失なったこの地区の外国人は、一時神戸方面に離散していたが、横浜が復興するにつれて次第に横浜に戻ってきた。だが、彼等は災害によって地上の財産を失ない、その土地価は暴落したため、借地権の売却を希望する者が次々と出た。

横浜市としては、永代借地権を解消する絶好のチャンスであり、まさにこのことこそは、精算の時期到来であった。市は大正十四年、政府から無利子の六百万円を借用して、直ちに買収に着手した。買収した土地は希望する者に転売し、その収入金をもって他の借地権を買収してゆくという方法であった。

『永代借地制度解消記念誌』(永代借地制度解消善後措置連絡委員会編・昭和十八・六・五)によれば、大正十四年には、永代借地権が存在している土地の総面積は二〇万四、三〇二坪(六七・五ヘクタール)であったが、市が買収した土地は九万八、八〇六坪(二・七ヘクタール)、借地権者自身が借地権を抹消して所有権に改めたものは三万三、〇一〇坪(二〇・九ヘクタール)で、六四・五二パーセントが処理されたのであった。残り七万二、四八六坪(二三・九ヘクタール)もさらに減少するとしていた。

このとき買収した土地で転売したものは三万九、五五九坪(一三ヘクタール)、転売していないものは五万九、一五〇坪(一九・六ヘクタール)で、区画を整理した分とその他による減少面積三、

表：1 残存永代借地一覧 (昭和9年現在) (中区役所資料より作成)

町名	筆数	面積	借地料		面積割合	備考
			総額	坪当り		
山手町	139	92,038.84 ^坪	9,982.16 ^円	0.11 ^円	55.77 [%]	借地料無料5,601坪を含む 当時北方町大字芝生台
山下町	149	68,201.52	13,954.17	0.20	41.32	
仲尾台	1	3,642.00	437.04	0.12	2.21	
旭台	1	1,150.00	172.50	0.15	0.70	
計	290	165,032.36	24,545.87	0.15	100.00	

表：2 永代借地権解消・残存状況 (山手町)

所有者の国籍	明治9年現在		解消(明治9年～昭和9年)		残存(昭和9年現在)		残存面積割合
	筆数	面積	筆数	面積	筆数	面積	
イギリス	182	92,741.25 ^坪	120	59,616.14 ^坪	62	33,125.11 ^坪	35.99 [%]
アメリカ	81	43,382.07	46	22,568.24	35	20,813.83	22.61
フランス	32	32,359.31	19	19,439.67	13	12,919.64	14.04
ドイツ	43	27,133.11	42	26,666.97	1	466.14	0.51
スイス	23	10,393.42	12	4,293.84	11	6,099.58	6.63
中国	8	5,160.84	5	3,380.51	3	1,780.33	1.93
オランダ	5	2,177.45	3	1,431.15	2	746.30	0.81
イタリア	3	1,486.97	1	444.70	2	1,042.27	1.13
ノールウェー	3	599.35	2	590.35	1	9.00	0.01
デンマーク	2	621.63	—	—	2	621.63	0.68
チェコスロバキヤ	1	545.59	1	545.59	—	—	0
ロシア	1	269.30	1	269.30	—	—	0
共同使用及び 不詳	15	19,686.49	7	5,271.48	8	14,415.01	15.66
計	399	236,556.78	259	144,517.94	138	92,038.84	100.00

表：3 解消経過（山手町）

年次	筆数	面積
明治9年	1	985.00
21年	2	1,398.00
30年代 (33~39)	11	9,494.00
40年代 (40~44)	20	9,550.00
大正		
1	3	1,479.62
2	2	2,511.61
3	2	486.00
4	2	4,624.00
5	10	4,286.50
6	10	5,319.28
7	5	1,947.00
8	9	7,005.15
9	29	20,469.63
10	13	6,105.41
11	1	411.00
12	2	796.54
13	3	2,693.30
14	50	22,644.28
昭和		
1	39	15,544.95
2	16	14,456.68
3	4	3,156.74
4	8	3,311.28
5	1	132.69
7	5	3,502.96
8	4	870.13
9	1	193.46
年次不詳	7	1,142.73
小計	260	144,517.94
残存	139	92,038.84
合計	399	236,556.78

奈川県知事、横浜市長連名で滞納者に通告した。

山手、山下地区の外国人は大きいに驚いた。最も滞納の多いのは英国人だったが、英国大使から早速、外務省へ処分中止の交渉が行われた。しかし、一旦課税したものを取消すわけにはいかないとし、外務省の顔を立てる格好で、処分期間を一カ月延長した。昭和九年十月に入ると直ちに滞納処分を実施した。結果は、すでに帰国したり、或いは財産がなかったことにより、予定通りにはいかなかったが、処分によって約二〇万円を徴収することができたのであった。

この強行手段は、外国人に大きな刺激となり、それに当時の国際情勢が作用して永代借地の根本的な解決を促す結果となった。

●昭和九年では——この昭和九年現在、山手町山下町

ほかの永代借地は表1のよう
うに、二九〇筆一六万五、〇三三坪（五四・五ヘクタール）うち無料借地五、六一坪（一八・ヘクタール）。
借地料は総額二万四、五四五円八七銭（坪当り平均一五銭）であった。借地料は山下町が坪当り二〇銭、山

表：4 新所有状況（昭和9年現在）（山手町）

所有者	筆数	面積	割合
国	11	2,839.29	1.96%
横浜市	106	50,206.21	34.74%
神奈川県	1	564.00	0.39%
日本国籍者（法人を含む）	140	89,815.44	62.15%
不詳		1,093.00	0.76%
計	260	144,517.94	100.00%

手は一二銭と格差が見られる。しかもこの数値は、明治から大正を経た長年にわたる消滅運動の結果であった。中区役所の資料によれば、明治九年現在の山手町における永代借地の坪数は二二万六、五五六坪七八（七八・二ヘクタール）であった。これは現在の山手町の面積（八四・三ヘクタール）に比較すると九二・六パーセントに当たっているが当時の国別の借地権所有の状況は、イギリスはか十一カ国で、イギリスが最も多く一八二筆、九万二七四・二五坪（三〇・七ヘクタール）、アメリカがこれに次いでいた。表2

この借地権はそれ以来毎年解消していき、昭和九年までには一四万四、五一七・九四坪（四七・八ヘクタール）（六一・パーセント）が解消して、残り九万二、〇三八・八四坪（三〇・四ヘクタール）となっている。

表3は、年ごとの解消の状況であるが、明治年間には一四・九四パーセント、大正年間には五六・三四パーセント、昭和に入ってから二八・七一パーセントであるが、ここにいたるまでに実に六〇年をかけたものであった。

そして解消した後の所有区分は、表4のとおり六二パーセントが本人（法人を含む）、三四・七四パーセントが横浜市の所有となったのであった。

これらの表の数値の上から永代借地権解消は非常な努力が重ねられたことが容易に推量できる。

これ以降の資料を欠いているが、昭和十二年三月イギリスの残存の三万三千余坪の永代借地権解消の調印が行われ、アメリカ、フランスなども翌月までには調印されて、結局昭和十七年になつて完全解消となるのである。

(3) ここも暗雲

●接吻事件―博覧会と米国独立祭の花火、華麗一色のこの地区にも、花火の玉が海に落ちるとおなじく、日中戦争前夜の暗さがただよいはじめてきた。

しかし、昭和十二年（一九三七）の頃はそれでも中華街は、まだ盛りであった。このときの新聞は正月の景気の例として、酒類の消費は四斗樽二五―六樽、ビール百数十ダースだといひ、次のように報じてゐる。

「〔略〕ゴックンゴックン景気よく飲み乾した客の数が何んと万余、売上二万といふから豪勢なもんだ。だが、この華かな饗宴の裏には様々な悲劇がひそむ。例へば『焼豚一チヨウ』なんていふ陽気な声に伴れて、ゴツンゴツン殴り殺された三十頭の豚共がそれである。

三日初開き、トタンに流れ込んだ客が五百人、流れ出した酒が四斗樽二本、頭部を痛打されて即死の豚共が十頭、一日の、左様たった一日のですぞ。売上げが千円、つまり『猪』（一〇円札のこと）百頭のことです。五日の新年宴会の予約が出前二百八十人、



戦前の中華街

店四約百五十人。「略」(『読売新聞』昭十二・一・十五)

ただし官憲によって、市民に対しては戦争下の強制が加えられていた、例えば、山下公園の若いアベック三組の「接吻」が警察によって公然猥褻罪容疑で検事局に送検された。これにたいして新聞は批判、送検された検事局内の若手検事の間でも議論百出。新聞は、

「結局チヨン儲に二本差しの時代なら異論は無いが百千船去来する日本の玄関、特に異国情緒漂ふ処に唯一の誇りを持つハマ市、更に街の映画館でお馴染の「接吻」は公然猥褻罪にあらずと若人の春に凱歌が挙げた。而し検事局としては万全を期すべく木内上席の命令下に若き見習い検事が関係者を召喚一応取調べを行ふ事となつたが、事件が事件丈けに見習い検事達は皆尻込みをなしており、上席検事の名において指名される係官は誰かと此れ又検事局内の話題の種となつている。」(『横浜貿易新報』昭十二・六・十九)とし、検事当局の粋な取計らいにハマの若人は喜んでよいと報道した。

しかし、こうした粋な取計いは例外中の例外で、終戦まで個人の自由はすべて抑圧されていった。その前兆ともいうべきことは十三年(一九三八)六月、内務省警保局の厳達によるダンスホールの転廃業であった。(第二章関内地区参照)

山下町においては、十四年一月太平洋、十五年十月にはメトロポリタンが閉鎖、十五年までにはダンス教習所の横浜教授所も廃

業した。このときダンサー一八人が解雇手当が少ないと加賀町警察へ陳情、結局雇主が増額することで解決した。さらに外人（チエコスロバキア）経営のダンスホール、インターナショナルも廃業した。これより先の十二年九月ダンスホール、フロリダのダンサー七一人が大日本婦人会山下分会に加入、フロリダ班を結成したこともあったが結局は自粛。とはいふものの強制的に廃業させられたのであった。この地区で、時局にそぐわない施設ということで、市民の楽しみもここに追放させられたのであった。

●ビストル献納——一方、山手・山下にあっては、国家的課題の解決がすすめられていて、十二年三月二十五日、日本政府とイギリス、アメリカとの間で、三万〇、五〇〇坪（一〇ヘクタール）の土地にたいする永代借地権解消の調印が行われた。このことは、表面化されることはなかったが、永代借地権の解消は、一面では当時の「国威が発揚」されたと見られるが、解消されたと同時に横浜市内の臨戦下の一地域として、組み込まれていったことを示すものであった。

このことを示す例として、十三年八月には、外人住宅に雇用されているアマさんたちによって、大日本国防婦人会山手分会が発足し、翌十四年七月には山手の方面の外国人は、秘蔵のビストルを献納することもあった。

●インドの水飲台——しかし、外国との関係はまだ寛容の面もあった。十四年（一九三九）十二月山下公園には、横浜在住のイン

ド商人たちから、関東大震災のとき、横浜市民からのあたたかい援助を受けた謝礼として、インド式の水飲台が市に贈られた。このとき知事、市長、英国領事代理等多数の来賓、在住印度人百余人が列席、すべて印度式に異色の式典が行われた。さらに十四年にはホテルニューグランドでクリスマスが行われた。

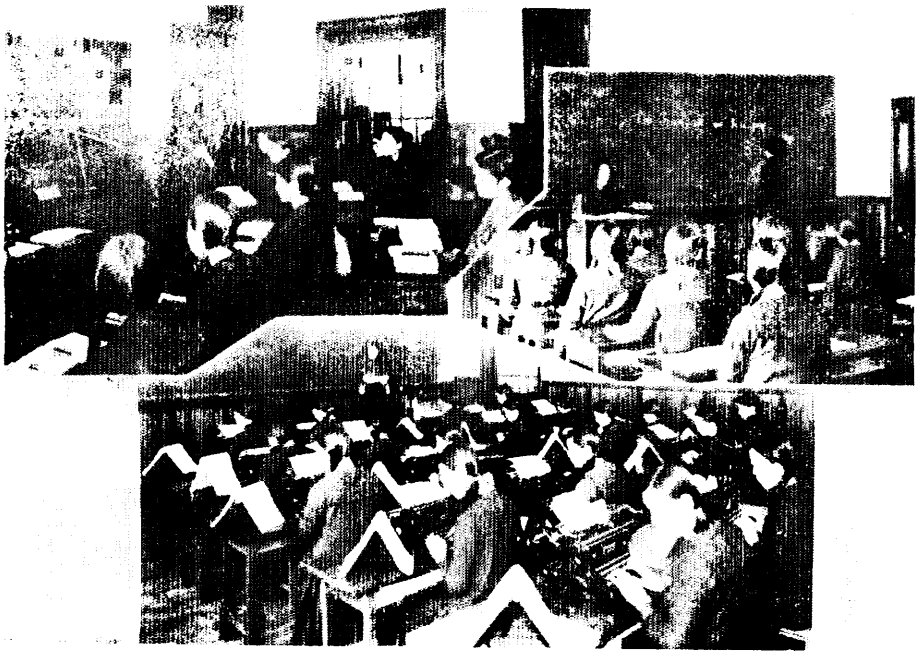
「横浜市の面目にかけて、淋しがるエトランゼ達にせめて朗かな雰囲気を作り出して慰めてやらうと、十八尺余もあるクリスマス・ツリーを急拵した。二十三日夜は特に子供デーとしてサンタクロースをつくり、国際色豊かなブレゼントを贈るが、大人がきても子供扱ひにして一夜を和かに過させようと云ふ計画だ」（『読売新聞』昭和十四・十二・二十二）

というような雰囲気も見られた。これらのことは、いかに太平洋戦争前夜といえど、横浜にとっては、外国とのかかわりは、切るに切れないものがあつた、という側面を見せていたのであつた。

●強制——しかし山手においては、戦争下の強制が加えられていた。例えば、外国系学校の、紅蘭、成美、精華などの私立の小学校における英語教育の禁止が通達され、十五年一月には外人墓地などの映画のロケーションも禁止となった。これは軍機保護法のもとに、観光写真、刊行物の大部分が一般頒布を禁止されたことによるものであつて、これを犯せばスパイ容疑とされて官憲に拘引されたのであつた。



インドの水飲台



紅蘭女学校の授業風景——上は英語の授業、下は英文タイプライターの実習、これらのことも廃止となった、昭和10年3月 〈津田静江氏提供〉

戦中の強制はさきの英語教育の廃止につづいて、十五年十二月にはインターナショナルスクールが閉鎖され、十六年には外国名をもつフェリス和英女学校は横浜山手女学院と改称することを県に届出、三月にはこの学校のアメリカ人教師は、故国に引揚げを開始、四月には校名が改称された。

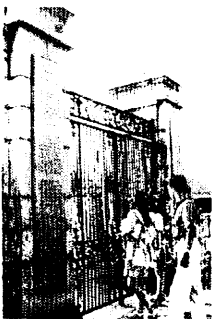
さらに、十六年（一九四一）四月、市は山下町の市有地六〇四坪（一、九九六・七平方メートル）を戦時農園とすることに決定、野菜などの増産に役立てることになった。そしてこの年、横浜小学校へは市の土木局が移転してきた。これは防空対策によって、市の機関を各所に分散させるためのものであった。

●墓地も例外なく——こうしたとき、山手の外人墓地の場合も例外ではなく、官憲の監視のもと荒れるにまかせ、聖域もなくなつたものではなかつた。これは最大の受難であった。

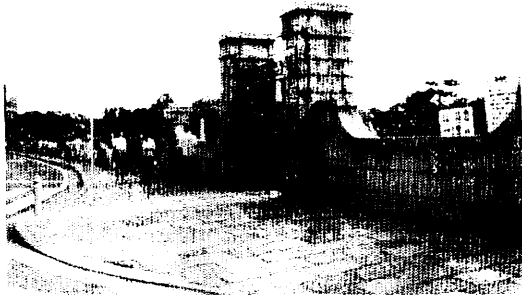
この管理者はいう。「その頃、外人の遺族が一番気の毒だったのは、日本の憲兵が、遺族を入れてくれないことでした。たとえば一家の主人が亡くなったというのに、奥さんも子供も、柵の外、門までで、それも憲兵の監視がつくんです。入れたのは中立国のスイス領事で、領事が立ち合うだけなんです。

気の毒に、憲兵がこんなにまでもいいじゃないかと思つていました。

もつとかわいそうなのは、遺体を埋めるところを柵の外で奥さんと子供たちが泣きながら見てるんです。別に墓地の中に入った



外人墓地の門扉



外人墓地正面

って、どうとゆう事も無いのにね。憲兵がつききりで……。

「まあ今だから話ができるんですが、当時だったらこうは話せませんよ」

さらにいう。「それにね、第一次世界大戦のイギリス慰霊碑の除幕式に、プリンスが見えるというので、正門の門扉をイギリスで作ったんです。合金でいい音がしたんですが、それが金属回収ということで供出を命ぜられたんです。

私は鉄柵や門扉は記念の物だから出さないってがんばったら、貴様はスパイだっておどかさされてね。三回位特高に尾行されたことだってありましたよ。

それで、さんざん供出しないうって頑張ったけれど、とうとう持ってゆかれちゃって。何のこたあない、それから半年で終戦ですよ。で私は港中学の所に置いてあるってんで、すぐ飛んだのですが、そのときは、メチャメチャにこわされ、鉄屑になっていました」(山手町 安藤寅三氏談)

●例外―開戦直前の十六年六月頃、横浜は本国に帰る外国人で時ならぬにぎわいを見せた。新聞は次のように報道した。

「欧州戦火の拡大がひびいてホテル・ニューグランドはこのところ宿泊者の定員百二十名を突破、大混雑を呈してゐる。つい先頃までは欧州から引揚げるユダヤ人でホテルは相当賑はつてゐたところへ、今度は独ソ開戦で一層混雑するやうになつたものだ。まづ先頃の全米独領事館の閉鎖でアメリカから引揚げ、帰国途中に

独ソ開戦で横浜に足止めとなつたドイツ人、それに二十四日敦賀入港のはるびん丸で上陸した独、フィンランド、リトアニア、エストニア人等欧州からアメリカへ行くもの、アメリカから欧州に渡る旅客が錯綜して、さながら各人種展覧会のやうな混雑を来すやうになつたもの。

しかもアメリカ行き旅客にも旅券の査証は容易に下附されず、これらのお客さんはこのころほとんど無期滞在の状態。例年なら夏枯れに悩むホテルも、今年はこの変則的な事情で大繁昌を予想されてゐる」(『朝日新聞』昭十六・六・二十六)

●外国人配給―ただし、こうしたことはむしろ例外であつた。

九月には米国系のチャータード銀行は閉鎖、十七年(一九四二)七月には香上銀行支店が市に買収されるなど、表立つ対米英戦争への方策がなされるとともに、外国人の生活自体も配給統制のなかにあつた。特に食料については、その扱ひも苛酷なまでの配給であつた。明治期から外国船相手に氷・水・食料品など船上必要な品物を供給していた艦船業者(シップチャンドラー)はその外国人配給所にくら替えした。主にフランスの船との取引をしてゐた関係者はこの頃についていう。

「私の所はズーと船舶に食料を納める商売をして居りましたが、戦争になつてからドイツなどの外国人の食料配給所になりました。

ええそれは関内に抑留されてない外国人が対象でございます。

私ども一軒だけだったようでございます。西洋野菜や時には果物などを配給しました。缶詰もございましたね。けれど品物の数が少ないもので、せいぜい一週間に二回、何曜日は何国人ときまっています。そのときは行列が出来るほどの外国人がきました。けれど、そのときは決って二人位の憲兵が、帳場にびったりとくつついて、お客に目を光らせてるんです。少しでもあやしいと思われると、憲兵隊の本部に連行されるんです。

配給所となったのは戦争が始まって、少したってからでしたね。配給所の名前は「川島」と言って終戦までやっています。仕入先は中央市場で、「特配」という扱いでした。配給の価格は、公定価格が決められていました。

配給対象の外人は、神奈川県下全てでございました。けれども、藤沢・鎌倉あたりの方は、自給自足が出来ましたらしく、あまり来られなかったようでございます」（山手町 川島庸子氏談）

●外国人軟禁——昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発。この地区ではさっそくその日のうちに、地区内の同盟国、中立国、中国人以外の外国人をわずか一時間の内に、警察力によって保護の名のもとに有無を言わず軟禁したのであった。男約三〇〇人は根岸競馬場に、女約五〇人は新山下町のヨットハーバーに集められた。国際状況の悪化に伴いすでに帰国したものもあり、この人数は、平時の五分の一ぐらいであったという。

そのときの関係者は次のように語る。「私は昭和十六年十二月

八日、午前八時、山手警察から呼ばれ、開戦と同時に収容した敵国人のうち三八人を根岸競馬場に入れたので、すぐ健康診断をしてくれと頼まれて、車で飛んでいったのを覚えています。伝染病などがないかというのが目的でしたが」（本牧町 渡辺熊雄氏談）

さらに関係者は語る。

「その時は警察が監視し、炊事も警察がしましたが、専門のコックを頼んで……。船に乗っていた人が多かったので、そういう人を五、六人頼みまして、肉とか野菜を優先的に入れました。最初の二カ月は罪人扱いでしたが、だんだん緩和されて保護的抑留になっていきました。

最初は奥さんや家族の面会にも監視が付きましたが、これも自由になされてゆきました。あまりなかったんですが食物の差し入れもやかましかったんですが、それも緩和されてゆきました。

私は外人の女房の方にも連絡して、三溪園の桜見に主人をつけて行き、そこで合わせたり、プールにつれていったりしました。

昭和十七年の秋頃からは、外務省から外出の許可も得、朝九時から夕方五時まで帰って来ればよいようになりました。しかし、国際的な情勢が悪くなって、あそこにおいてはまずいというので、山北の北足柄にあるセツルメントに移りました。昭和十八年の十一月か十二月頃の事です」（本牧町 渡辺浅次郎氏談）

「戦時中の外国人は、箱根へも軟禁されました。けれど行った先

に物がありません。それで配給はもと住んでいたところでやれというんです。無理な話なんです。結局、山手や山下町の外国人でしよう。中区役所でやりました。これは気骨の折れる仕事でした。

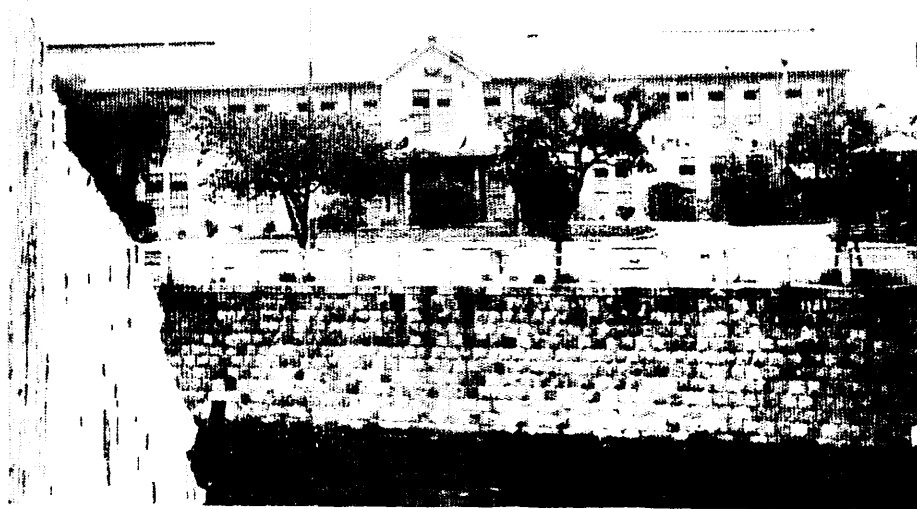
第一に食パンなんぞは、製造と販売のそれぞれ、一種の権利みたいなものが業者間であって、勝手にやるわけにゆかなかったんです。殊に配給が始まってからは販売（配給）は食糧営団、製造は民間に残して、分けてありましたんで、その関係だけだって大変なものでした」（同氏談）

地元の人はいう。

「戦争中、中華街には、日本中の中国人をここに集めたっていいますが、急に人口がふえました。そして官憲の監視のもとで商売をしていました。下町はこの頃生活の設備（施設：編者注）が悪くって、特に水が悪かったため、えらく健康を害した人も多くって、ずい分中国人は気の毒な思いをしたんです」（山下町有志座談会）

憲兵隊の屯所も山下公園に置かれ、翌十七年八月、現在の地方合同庁舎の位置に庁舎が移ったのも、外国人監視の対策としてであった。こうして山手・山下には、外国人の姿は見られなくなり火の消えたようになってしまった。

● 戦時の施設 ― 昭和十八年（一九四三）六月には山手公園が戦時農園として耕作地とすることに決定された。ブラフ・ホスピタ



山下町の憲兵隊庁舎——現在の横浜地方合同庁舎の位置（千葉行男氏提供）



元町市警ブール

ル（山手病院）は海軍に収用され、名を横須賀海軍病院と改められた。そして病院の屋上には高射砲も備付けられたという。また海軍の桜部隊がフェリス女学校に駐屯した。

さらに十九年六月元町の市営プールは水練場として名を変え、開場した。そして二十年四月、元街国民学校は十全病院の薬品倉庫として一階を貸与し、市の経済局の物資倉庫として三階を貸与するなど、教育の施設も遂に他に利用されることになった。そのため、この学校も分散授業を強いられることになった。

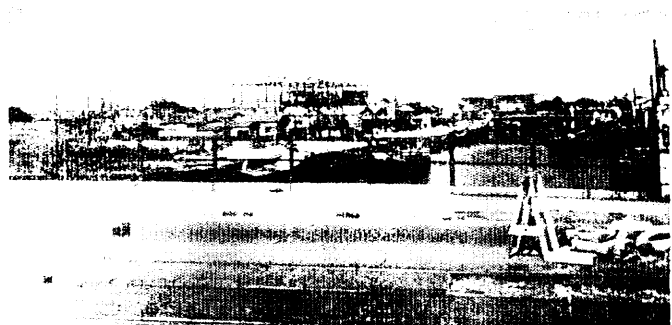
●空襲——昭和二十年（一九四五）五月二十九日、横浜大空襲。この地区も例外なく大きな災害となった。ただし山下公園寄りの欧米系商社地域と、山手の丘のほとんども焼失をまぬかれたことは幸であった。「欧米人の商社の多い公園寄りや山手の外人住宅一帯は不思議と焼けませんでした。きっと、そこだけ焼夷弾をさけて落したんじゃないですかね」（園内地区有志座談会）と地元の人はいう。

「十時頃、敵機が爆弾を雨のように降らせ、この辺の下町は全部が焼けました。伊勢佐木方面もすっかり焼けてしまいましたので、まっ平になって弘明寺の方まで見えましたが、湘南電車の走のりも見えたくらいです。この地区には外人が多いので、まず空襲でやられるようなことはないかと皆で話をしていましたのにな」（山下町有志座談会）

昭和二十年九月七日の山下町消防署長の報告によれば、管区内



戦災をうけた山下町——〈神奈川新聞社提供〉



—西の橋から（奥野太郎氏提供）

(関内、山下町)は戸数六、五五九戸、人口二万二、四三一人であったが、五月二十九日の空襲災害により残存戸数一、七一一戸、人口八、七〇六人に減少している。戸数において七四パーセント、人口で六二パーセントの減となった。

戦災は、中華街及び堀川寄りの一帯もことごとく破壊したが、人々は、一時的にバラックを建て、ここに居住した。

やがて八月十五日終戦、このときの中華街は当然戦勝国としての祝賀の気分には沸きに沸いたのであった。

第二節●中華街彩色

(1) 中華街繁盛記

●マッカーサーの宿舎―戦後、横浜の進駐・接収はこの地区からはじまった。昭和二十年(一九四五)八月二十八日米軍先遣隊が、三十日連合国軍総司令官マッカーサー一行、九月二日には米第八軍の主力が進駐した。横浜港からの米兵は、大棧橋の通船発着所や、山下公園わきの舟着場から上陸用舟艇に分乗し、群がって上陸した。山下公園はすぐみどりの軍服で埋まった。公園の外まわりには鉄条網が張りめぐらされ、接収された。旧日本軍の収用がなくなつて束の間、「日本人立入禁止」の立札が立てられた。

公園前の、ホテル・ニューグランドは、その日のうちにマッカーサーの宿舎となった。ホテル前には衛兵が立哨。星条旗がホテルの屋上で風にはためいた。栄養不良の日本人通訳が米兵と日本人との間をとりもち、同じくやせほそった警察官が丸腰のまま公園への日本人の立ち入りを取り締まった。

「厚木から長い、炎熱の行軍をしてきたマッカーサー元帥一行が遅い昼食の席についたとき、ホテル側が用意したメニューは、スケソウダラとニンジン、タマネギ、馬鈴薯の野菜類に冷凍クジラをステーキ風に料理したものであったが、元帥はひと口たべただけでそのあとフォークをとろうとはしなかった」(『ホテル・ニューグランド50年史』)

マッカーサーは、同ホテルの三二五、三一六、三一七号室の三部屋つづきの室に三日間だけ宿泊、四日後には、接収した旭台のマイヤー邸に移り、さらに九月十一日、東京赤坂の米国大使館に移り、第一生命ビルで執務することになった。

この間、九月二日には、横浜港外の米第三艦隊旗艦ミズリー号上での日本降伏調印式に出席した。

ホテル・ニューグランドは米軍高級将校や婦人部隊(WAC)の将校のクラブと食堂、宿舎にあてられた。

●接収―この地区での接収は、土地については山下町では五万一、九六三・〇七平方メートル、山手町は二〇万一、七〇三・九平方メートルであり、このうえ建物も接収された。

住宅については二十一年五月十五日現在の横浜市渉外課の「進駐軍接収住宅調書」によれば全市一〇六戸、うち中区は八八・六パーセントに当る九四戸で、うち山下町は二棟、山手町では四六戸と中区分の過半を占めた。これらはカールフライ、W・エグチ、杉浦、中沢、森、ライジングサン社長、副社長、ロンジーなどの人々の住宅や、山下汽船社員クラブなどであった。

そして接収した住宅をつなぐ道路も接収され、日本人は通行禁止となった。

この地域には米軍の住宅が立ち並んだ。英一番館の跡地は、戦時初期には、木製のバックネットが建てられ、草野球が行われ、終戦まで空地となっていたが、そこには婦人将校の宿舎が建てられ、ポールパークと呼ばれていた。官庁や商社などのビルも接収され、星条旗があちこちに翻り、宿舎の前庭には当時ぜいたくとされた芝生が早くも植えられた。

●柵外の花火——昭和二十三年（一九四八）の夏、横浜の名物であった花火がアメリカの独立記念日に米軍の肝入りで復活した。しかし、市民は、山下公園に入ってその五彩の花火を見ることはできなかった。市民にとって山下公園は、金網にすがって見る彼方の世界であった。大佛次郎はこの風景をハマツ子の一人として次のように語っている。

『霧笛』を書いたのもこの当時でね。波止場近くの山下公園には夕方いつも散歩がてら出たものだ。ハマ独自の潮風の香をかぎな

がら、ポーツと低く、重く流れる汽笛を聞いているとなんともいえないね。とくに夏の夕方などは素敵に感じて、じっと船を見ていたときもありましたよ。海に臨んだ美しい緑の公園、それが、あんなに家（米軍将校ハウス）が立つちまって、昔の面影がみじんも見当らなくなってまったくイヤだね」（大佛次郎『霧笛』を生んだ波止場情緒）『横浜今昔』

これにたいして、同じ山下町のなかでも下町一帯は、接収されることなく、そこには中国人たちの町、中華街がいち早く復活した。しかし当然のことながら敗戦という事実がはっきりと、この町には表われたのであった。

戦後のようすを町の人はいう。

「いちばん困ったのは、終戦直後です。山下町は治外法権みたいになってしまって、なにごととも日本人人口出し無用でした。警察だってなんだって、みじめなもんでした。

勿論、いまはそんなことはありません。外国人のなかでも中国人は特に、一旦信用されるとトコトンまで信用してくれますし、いまは仲良くやっています」（山下町有志座談会）

●横暴——こうした状況のなかに、県は進駐軍兵士のための慰安施設を作った。

「県では連合軍先遣部隊の横浜進駐に伴い慰安施設を作った。互楽荘、日本造船寮を同夜直ちに開設、バー・エクスプレス食堂、カフェー・カナダ汽船、船舶無線は五日頃から開業するが、キャ

パレーの大阪商船は設備の関係上多少遅れる」〔毎日新聞〕昭二十
・九・一

山下町の互楽荘は、米軍の指令ですぐ廃止されたが、そのとき
の進駐軍は横暴であったと、市民は今にいう。

●あふれる食料品―終戦後のこの地区は、他の地区とくらべ米
軍がかなり寛大に扱ったということが出来る。ただし、その寛大
さは、横浜在住在勤の、欧米、東洋の外国人だけで、横浜の市民
にたいするものではなかった。そして当時の行政側も、戦勝国の
国民に、その規制などは手控えざるを得ない場合も多かった。

それにしても、この地区の戦後の復興は山下町の一角からはじ
まった。何といつてもそこには豊富な食糧があったからで、この
点野毛と似ていた。ただし、この地区での売手は中国人をはじめ
とする外国人で、買手は、空腹をかかえた日本人であった。

二十年十一月、はやくも、ここは活気を呈していた。新聞はそ
れを詳報した。

「横浜山下町は、焼跡に最近ほとたん張りのバラックが軒を並べ、
さすがに素早い復興色を見せてゐるが、店先きに並べたり或は立
売りの林檎、蜜柑などの果物、様々の揚物類、魚等々の食糧品や
バラック食堂のどんぶりものなどが市民の足を引寄せて、このと
ころ新風景を現出している。

品物の値段をみると林檎が大ききよつて四つ乃至二つ十円、
揚物類が四つ十円、ドーナツツ（砂糖がついてゐる）一個五円乃

至三個十円、栗が十五、六個で五円、ぶどう二房十円、甘藷の揚
げたもの十片くらゐで五円、蜜柑十個くらゐで十円、といった調
子、純白の米の飯が人眼を驚かす。どんぶりものは、種は日によ
つて違ふやうだが、天どん、カレーどん、牛どん等々のどれも一
杯二〇円、しかし細々の配給で飢ゑた胃の腑には二〇円のどんぶ
りが栄養そのものに見えるのか、飛ぶように売れてゆく」〔毎日
新聞〕昭二十・十一・四

とにかく、ここへ来れば食料はなんでもあった。町の人はい
う。

「復興のめざましかった山下町には、食料を求めて日本人が殺到
した。売上げ金は、いちいち数えていられないほどで、四斗樽に
日本紙幣は無残にも投げ込まれた。投げこんでおいてかき張ると
足で踏まれた、どこの店もどこの店も繁盛した。これをいつも見
ていた私は、胸のなかに敗戦の悲嘆がこみ上げてくるのが耐えら
れなかった」(相生町 青木清雄氏手記)

こうした戦後の闇市が立った山下町の一角は、市民にとって、
食欲をそそり、そして満たす町であった。二十一年八月、みかね
た警察は配給統制禁制品の販売取締りを、野毛の闇市と共に実施
した。このことは中華街の活況を裏付けることでもあった。

●華僑団結―しかし、戦災をうけた下町が本格的な復興を見せ
るのは、その後数年を必要とした。二十五年（一九五〇）まだ関
内や上町は接收されたままで、わずかに野毛のクジラ横町にマー



昭和20年代の中華街〈横浜市図書館提供〉

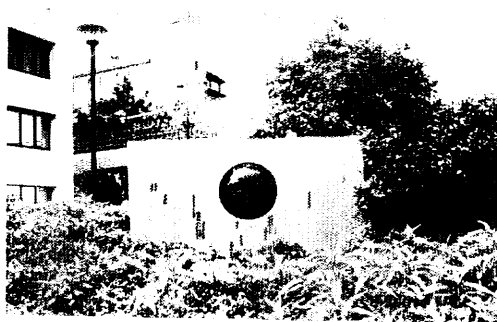
ケツトがあつた程度にもかかわらず、この中華街では、むしろ異常なほどの景気に沸いていた。二十五年を過ぎると、その景気はさらに急激に上昇するのであった。

ヤミ市から脱皮した中華街の華僑にたいして、二十二年九月、横浜の業者は提携を申し入れて、中国、南方貿易を積極的に行う意向を示した。華僑はこの地区の主役となりつつあった。二十三年一月華僑は三、〇〇〇人を突破していて、二十四年八月には華僑総会で自治会成立式を挙行。ますますその団結がふかめられていった。

●文化への一石―町がこうして次第に発展の気運に向うなかで、堀川に沿った山下町の空地（現、地方総合庁舎敷地）には、開港以来、横浜の文化発展に貢献したヘボン（カーチス・ヘップバーン）博士の記念碑が有志によって、この年十月に建てられた。戦後間もないときの記念碑の建立は、その斬新なデザインもさることながら、平和復興と戦後の文化的指向への一石を投じたものであった。

●軍需景気―二十五年朝鮮戦争がはじまり、港は、戦場から帰ってきたもの、本国へ帰るもの、そして本国から来て戦場にゆくものなど、米軍兵士の往来で錯綜した。地元では、往来のはげしくなった米兵を相手とするバーやキャバレーが山下町一帯を中心に増加、意外な繁盛がはじまった。夜ともなると、原色まばゆいネオンが輝き、昼間以上のにぎわいとなった。こうした状況は山

（ヘボン博士の記念碑



手の丘から少しはなれた本牧の接収地のまわりにも広がっていた。これらのバー、キャバレーには、アメリカの風土にあった音楽、ジャズが盛んに演奏されたり、ダンスが流行するなど、一種の軍需景気を現出した。

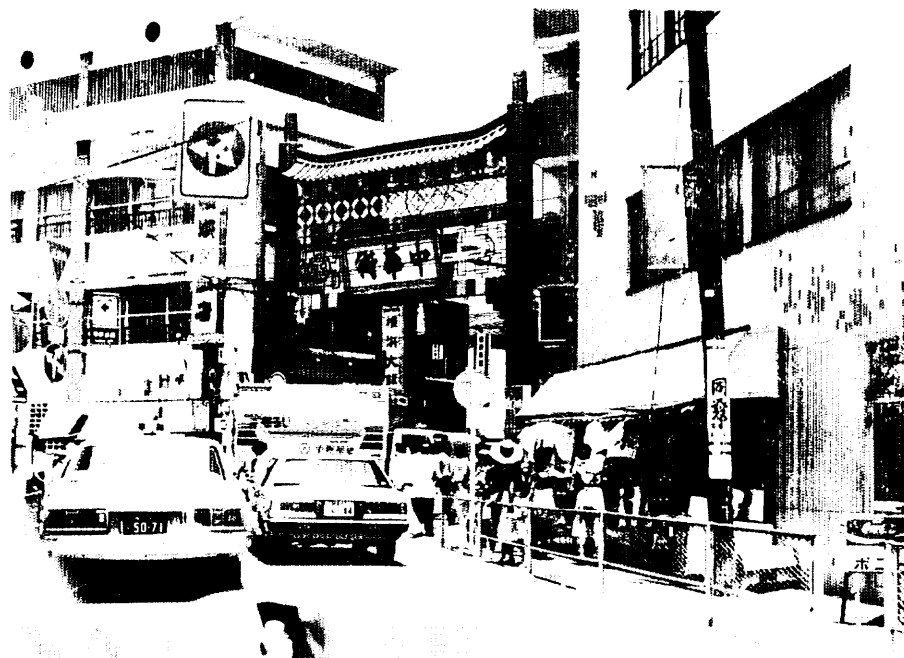
機を見て敏な人々は、これに目をつけ類似の店をひらいて大きな利益を得るために動き出した。特に商才にたけた華僑たちはその団結のもとに中華街の発展へのきっかけをつかんでいた。

さらに二十七年（一九五二）二月大棧橋が接収解除となり、貨物船や客船の出入が多くなるにつれて、その人々のうちには中華街へと流れ込む人々もでてきた。

戦後の一時期、四斗樽一杯の売上げを見せていた中華街の各店も、景気の上で落ち込んでいたが朝鮮戦争と大棧橋の客船の出入、そして接収地の一部解除によって、景気をとりもどしていった。そして三十年代高度成長の波に乗ったのであった。

●街のシンボル―三十年代（一九五五）二月、中華街では宣伝もかねて、復興を象徴するかのようになり、街の入口に極彩色の「牌楼門」が建ち、町のシンボルとなった。こうしたことによって戦前とは違った異国情緒が現出し、以来中華街の表通りには料理店、裏通りには外国人むけのバーも出現、やがて地域の繁盛をむかえることになる。

三十年代の中華街について、週刊誌は次のように書いた。
「大きな朱塗りの門の上に『中華街』のネオンが浮かびあがり、



中華街入口の牌楼門（昭和54年）

シルクセンター国際貿易観光会館
右手のビルは産業貿易センタービル



横浜電々ビル



両側に並んだ青丹極彩の中華料理店も、ケバケバしい色をネオンの明りにうかびあがらせる。中にある料理店は五十数軒だそうだが、一流といわれる店は同発、海員閣、華勝楼、陽華楼、安楽園、満珍楼などだ。値段の方は、陽華楼の定食一人前五千円が最高で、三千円あたりが相場。味もいいが値段もいいといえるだろう。

店を出て、再び「中華街」と書かれた大門の下をくぐる記者の耳の中に、『横浜は港町だから、悪いところがあるのは仕方ないねえ』という外人バーのマダムの言葉と、『今の横浜は米軍の接収から解除されて昔の横浜の姿に戻るまでの過渡期です。麻薬も売春もおいおい追放して、日本一の文化的都市にしてみせます』という半井清横浜市長の言葉が、かわるがわるひびいてきた」

『週刊朝日』昭三十七・六・十七号）
「この中華街が今日発展をした一つに、華僑の生活力の強さを学ばなくてはならない。個人生活の確実さと、相互扶助の信義は非常に強いものである。常に個人の商業道德の昂揚につとめ、店の信頼を得ると共に、相互扶助の精神を持っている点は学ぶべきだと思ふ」(前掲誌)

●空地を埋めて——こうして戦後の中華街が形成されてゆくなかで、隣接の上町、すなわちかつての欧米人の商社一帯は、がれきの山が残り、その目ぬきの建物の接収の大かたは二十七年によく解除されたものの、再建の気運はまだみせていなかった。

中華街がその色彩豊かなシンボル、牌楼門を建てた三十年、横浜公園わきの角地に七月、電信電話公社によって横浜電々ビルが建設された、地上五階地下一階の水色タイルに彩られた建物は山下町の新時代を表わすものであり、横浜公園周辺が官公署の集する地域となる先導的な施設となった。

三十四年(一九五九)三月、電電ビルにつづいて山下町一番地英一番館あとに地上九階地下一階の偉容を誇るシルクセンター国際貿易観光会館が建てられた。これは神奈川県・横浜市・地元経済界が協力し、開港百年事業の一環として、建設されたものであった。館内にはスーベニヤショップ、横浜貿易幹旋所をはじめ、シルク博物館、都道府県物産観光幹旋機関、横浜通商事務所、横浜生糸取引所、領事館、生糸や船舶関係の商社、六階から八階まではシルクホテルの客室、九階には展望場などがあった、復興山下町の先がけ的な建築となった。空地もこうして少しづつ埋められていった。

●残滓——しかしそれにもかかわらず、大きな空間を占める海浜部の象徴的存在の山下公園は、二十九年に約五分の一の四、七七六坪(一・五八ヘクタール)だけが返還されていたにすぎなかった。三十四年六月二十九日によく大部分が返還されたが、かつての公園はあとかたもなく、米軍将校用のヘリコプターの離着陸地点を示す日型の石が地上に埋め込まれていた。荒れ放題の公園、それも、一部の接収は、なお残り、公園としての整備はは



戦後の山下町——戦後の空き地が目立つ(青木清雄氏提供)



接取中の山下公厩——園内には米軍の住宅が並んでいる〈神奈川新聞社提供〉

かどらなかつたが、市民にとっては大きな喜びであった。

昭和三十五年（一九六〇）の夏、山下町のホテルニューグランド裏手の付近は、接収が解除され、建物撤去後、跡地がそのまま残っていて、その地下に埋まっている金物を掘り出した跡があちこちに残っていた。それに建築のときに出された土砂が捨てられ、その土や塵芥がなげ出されて、それが小山のようになり、はなはだしいのは、道路にまで迫る始末であった。

当然、市や区ではこの処分が真剣に討議された。それに関内牧場の名残りであり、利用のきまらない空地には、身の丈近くの雑草がおい茂った。除草や薬剤の散布などが、これまた検討された。これらは美観をさまたげるばかりでなく、市民の衛生に、犯罪の防止に、大きな問題であった。市の関係機関はあげて土砂や雑草の始末に追われたのであった。

●墓地の条件——戦後の外人墓地については、米軍はその管理にかなり寛大であったという。戦争中管理もままならぬため墓地は草が生い茂っていたが、米兵の指揮により日本人労務者によって雑草は数日で刈られ、墓石はふたたび地上に表われ、陽の日を見ることとなった。

外人墓地の管理者はいう。

「米軍は施設に対する復旧や援助をしてくれました。その代り、仲間を埋める為にあすこの墓地を使っていいだろうという訳なんです。条件を付けてきたんで、それで困っちゃったんですよ。進

駐してきた米軍は家族を呼んだでしょう。とたんに赤ちゃんの死んだのがふえちゃったんですよ。まあ、そういう時期だったんですかねえ。随分死産とか何とかって、多かつたんですよ。かかって持ってきて埋めてっちゃうんですよ。今でも埋葬してあります。でも名前ぐらいは帳面に書いてくれましたが、他人の所をやたらに使うんで困っちゃいました。ここだけでも二百体はあります」

(山手町 安藤寅三氏談)

●埋葬者——現在、外人墓地に埋葬されているものは、四、二〇〇体といわれている。ここに眠る人はモレル(鉄道建設)ワグマン(ボンチ絵制作)コーブランド(ビール醸造)マーシャル・マーチン(震災復興協力)などである。

●開放——山下、山手地区の接収の解除は、昭和四十七年二月ごろほとんど終ったが、山手の一部はなお残り四十年代に入ってからやく解除され、そのあと処理に問題を残すことになる。

この地区が戦後から脱皮するのは、中華街の繁盛は例外として、山下公園の解除や高層ビルの建設からで、それは市民に平和がもどった実感を与えるものであった。

三十五年六月、山下公園が全面解除され、復旧工事ののち市民に開放された。

●氷川丸公開——戦後、平和をとりもどした市民は、ふたたびこの公園に集まった。三十五年七月一日には、市は涼を求める男女に夜間開放を行った。

さらに、三十六年六月二日、「氷川丸」が、公園の地先海面に係留、保存され、船舶のユースホステルとして開設された。

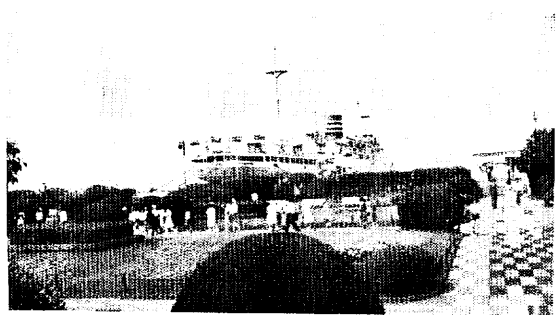
氷川丸は、現役中は総トン数一一、六二五トン、全長一六三・二メートル、幅二〇・一二メートル、高さ一二・五メートルで、航海の時の最大速力一八・二ノットであった。

氷川丸の建造は、第一次大戦後、アメリカ・カナダ両国が太平洋航路を重視し、船舶増強したなかで、日本郵船はこれに對抗して豪華客船三隻(浅間丸、龍田丸、秩父丸(後、鎌倉丸))と豪華貨物客船三隻(氷川丸、日枝丸、平安丸)を建造、前者をサンフランシスコ航路、後者をシアトル航路に配船することにした。氷川丸は、こうした背景のなかで昭和五年(一九三〇)五月に建造されたもので、シアトル航路を処女航海として、以来三十年、「太平洋の女王」とうたわれ、戦時中は病院船として、戦後は復員引揚輸送船として活躍、その後、北海道と大阪、横浜間の輸送を行い、二十八年ふたたびシアトル航路に返り咲いた。最終航海は、昭和三十五年八月、同じ、シアトルであった。この間太平洋横断二三八回、乗船客二〇万人をこえた。

この氷川丸は公開以来、昭和五十二年までの見学者は一千百万人へのぼり、外に無料入場者を含めば、日本人一〇人に一人が乗船したことになる。

こうして山下公園は、海上の氷川丸によって、公園としての機能を立体的に発揮することとなったのであった。

氷川丸——四季を通じて訪れる人が多い



●人気上昇―こうした新しい横浜名所が港に誕生すれば、山手の旧英軍駐屯地の港を見下す丘にも「港の見える丘公園」が三十七年五月にオープンした。

一方、上町と対比されてきた中華街とそのまわりには、電々ビルにつづいて、派大岡川寄りには三十八年四月横浜商業高等学校港分校が開校、翌三十九年一月には港商業高等学校として独立開校した。

かつて、下町といわれたこの地域は、もはやこうした古い呼び方が地域の人々からも消えた。

このことは、上町の山下公園寄りの欧米系の商社地域の優位性がほとんど薄くなったことを表わすものであった。

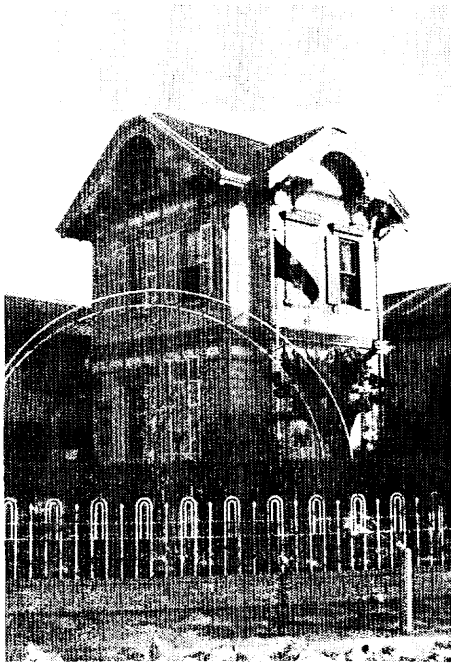
三十年代、観光地としてとくに人気がでたのは、山下町のなかでも公園と中華街、それに山手外人墓地を中心とする山手の尾根道であった。そして、この人気は上昇のまま、昭和四十年代に入るのであった。

(2) 新しい地区

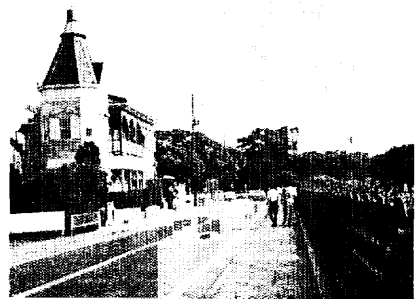
●新しい山手―谷戸坂を上りつめた山手の入口、港の見える丘公園のオープンには、横浜のイメージアップの大きな布石となった。横浜がヨコハマと片仮名で書かれはじめた。例えば「ブルーライト・ヨコハマ」などの歌謡曲が町にあふれていたのもこの頃からで、横浜の人気はムード的に上昇していった。

こうしたなかで、四十二年（一九六七）一月には、丘の下、元町の商店街SS会ではチャイミングな街づくり完成の祝賀パレードが行われ、外人墓地前の通りに旧園田邸が移築され、別に異人館を模したレストラン十番館が完成、山手の異国情緒を再現して、観光客をよろこばした。

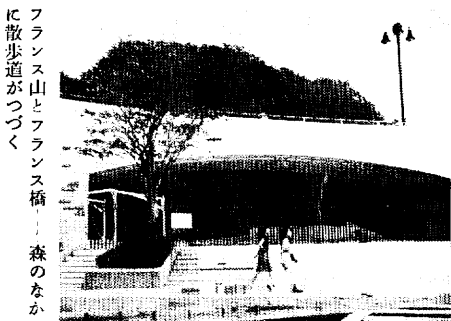
翌四十三年二月、日本洋画の先導的な役割を果たしたポンチ絵のチャールズ・ワグマンの墓前祭が行われ、秋紅葉の十一月外人墓地では、明治百年記念碑の完成除幕式が盛大に挙行された。こうして山手は懐古にひたった。この年、すでに、山手のなかでも最も緑をのこし、自然景観の残るフランス山や、イギリス領事館跡地の買収が行われていた。しかし山手の土地買収にあたって



山手資料館（旧、園田邸）



異国情緒を見せるレストラン、右は外人墓地



フランス山とフランス橋―森のなかに散歩道がつづく

は、さまざまな困難を経なければならなかった。四十四年七月、市はイギリス領事館跡とフランス領事館跡の買収について、それぞれの政府と合意した。さらに、港の見える丘公園では、隣地の船会社マッキン・ノンマッケンジーの土地を買収、公園面積を四万平方メートルとほぼ倍に拡張することに成功した。

四十六年（一九七一）六月フランス山の買収調印が行われ、翌四十七年六月には公園として公開された。

こうして山手は、さきにオープンした港の見える丘公園をふくめて、文久から明治初期まで外国兵の駐屯地となって以来、戦前、戦中を通じて、景観の地でありながら市民には近寄りがたい地であったが、ようやく市民の楽しみ場となり、市民のものとなったのであった。これは、新しい山手の誕生だった。

●景観保全——市は折角得られたこの地区の自然景観を残すため、四十七年十一月十四日、「山手地区景観風致保全要綱」を制定、山手の自然を残す方法を積極的にとった。

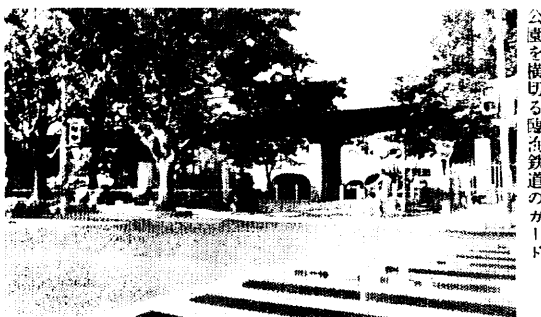
この要綱は、山手地区とその周辺の景観風致を保全し、横浜にふさわしい眺望を確保するため、これに関する法律や条例が出来るまでの間、地区の開発や建築の行為を指導してゆこうとするものであった。

こうした山手に対して、山下町においては、西之橋わき、いわば山下町のはずれには横浜地方貯金局（現、貯金事務センター）が四十年六月に建設され、公的施設の高層化が始められた。しか

し、いまだ戦後の未整理の問題をかかえていた。戦後、秩序なく建てられた山下公園前の通りの露店三三軒の撤去問題であった。道路上の美観をそねっていただけでなく、清涼飲料水や食品の販売は、設備がととのっていないため、保健衛生の面からも危険であった。

市ではすでに四十年（一九四五）からその撤去に腐心、しばしばその対策を行ったが、食品取扱いの面、そして露店の増築や、夜間営業は八時までと決められていたのに深夜になるなど、問題が発生、市は、一つ一つこれに対応し四十四年十一月公園内に市の施設を作ることと結着、四十四年五月ようやく自主的な撤去となった。ここでの執拗な「戦後」はようやく終わったのであった。

●論争——このような山手における景観保全に関する施策がなされているなかで、東横浜駅と山下ふ頭を結ぶ高架式の山下ふ頭臨海鉄道線がこの年の七月に竣工した。延長一・八キロメートル。この鉄道は、山下公園の入口から横一線に、海に沿っている。この鉄道線は三十六年、市から計画が発表されたが、これに対して市民は貨物列車が公園かで、大論争を巻き起した。結局、公園の美観を損ねないように建設することとし、市の態度が貫かれて開通することになった。一日二往復、船舶輸送で、コンテナ貨物が主流になったいまでは、これは無用の長物、と言う批判もある。市では四十三年に完成した本牧ふ頭まで鉄道を延ばす計画を持っていたが、立消えとなった。



これらは山手、山下地区景観保全の状況の一端であった。

●残る戦後——こうした、景観の保全は、市における施策の実施、市民の関心が高まるなかで、昭和四十年代後半になってからだ、山手の戦後処理が未解決であった。接収の土地は山手町そのものばかりでなく、竹之丸、柏葉など、山手町に接した地点数カ所であった。だが、これも、四十七年（一九七二）二月十九日になつてようやく解除された。ただし、これは手放しで喜べることではなかった。

米軍は、住宅を接収すると、住宅への自動車の道が狭いとして、いままでの公道わきの民有地をけずりとして一・八メートル拡張したので、所によっては宅地の大半を失う人もでてきた。しかも一般には道行禁止とされ、町の人々は生活上の必要から通行していたものの、不便さはこの上もなかった。全延長約二万二、〇〇〇メートル。面積にして一万三、〇〇〇平方メートル、うち民有地でこの道路拡張によって失なつた土地は六、〇〇〇平方メートルに及んでいたのであった。

住宅にとりなつて、道路も接収解除されたが、町の人にとつては、いまさら道路となつた土地の返還もかなわず、せめていたんだ道路の改修、整備を市に要求した。市は接収されたもとの道路分を買収、新たに道路として認定、さらに国庫補助金で整備するなど、あと処理を必要としたのであった。これなどは接収処理の一例であつた。

●ムード増す——横浜のムード的な人気が増幅されたのは、山手とともに中華街のムードが大きく作用している。

しかし町域全体は、震災復興以来の狭い道路と戦災以後の建物の増加で空地がなくなつていた状況であつた。これにたいして駐車場が是非とも必要となり、新設することが要求された。二、三の中華料理店では自家用の駐車場を急造したものの、相変らずこの問題は解決することなく、悩める都市問題の一面をのぞかせることとなつた。急速に発展した車社会の歪みがここに表われていた。

四十七年十二月、山下町九四番地には四階五層の三五〇台収容のパーキングが設置されるなど、その対策がはかられたのであつた。

そして高度成長の波にのつて、町には飲食店が急速に増加した。

昭和四十六年二月には「横浜中華街発展会協同組合」が発足した、この組合は三十六年三月、地元の人と中国人との間で結成した組合の再編成であつた。翌四十七年、自力で北、南、東入口に楼門（アーチ）の建設と水銀灯の設置を手がけた。さらに、この年の十月十三日にはメインストリートのカラー舗装が完成、音楽隊を先頭にお祝いのパレードがくりひろげられた。それに日中国交回復後、初の国慶節もこの月に行われ、町をあげての盛況であつた。



竜舞 神奈川新聞社提供

しかし、中華街はこれ迄ことさらに宣伝をしなくても来客が多いので、より以上利益を上げるための、街全体の振興策には、必ずしも積極的ではなかった。

しかし、昭和四十八年オイルショック以来の全国的な不景気の兆のなかで、さすがのこの町も、積極的な振興策を打ち出さないうけにはゆかなかつた。そのとりかかりは、完成したカラー舗装によって町のイメージを少しでも変えることであつた。

これはいまの中華街の盛況のデモンストレーションともなつた。街並みの看板もネオンもいよいよ多彩に、来客は街にあふれてきた。

●リカルテ碑——四十七年一月には、山下町に仮住いしていたフイリビンのリカルテ將軍の碑が、山下公園の一隅に立てられ、その十日には除幕式が行われた。リカルテは大正四年日本に亡命してきた人で、フイリビン独立の闘士であつた。

「將軍はよく独りで山下公園にでかけてはベンチに腰をかけ、日がとっぷり暮れても立ち去ろうとせず、南方の海の一点を凝視して禪僧のように又銅像のように黙然としてゐることがあつた」(太田兼四郎「鬼哭」というが、こうしたことにも山下町の国際性をみることができるといふことができる。

●中華街——五十三年三月、横浜公園ランプまで高速道路横羽線の開通があつて、主として東京方面からの客も速く容易に來られるようになったこともあつて、中華街はますます観光名所となつ



リカルテ將軍の記念碑

ていた。料理店を中心として、中国工芸品、雑貨店、中華菓子店のほか、食肉店、薬品店など、あらゆる店が増加していった。

中華街での主役、料理店は、一一〇店(五十六年度)で全店舗の六五パーセントであった。料理は広東料理、北京料理、上海料理、京蘇料理、それに四川料理、台湾料理と豊富で、メニューは充満した。

こうした料理店のほとんどは家族労働で成り立つ店で、中国本土や台湾からやって来た華僑の一世が苦勞して築き上げた店が多く、冒険をきらう経営態度、不動産はほとんど華僑の自己所有、という堅実一筋であったが、これをうけた二世、三世の経営者は

発展策を新たに講じ、東京をはじめ県外へと進出して、ますます商売の向上をはかっていった。

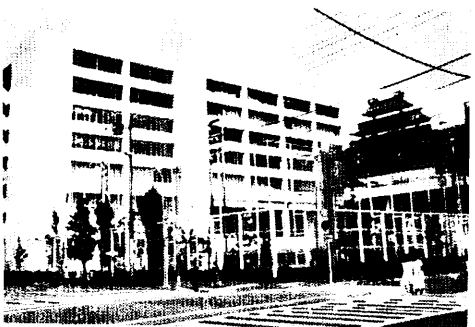
●楼門完成―五十二年(一九七七)十一月二十六日、都心プロムナード第一期完成記念式典が中華街の南門前において開催されたが、本町の中央通り東門の近くから、前田橋にいたる元村通りといわれた道の歩道に、陶製の絵タイルをはめ込んだ特製タイルの舗装がほどこされ、道の両側には県内初めてといわれる姫リンゴの並木が植えられた。この時完成した南門は、前田橋の手前に造られた。式典はこの門の下で行われたが、これで中華街における五ツの門、大門(中華街入口)、東門、西門(港中学校わき)、



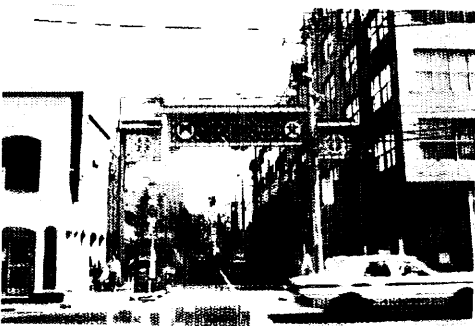
東門



南門



西門



北門

北門（横浜公園側）が完備され、ますますエキゾチズムを増すこととなった。

●宿命——こうした中華街の動きに対して、山下公園側の欧米系商社の多い一帯は、接収による復興の立ちおくれがたたり、四十年代に入っても開発は全く遅れていた。山下公園は入出が多いにもかかわらず、そこはひっそりとした地域となり、裏町化は否定できなくなった。活気はもはやみられなくなっていた。商社は旧地に戻るものは少なく、辛くも戦災に焼け残った外国系の商社が、昭和二十二年の制限付民間貿易再開以来始動していただけで、外国の各国協調と経済活動の結末が求められないまま地域全体としての復興策はほとんど見られなかった。

●光彩——しかし、この地域の立地は中華街と山下公園の間にあるため、企業者からは、新しく、土地高度利用の地域として着目されたのであった。

昭和三十六年一月、山下町一五番地に、地上一〇六メートル、円錐型をした陸上灯台のマリンタワーが建てられた。高さは陸上灯台で世界第一、船舶航海の安全を図り、ここより放つ光六〇万カンデラは港を照し、湾内での主要な灯台となり、しかもこの地域の前途に光彩を放ったのであった。

●新旧交替——ただし、この地域での復興は、公園ぞいのベルト状の地域であって、他の地域のすみずみにまでの開発にはいっていないかった。それに、ここでの復興は、震災後建てられ、戦災

で焼け残ったビルを解体し、その跡地に新しいビルを建てることにあった。このようにここは現代感覚による新しい都市創造の地点として考えられ、新しい手法が推進された。市は山下公園周辺地区整備の指導にのり出した。古い建物で解体の憂き目をみたのは旧アメリカ銀行（四十五年三月）、旧アメリカ領事館（四十六年七月）などであった。

五十年代に入ってもビルの解体はつづいた。赤れんがのもの、イギリス七番館も、ついに解体（一部資料館として保存）された。まさに、古きものから新しきものへ、建物の新旧交替であった。

五十年代の公園沿には、外国人商社を解体した跡地に高層ビルが次々と建てられた。すでにシルクセンター国際貿易観光会館がこの地一帯の新しいイメージを造りあげていたが、それに加えて、五十年（一九七五）一月には、地上六階地下一階建、三万八、四七六平方メートルの県民ホールがここに建設された。

さらに十一月産業貿易センターが竣工、センターは地上十一階地下二階建、四万三、六二八平方メートル。これらの建物は高くこの界隈の空をおおった。

そして県民ホールと産業貿易センターとの間には、ペア広場といわれる、新しい感覚による都市空間をデザインし、創造するところが試みられた。そして県民ホールでは第一回の神奈川アンデパンダン展がギャラリーで開催され、文化活動のはしりとなった。高層化はさらに進められていった。けれども、この港に面した既

めのよい景観に、建物が立ちはだかることよって、「眺望の権利」が失われること、ビルの日かげとなつて、日照の権利が奪われるものとして、公園付近の住民によつて、市にたいして高層ビル建設の建築確認取消を求める訴訟が行われたこともあつた。

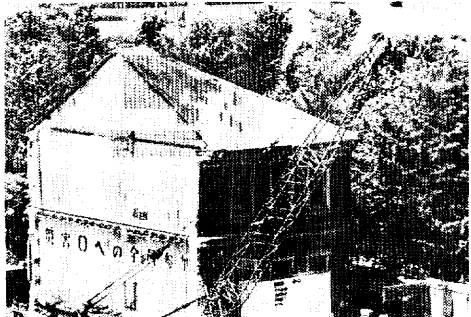
●都市美―しかしこうしたなかで、五十四年(一九七九)、四月には創価学会神奈川文化会館が高さ三九メートル、十階建てで、また、県庁新庁舎よりわずか四・三メートル低い四四・四五メートル、十三階建てのザ・ホテル・ヨコハマがそれぞれ建設され、山下公園沿いは、かつてなかつた新しい都市美を構成する地域に変わつていった。



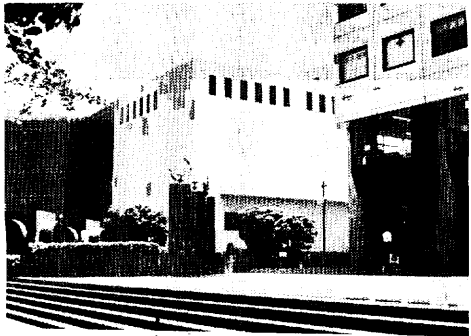
旧、アメリカ領事館(昭和46年7月)〈神奈川新聞社提供〉



旧、アメリカ銀行(昭和45年3月)〈神奈川新聞社提供〉



解体中のイギリス7番館(昭和52年5月)〈神奈川新聞社提供〉



県民ホールとペア広場

この辺一帯は、市の指導にもとづき、「民間の建築群の整備の中で、歩行者空間の拡大と、形態、色彩等の調和、演出を図る取り組みも行なっている」(横浜市『横浜の都市づくり』一九八二年)もので、その代表的な成果とされ、「ここでは三つのゾーン毎に考えられた土地利用、建築物の壁面後退(歩道、広場の設置)。建物の色彩等のデザイン、システムに沿つて、各建築主の協力を得ながら、地区全体の整備を進めている」(前掲書)とし、新しい都市美が創造される地域であつた。

●ホテル戦争―このような山下公園沿の高層化は波及的に中華街方面にひろがっていった、その上、山下町一帯にはホテルが増

加して、あたかもホテル戦争の観を現出した。もともとここには、ホテル・ニューグランド、少しはずれて新山下町にはバンドホテルの老舗があるが、その上にザ・ホテルヨコハマそしてアスタール観光ホテル、サテライトホテル。中華街北口には五十六年ホテル・ホリデイ・イン・ヨコハマなどがつぎつぎと建てられ、熾烈な顧客誘致競争が進行しはじめていった。

●街の美化——一方、私企業のホテルなどへの投資がすすんでゆくなかで、中華街の振興策は地元中華街商店会によって、地道につづけられていった。さきに述べたカラー舗装は、町のイメージを変えたが、次には、人の流れを中華街から元町へ、そしてさらに山手へと、観光のルートとするために、中華街と元町とを結び南門通りの整備が計画された。五十二年十一月横浜市と地元が協調、街づくりの協定が結ばれた。いままでの道路をカラータイルで舗装し、街路樹を歩道の上に植えたほかに、将来道路を拡げることと計画し、店舗は改築などの際その壁面を後にずらすこととしたもので、将来構想をふまえたものであった。

五十一年十月には中華街プロムナード商店会(四六店)が結成された。

町が美化されてゆくにつれ、次いで五十五年、西門、北門に通ずる道路の歩道にレンガ舗装工事が、工事費約七、三〇〇万円、うち地元負担二千万円によって実施された。その上中華街大通りの拡幅と電信柱の地下埋設などが考えられるようになった。

●業務地域——中華街の振興とともに、その地域の外側に当る横浜スタジアムと首都高速道路がわ、それと前田橋までの堀川ぞいは、戦後、接収地であったが、解除後は、山下公園寄りの商社地域と中華街とは異なる公的施設が次々と建てられた。特にスタジアム側は倉庫や商社を含めて、公的施設が集まり、少範囲ながらいわゆる業務地域となった。横浜市立港中学校、同横浜港商業高等学校、横浜中央病院、中土木出張所、水道局中営業所などが集中した。そのうち古いのは、震災復興によって建てられた加賀町警察署で、当時はモダンな建物であったが、今は古典的なたたずまいを残した数少ない建物となった。署名は旧町名をそのまま使っている。

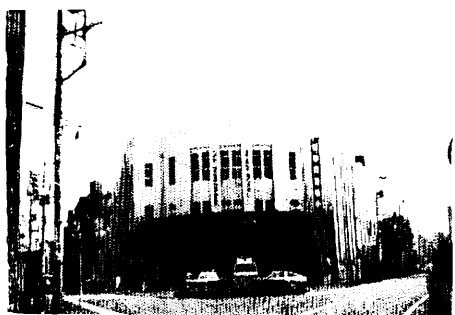
この地域で、接収解除後いち早く建設されたのは、堀川沿の横浜地方法務局で、木造の二階建建築で、特に戦後の不動産登記のため多数の来庁が見られたものである。

●教育施設——五十五年夏、港中学校校舎が解体された。震災復興による校舎がまた消えることとなった。同窓生らの解体を惜しむ声も上ったが、新しい校舎誕生のために止むを得ないことではあった。

この学校は旧横浜小学校で、明治六年(一八七三)北仲通に建てられ、震災で焼失後この山下町に、鉄筋で昭和三年に建築されたが、戦災に残ったものの、接収されて、二十一年には学制改革により横浜小学校は廃校、二十三年にこの地でひとつだけの中学



南門通



加賀町警察署

校として市立港中学校が新設され、校舎はそのまま使われたものであった。

一方、山手聖坂の私立聖坂養護学校では五十五年、二階建八三〇平方メートルの校舎が完成、小学校、中学校、高等学校の一貫した教育が可能となった。これは山手の一つの変化でもあった。この学校の前身は県下唯一の水上学校で、昭和三年三月に開校された。水上生活者子弟の減少によって、事情により家庭では養育できない子供たち、あるいは両親のいない子供たちなどの養護学校に変わったものである。

●山手の変化――また、山手の丘にも少しづつ変化が見えはじめてきた。プラフ・ホスピタル（山手病院）の不況であった。この病院は文久二年、居留地外国人の診療のために外人医師によって設立されたものである。不況の原因には山手居住の外国人の減少や、貨物のコンテナ化にともない、外人船員の減少が目立ってきたことなどが理由にあげられ、七二床のベットが空いてしまったという。その結果五十五年三月日本人に開放されたが、五月には一七二人、六月には二一二人の診療者を迎えて好評となった。しかし新病棟を作って国際病院という構想とはうらはらに、遂に五十六年十月、病院側は閉鎖をきめた。これに対して、同病院の労働組合はこれに反対、地位保全を提訴したが、結局五十七年八月に病院は閉鎖、建物は解体された。

この五十五年八月に山手のゲーテ座跡に、服飾を主体とする

岩崎博物館が建設された。三階建延九二〇平方メートル、八億円工事費による赤レンガの洋館で、市の指導により山手のイメージにマッチした建物となった。五十四年十一月に着工されたが工事期間中には旧ゲーテ座の台石の一部やレンガ、さらに役者の衣裳の切れはしが発見されている。

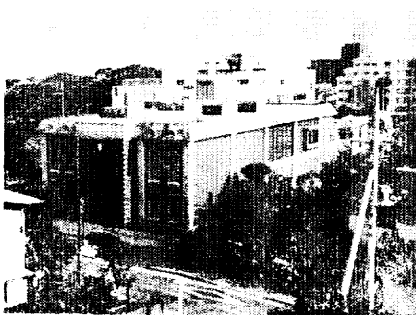
●不況の墓地――平穏に見える山手の地域にも、時代の変化は敏感に影響していた。

山手病院に現われた経営難につづき、外人墓地においても、第一次オイルショック以来、維持管理費が高騰し、財政的に危機を迎えていた。それに、墓地敷地約二万平方メートルのうち、斜面の土砂崩れを補修しなければならない部分が六、六〇〇平方メートルもあり、この復旧費だけでも四、四〇〇万円を必要とした。

この負担は莫大であった。このため五十三年六月には横浜青年会議所、YMCAなどによって「横浜外人墓地を愛する会」が発足、この会の努力によって募金援助が行われた。墓地も五十四年に市民の理解と浄財を得るため、日を限って一般公開されたのに引きつづき、五十五年十一月にもふたたび同じように公開された。

一方、斜面の一部復旧工事は、前述の会ほかの努力によって、延長一一〇メートルが五十七年八月になって完成したのであった。工事費一、八〇〇万円、実に外人墓地始まって以来一一〇年ぶりの大がかりな改修であった。

●フェリス移転問題――そして五十五年（一九八〇）七月、山手の



ゲーテ座記念岩崎博物館

フェリス女学院の中学部・高等部の保土ヶ谷区二俣川への移転問題がもち上った。これにたいして、同窓生や市民から一斉に移転反対の声が上がった。

「フェリスは山手にあるから意義があるんです。発祥の地ですから、中・高まで移転したら意味がないんじゃないですか。口はばつたたく言わせてもらえば、横浜開港の歴史につながることで、一女学院の移転問題では済まされません」(藤村志保さん談『神奈川新聞』昭五十六・七・十八)結局、移転は取り止めとなり、学院はこの地に存続することになった。

こうした騒ぎのなかにあつて、この年の十月、山手聖公会(キリスト教教会)の信者や横浜在住の欧米人、アマチュア劇団ら五人によって、チャリティーをかねて、「ヨコハマ開港夜明街角」という芝居を関内の開港記念会館において上演したが、これは同教会の改修基金募集のためのものであつた。

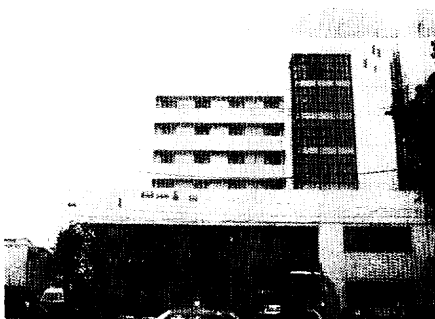
そして、セント・ジョセフ・カレッジでは、一時五〇〇人の生徒がいたものが、外国人人口の減少によって、五十七年には二七〇人に激減、経営上でも危機となつたので、いままでも男子のみの入学に対して、五十七年四月からは女子も入れて、男女共学に変えたのであつた。

これは明治三十四年(一九〇一)日本で最初の国際的(インターナショナル)な学校として発祥以来のことで、八一年ぶりのことであつた。

まさに、古き山手は、その内容こそ違え、維持管理に苦心しなければならぬ時代を迎え、これをのり切つてゆかなければならなくなつた。

こうしたなかで、港の見える丘公園の大佛次郎記念館の裏手三・八ヘクタールには神奈川県立近代文学館建設がすでに五十五年十月ごろから予定されていたのであつた。五十九年度開館を目ざしていま工事中であるが、山手の名所の一つとして誕生することになる。

●ホテル戦争激化——一方、山下町では、五十六年(一九八一)四月海員会館が衣替えをし、国際マドロスホテルとして、全国でも初の会館ができた。七階建地下一階、工事費十億円、一五八人の宿泊が可能で、船員の乗船待機用の宿泊施設として好評となつた。そしてこの年の九月、山下町に地上一〇階、地下二階、延面積一万六、七三六平方メートル、工事費六〇億円のホテルホリデイ・イン・ヨコハマが竣工した。ここには四カ国語の同時通訳施設が備えられ、国際会議もすることができる。定員二、〇〇〇人の大宴会場があり、九〇台の地下駐車場を持つ、県下最大規模のホテルが誕生したのであつた。さらに客室五〇〇室を増築するというもので、一ハマ、ホテル戦争一段と激化(『神奈川新聞』昭五十六・九・十二)と新聞は報じた。「東京のホテル・オークラ、帝國ホテルに流れていた客に照準をつける」(同紙)として、横浜ホテル業の振興を狙つた。



海員会館—玄関先に大きな船が置いてある

これに対して、シルクホテルが五十七年（一九八二）、三月末限りで閉鎖となった。消防施設の不備が閉鎖の引き金となったが、まさにホテル競争激化のあおりをまともにもうけたものであった。山下町のホテルも、こうして明暗を分けていった。

● 教育・民生施設 ― 解体された市立港中学校が五十七年二月に新築がなった。四階建、普通教室十五、理科・音楽など七つの特別教室を持つ学校が誕生した。旧校舎の入口でアーチ型の飾り柱はそのまま残された。屋上には二五メートル五コースのプールが設けられた。五十五年に改築、新装された隣接の市立港商業高等学校と、あたかも一対のように、スマートな姿を現わすこととなった。

そして、四月には、横浜市職能開発センターが山下町に誕生し、地上七階、地下一階の建物で面積三、四〇〇平方メートル、工事費十億五、〇〇〇万円で、労働福祉の施設としては画期的なものであった。ここには、横浜市中心職業訓練校、地域職業訓練センター、中福祉授産所、横浜市母子福祉会、それに市シルバー人材センターのそれぞれの機関が集中することになった。

● 国際会議 ― 山下町の公共施設が充実の途上にあつて、横浜国際会議場（産業貿易センター内）では五十七年六月九日から十六日まで、シドニー（オーストラリア）香港・上海、ボンベイ（インド）ダッカ（バングラデシュ）など ESCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）加盟のアジア・太平洋地域二八カ国の参加

のもとに、自治体（横浜市）主催による日本ではじめての「国連アジア太平洋都市会議」が開催された。

「都市づくりにおける自治体の役割に関する課題」「都市づくりに関する自治体の行政能力の向上とその可能性」の二つをメインのテーマとして、論議が行われたのであった。多くの外国人を招いて開かれた国際的なこの催事は、まさにこの山下町地域ならではのことであつた。

五月、同じ国際会議場において、みなとヨコハマの二一世紀の街づくりそのものが文化という観点から、「横浜の文化と町づくり―みなとみらい21―を核として」というテーマで市民二〇〇人が参加、三時間半にわたつて、横浜の将来が論議されたのであつた。

この年の七月、横浜ではじめての横浜新能が山下公園で催された。舞はやし高砂、狂言鐘の音、能の羽衣、土蜘蛛が上演された。かがり火の中、公園の夏の夜に幽玄の世界を現出したのであつた。

(3) 変貌^{へんぼう}

● 関連 ― いまの山手町と山下町とは、地理的に山の上と下、というだけのことでお互いに町としての関連はない。かつて、この二つの町は、前に述べたように外国人商人たちの商社と居住住宅とに色分けされ、谷戸橋、谷戸坂によって、山の上と下とが結

ばれていたが、第二次大戦、貿易の不振によって、外国人の商業活動は低調、そのため彼等の商社や住居が減少した。

このため、二つの町の関連はなくなり、それぞれ独自の変化を見せているのが現状である。山手(町)は観光地化。山下町は中華街を中心とする商店街化、そして欧米系商社の後退にともなう一層の業務地域化、というような状況を見せている。

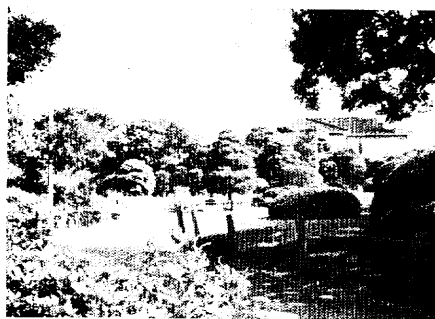
いまの山手町について、仮に三つの地域に分けると、谷戸坂からワシン坂方面、そして港の見える丘公園から山手本通りの外人墓地までを東部。外人墓地から山手本通りの地蔵坂上までを中部。地蔵坂上から山元町一丁目までを西部ということになる。

●山手東部——山手の東部は谷戸坂から入る。堀川には高速道路が巨大な橋脚をみせており、それよりも低目に港の見える丘公園の一角フランス山の緑がこんもりとしている。平地は花壇、その中にルビージュの造形が目立つ。

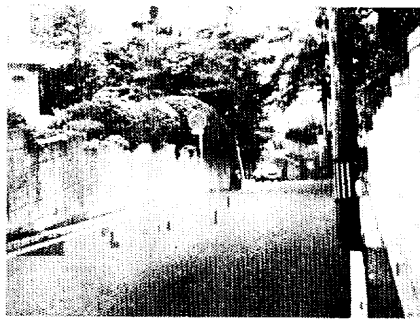
坂なりに崖に沿って外人専用のマンション(七階建)が建てられ、谷戸坂の上は警官派出所。このあたりが山手メイン。木造住宅が建てられているのを始め、左手には「港の見える丘公園」、ポートヒルの建物、そして港の見える丘公園有料駐車場、公園入口となる。

公園内は、沈床花壇が風景に花を添え、展望台からは横浜港や市街が一望できる。フランス山と地つづきの東洋信号社のタワーが、この展望台からは僅かの距離のところに見える。公園の南側

●地区編●第三章—山手—山下地区



港の見える丘公園、右手はイギリス館



ワシン坂上



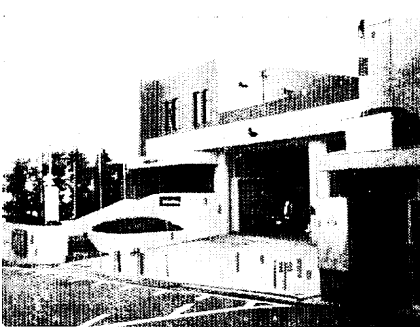
植込みの向うは大佛次郎記念館



横浜地方気象台



イギリス館



山手消防出張所

にはしよう洒な大佛次郎記念館、その裏手には神奈川県立近代文学館が建設されている。これらはこのあたりの中心的な施設であり、四季を通じて訪れる人は多い。イギリス館の前にはインターナショナル・スクールがある。

インターナショナル・スクールからすこし進むと、坂はふた手に別れ、直進はワシン坂方面、右手の坂は諏訪町に通じる。この二つの坂に沿う一帯は住宅地で、外に聖坂など、坂と坂とによって結ばれている。住宅は外国人の住宅が多く、そのなかにはデンマーク領事館、米国国務省日本語研修所、市立山手保育園などがあり、北方地区の千代崎町に接している。

ワシン坂上手前には大韓民国総領事館、坂の途中にはワシン病院、そして坂下の台地には緑につつまれたカネボウ化粧品株式会社教育センターがある。ワシン坂はゆるやかな坂で、小港町に通じているが、坂の途中の眺めがよい。残っている緑地の向うに横浜港の青い海が見渡せる。ブラフ山手の名に恥じない、すぐれた景観がここにある。

ふたたび山手本通りにもどれば、警察官派出所の筋向いには、ゲーテ座跡地に建てられた岩崎博物館。その前の丘には横浜税関宿舎（四階建）その隣りには横浜地方気象台が四六時中、県下の気象状況を観測している。

その前の山手外人墓地は、戦後再製された門柱、門扉が荘厳さを見せているが、本通りに沿ったさまざまな形状の墓碑の下に

は、異国日本で没した多くの外国人が眠っている。聖域であるここには、四季を通じて訪ねる観光客が多い。

外人墓地の前は五差路、下って中消防署山手消防出張所がある。通りにはレストラン山手十番館、山手資料館（旧、園田邸）があり、資料館は外人住宅のたゞすまいを今に残している。近くに横浜山手聖公会の塔がそびえている。そして墓地に隣り合わせた元町公園が豊かな緑陰を作っている。このあたりは、山手の中心的景観といえる。

ここには内外人の高級住宅が並び、一層山手の雰囲気を感じているが、五差路から坂を少しさがればマンションが最近ふえつつある。例えば諏訪町境の五階建マンションなどである。この地域の変容のはしりとも見られる。

●山手中部――中部の地域は学校と教会、そして外人住宅の集中した地域であるといえる。外人墓地の前をしばらく行くと、角地にセントジョセフ・カレッジ、隣接の山手病院跡地には人の気配はなく、わずかにヒマラヤ杉の大樹が往時を偲ばせてくれる。その裏手は横浜雙葉学園女子小・中学校・高等学校、サンモール・インターナショナル・スクールなどがある。雙葉学園の体育館脇には聖母愛児園、山手本通りにはフェリス女学院短期大学家政科の校舎。バス停留場代官坂上は十字路で、そこからさらに山手本通りを進むと、道にそってフェリス女学院中学校・高等学校の校舎が優雅なたゞすまいを見せている。次いで横浜女子商業学園中



横浜雙葉学園高校



横浜女子商業学園



フエリス女学院高校



マンションが建つ山手本通



横浜山手聖公会



カトリック山手教会

学校・高等学校が環境に恵まれた、いかにも女子教育の場の雰囲気を見せている。道の向い側には、国際武道院事務局が住宅の間にある。このあたりには外国人住宅が並ぶ。その近くにセブンスデー・アドベンチエスト横浜教会と横浜三育幼稚園、カトリック山手教会、みこころ幼稚園がある。そのうしろ、坂の下には山手中華学園、隣接して元街小学校、そのがけ上にはフエリス女学院大学が広いキャンパスのなかに建っている。

山手本通りはこのあたりからゆるい下り坂となつて、地蔵坂上に達する。

●山手西部——地蔵坂上は、三差路で山手の本通り、石川町方面、

桜道を経て麦田町にそれぞれ通じ、昔も今も変わらない交通の要所である。その角地、戦後ずっと石垣だけが残っていた空地であったが、レンガ造り三階建のサンライズビル山手が建てられた。西部地域にはこのほかに、ニュー山手マンション（七階建）横浜センチュリーマンション（五階建）をはじめ、目ぼしい空地にはマンションや低層の住宅が建てられている。最後まで空地を残したこの地域も、現在建物で埋まった。

この住宅地には、横浜学院女子中学校・女子高等学校・同幼稚園、それに横浜共立学園がそれぞれ恵まれた環境のなかにある。

ほかに農林水産省植物防疫所研修センター、日本キリスト教団福



山手公園で発掘された外国人住宅の床部分（五十八年六月）

音主義教会連合などがある。

山手本通りは下り坂となつて、山元町一丁目の商店街と、打越橋下の道路（主要地方道横浜根岸線）の折れまがり点に到っている。いわゆる山手もここで終りとなるが、この一帯の住宅の生活圏は、山元町の一部に入っていることに変りはない。

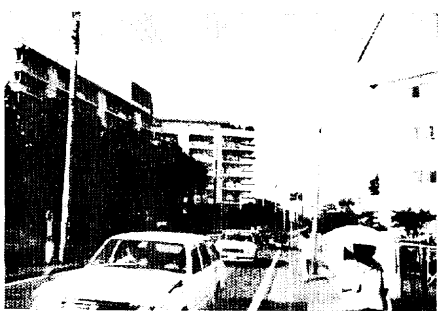
●山下町―山下町は、山下公園側と高速道路・堀川側とは色分けがされていることは、前から述べてきたところだが、その色分けは、戦後になってますます鮮明となった感であり、現在となつては、この二つの地域はともに建物の高層化がすすんで、外見上では区別の必要はなくなりつつあるといえよう。しかし現在で

はまだ同じ地域（町）のなかでも多少の特徴がある。仮りに三つの地域に分けることができる。

(1)国道一三三号線から山下公園までの北部地域、(2)国道から南へ中華街までの中部、(3)横浜スタジアム側から根岸線がわの南部となる。

●北部地区―地域のなかでも、メイン通りと言つてよいのは、山下公園わきの道路、正確に言えば、主要地方道山下・本牧・磯子線で、愛称は山下公園通りというが、この通りは、横浜のイメージを代表する、近代都市美が構成されている地域といわれる。

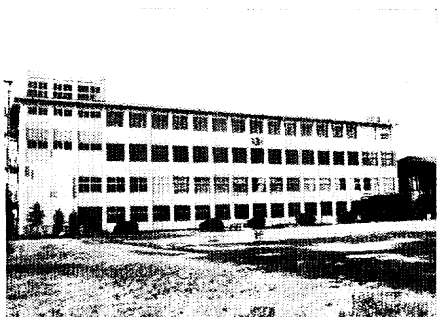
山下町一番地。開港時の英一番館跡で、ここには国際貿易観光



山手のマンション



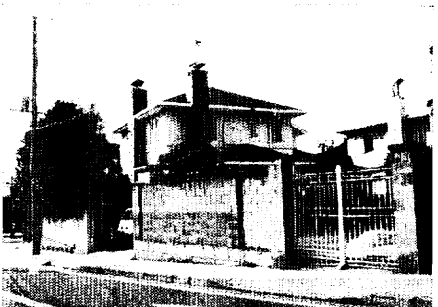
横浜学院女子高校



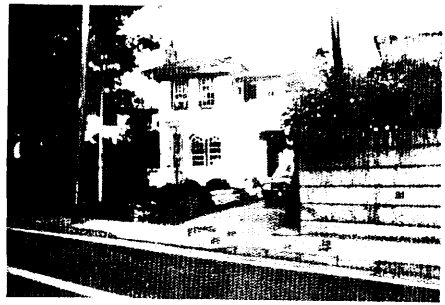
横浜共立学園



山手の古い外国人住宅



山手の古い外国人住宅



旧手の古い外国人住宅



同



同



同



同

会館（通称、シルクセンター）がある。これはこの地区の高層建物の先べんをつけたが、この会館の中核、シルクホテルは経営上から昭和五十七年三月に閉鎖した。ここには大阪商船三井船舶、横浜生糸取引所、横浜生糸取引商品協会、郵便局、横浜市観光協会、アルゼンチン総領事館、ブラジル副領事館など九六の企業・団体がテナントとして入居し、活動している。

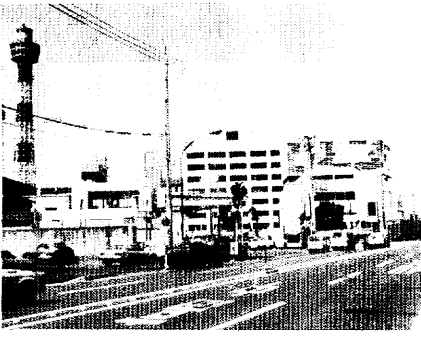
この隣りに、昭和五十年十一月に建設された産業貿易センタービルは十一階建の近代ビルである。その八階には横浜商工会議所、横浜青年会議所、神奈川県商工会議所連合会などがあり、神奈川県産業貿易振興協会、神奈川県経済同友会、横浜産貿ホール、

神奈川法人会連合会、大手商社などの経済団体の中枢機関があるほか、横浜メキシコ合衆国領事館、横浜国際会議場、神奈川県国際交流センターもあって、国際性にも富んでいる。さらに横浜市港湾局、神奈川県旅券事務所などの行政機関もここに入っている。ミナト・ヨコハマの代表的な建物である。

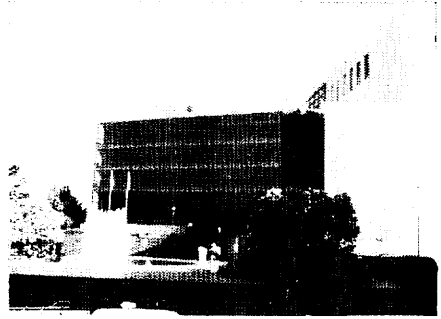
県民ホールもまた現在、横浜の代表的な建物である。ホールは一階に県民ギャラリーがあり、ここではほとんど年間にわたり展示が行われている。二階以上は大・小のホール。ここでは、各種の催事が行われているが、大ホールは二、五〇〇人収容で県下最大の施設である。さらに高層ビルは、ザ・ホテルヨコハマへとつ



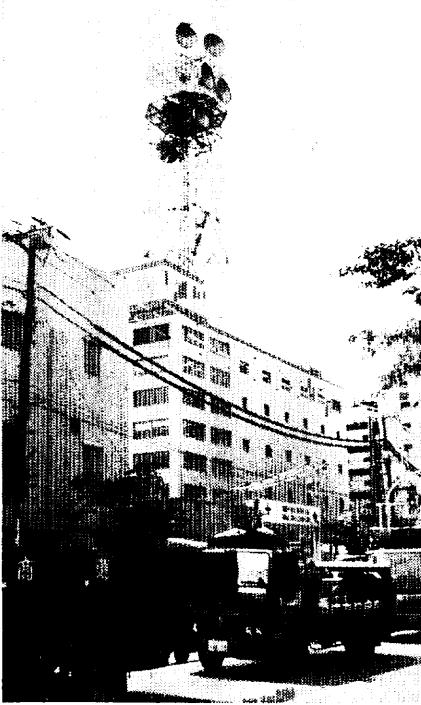
産業貿易センタービル



テレビ神奈川と横浜地方合同庁舎



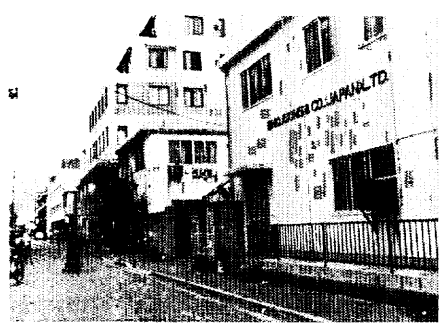
県民ホール



国際電信電話局



保存された旧イギリス7番館



外国人商社



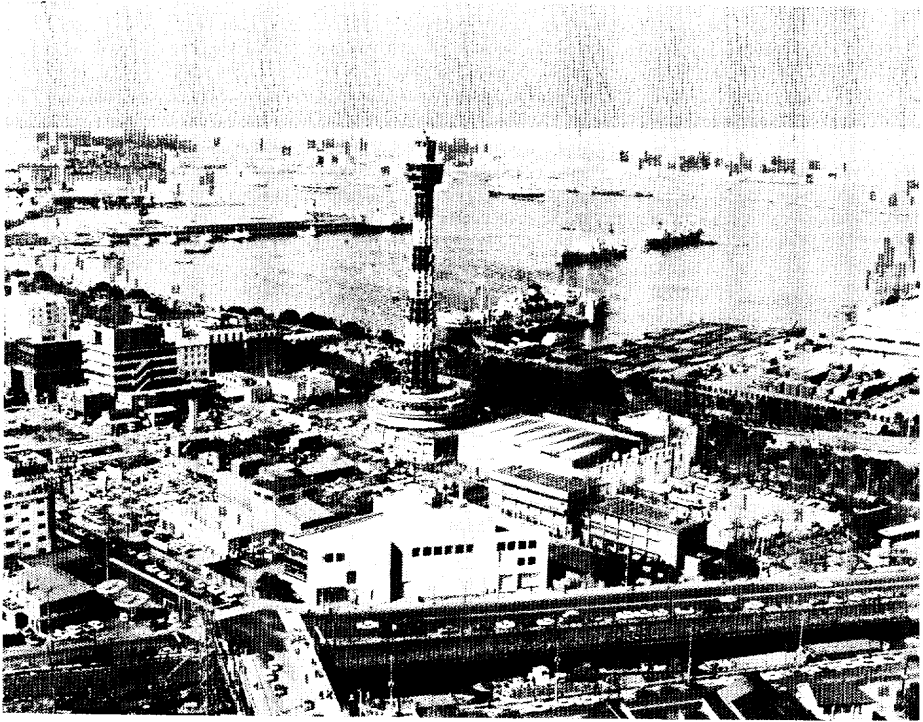
外国人商社



外国人商社



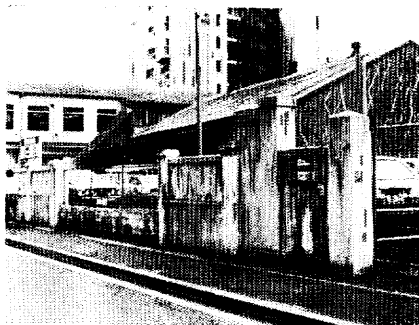
外国人商社



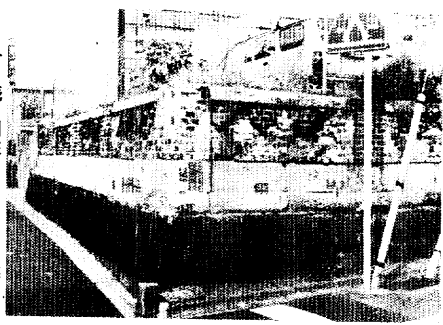
づき一三階建のこのホテルは四階から一二階迄は客室、最上階はレストラン、ほかはホール、飲食料品店である。さらに隣接の創価学会神奈川文化会館（五十四年四月開館、一〇階建）の高層建物の前には、赤れんがの戸田平和記念館があるが、これはもとこの地にあった外国商社（旧、イギリス七番館）の玄関部分約三分の一を保存したもので、震災前の旧状が残された貴重な建物の一つである。

こうした公園に面したビルの中に駐車場が二面、空間を占めているが、山下公園交差点には、老舗ホテルニューグランドがある。このホテルは日本の代表的なホテルで、その格式は世界的なものでさえある。この低層の古風な建物は近代建築に対して、見劣りはしない。四階建、内外人の宿泊客は多い。

公園通りのはずれには、横浜郵便貯金会館があり、四階から六階は宿泊室、他は結婚式場、レストラン、ロビーなどである。七階建。昭和五十五年四月建設された。それ以前はボーリング場のシーサイドボールだった。これにより公園通りは高層化がほぼととのった状況となった。このような立体的景観のなかでも、ひとさわ目だつのは、マリンタワーである。レストラン、海洋科学博物館をタワーの中に収め、十二階の展望台は市街を一望にすることができる。地上灯台としては世界第一位、高さ一〇三メートル、ここは、子供連れの人々で日曜や祝日には、にぎわいを見せている。マリンタワーは、山下公園の景観を一層引き立たせている。



今に残る門柱コンクリート塀



今に残るレンガのよう壁

大栈橋の入口、シルクセンターの角に立つと、見事ないちよりの並木が枝を伸ばして、涼しい木蔭の道が続いている。

この並木道は山下橋まで続く、地方道山下・本牧・磯子線であるが、人々は海岸通りと昔のままに呼ぶ。この北側は道ぞいの山下公園で、現在ここ一帯に集まる人びとは、ヤングたちであり、家族連れである。修学旅行の生徒たちも多い。そこには若々しい、明るいさっぱりした活気が満ちあふれている。人びとは、絵タイルをたどって山下公園に、氷川丸に、マリントワーに、県民ホールにやってくる。そして次は異国情緒の中華街やニューファッションの元町へ、さらにフランス山、港が見える丘、外人墓地へのコースをたどる。横浜観光のメイン・ストリートである。

横浜郵便貯金会館の裏手、堀川に面したヘボン博士の旧邸跡のところには横浜地方合同庁舎が昭和五十一年九月に建てられた。この機関の合同庁舎で、横浜中税務署ほか国税関係、神奈川県警察監察局、横浜地方法務局、防衛庁調達実施本部横浜支部、建設省関東地方建設局横浜管轄工事事務所、東京入国管理局横浜出張所などが、八階建の合同庁舎に集中している。

この庁舎の付近には、神奈川県横浜合同庁舎もあって、神奈川県横浜納税事務所、神奈川県自治総合センターがある。

ホテルニューグランドの裏通りは、もと水町通りといわれた所で明治屋ビル（一一階建）ほか、高層ビルが並んでいるがその通りの県民ホールの裏にあたる所には、外国商社の建物が旧状のまま

に残っている。その建物の外壁には、地番の数字プレートが残るものもあり、この地区らしさを感じさせる。

震災後に建てられ、今に残る互楽荘ビルは落着いた雰囲気を見せてくれる。横浜国際電信電話局は八階建うす水色の建物、屋上には赤と白でぬり分けられたレーダー塔が、この辺りのどこからでも見られる。この付近に有料駐車場が大きな空間を拡げている。

山下町北部の入口といえば、シルクセンターの辺りである。日本大通りの横浜電話局とは道をへだてて、横浜通信会館（九階建）、横浜防衛施設局、警友総合病院、神奈川県警察本部分庁舎、そして谷戸橋ぎわのテレビ神奈川、反対側には日本赤十字社神奈川県支部、神奈川県センター、シテイバンク横浜支店、神奈川県職員会館、サテライトホテルヨコハマ、横浜海員会館、アスターホテルなどのビルが並んでいる。この国道の裏には、山下町第二団地の五階建二棟に五九世帯の人が居住している。ここは山下町でも数少ない住宅地区である。この団地の裏一帯は、商社と駐車場が多く、この辺りから中華街との接触地帯となっている。昭和五十六年九月ホリディ・イン・横浜が建設されたが、この辺一帯の高層化に一層拍車をかけたようであった。

ノルウェー政府社会福祉局の建物もひっそりこの町なかにある。

この山下町北部には近代的ビルが次々と建てられているが、そ

のかげには所々に建築物の基礎コンクリートや、とりこわされたコンクリート塀、そして戦災にも残った外人商社の建物が、わずかに古い山下町をしのばせてくれる。だがこうしたものも、やがては取り払われ、消滅することが十分に考えられる。

試みに県民ホール六階の窓から南側を見れば山手の丘陵だけは、稜線に建物が点在して、一つのまとまった景観をみせるが、この山下町北部にいたっては、建物の高さはまちまちであり、退屈な陸屋根がつづくだけで、色彩にしても町全体の鮮かなものはない。

●南部地域——山下町の南部、ここを山手の丘から見た場合、建物高さの不揃いが目立っている。しかし、北部にたいし、この地域は中華街に豊かな色彩がある。

南部の中心的な存在は、加賀町警察署、ここが東西に中華街、西ノ橋にいたるメイン道路の起点となっている。

南部の中心はやはり中華街そのものである。街並みは中華料理店が隙間なく並び、横町には、中国土産店、中国食品品の問屋、中国貿易商社などが店を構え、その間にも中華料理店がある。店構えはほとんどが大きく、店頭といわず内部といわず、すべてが極彩色に裝飾されている。他の町には見られない雰囲気をかもし出している。

中華街の本通りに直角に交差する市場通りは、食料や日用品販売店が軒を並べ、夕方近くにもなると道狭しと往来も激しくな

る。

夜ともなれば、本通りはネオンに輝き、原色に彩られた建物が光に浮く。店のウィンドーには豚の丸焼き、食肉の加工品がならべられ、油の匂いが流れてくる。夕刻には中華料理店からの、宴会帰りの人の流れで殊ににぎわう。

現在街並みのなかにきわだつて高いビルは見られないが、料理店のうしろは住宅地で、その他の商店と混在している。

中華街の入口には、高さ一五メートルの極彩色の牌楼門があつて、そこから東西南北に中華料理店が並ぶ。現在料理店は、広東、北京、上海、四川などの料理を提供している。そのほか雑貨店や菓舗など中国関係の物品が多い。この横浜中華街発展会協同組合には日本人と中国人の一一〇店が加入している。

五十五年度の横浜中華街発展会協同組合は、会員一一〇店、うち中国人名義の経営は六五店である。業種のなかでも多いのは中華料理の五〇店、そして飲食店、喫茶店がこれにつづいている。食肉業の多いのもこの地区の需要の多さを示している。

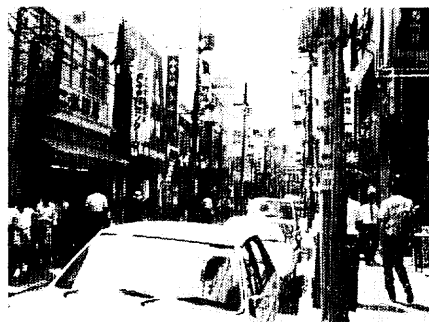
一方の中華街プロムナード商店会でも、若干構成の要素も違うが、中華料理店ほか業種にバラエティがある。区域内には、神奈川県警察本部加賀町分庁舎、社団法人全日本検数協会横浜支部、関帝廟、中華民国留日横浜華僑総会、山下町公園、山下町郵便局、山下町自治会館などがある。南門通りは、料理店専用の駐車場、かどから前田橋までの間の南門通りはレンガ舗装、街路樹が



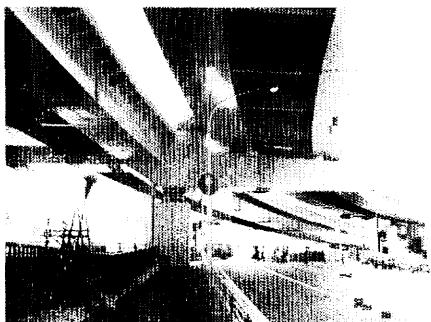
中華街通りのにぎわい



高速道路—西門前あたり



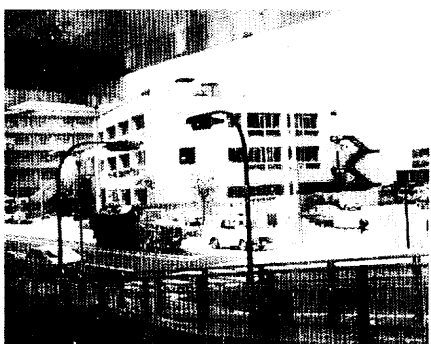
中華街通りのにぎわい



高速道路—西之橋上



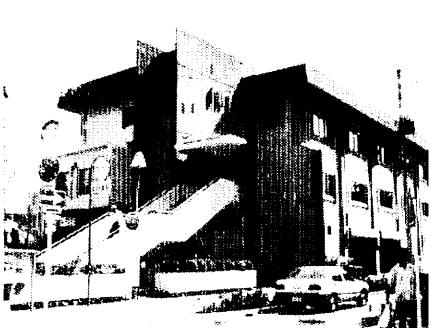
市場通り



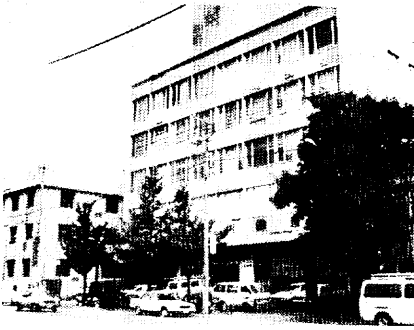
中保健所



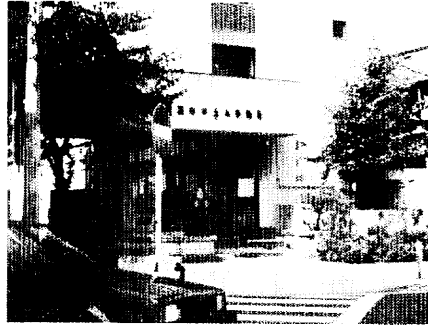
関帝廟



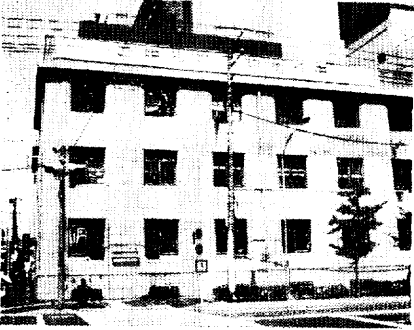
水道局中営業所



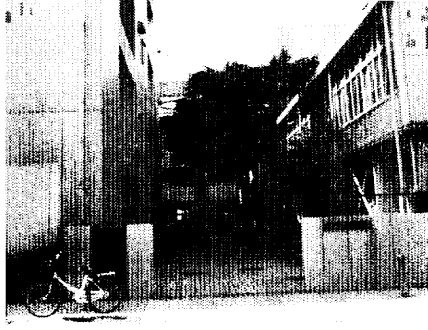
労働福祉会館



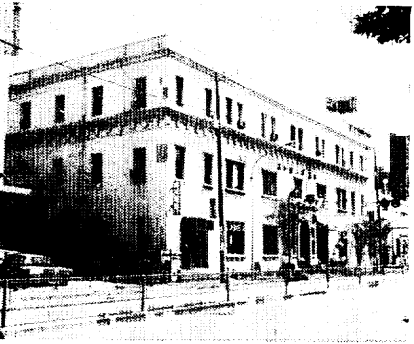
中土木事務所



デスコビル



港中学校(東門)



ストロンクビル



港高等学校(正門)



古い倉庫―労働福祉会館隣。右は港高等学校



職能開発総合センター

植えられ、散策のよいコースとなっているが、この辺りにも店舗がつづいている。堀川にそって、昭和五十三年十月からレント山下町(七階建)、五十四年九月にはハイライフビル(九階建)が建てられ、高層住宅が目立ってきた。

住宅では山下町一六八番地に山下アパート一・二号館(旧、同潤会アパート)が健在である。三階建の二棟には九七世帯が居住している。老朽化しているものの震災復興後の残り少ない建物の一つである。

堀川の上はいま高速道路の工事中である。南門通りの前田橋は、山下町と元町を結ぶ橋で、昭和五十八年八月装いも新たに完成した。またそれに並んで、歩行者専用の代官橋も五十七年月に完成、橋の名は代官坂の延長に由来、地元の強い希望によった。

堀川沿いには、旧地方事務局の跡地が空地のほか、ほとんどの土地は建物で埋まっている。この地区に横浜港電話局線路庁舎、横浜市中保健所、横浜地方貯金事務センター、さらに財団法人神奈川駐労福祉センター(全駐労神奈川地区本部ほか)があり、これらのビルの谷間にさくら幼稚園がある。この地区は現在工事のせいか川沿いの道路にしては情緒を感じさせない、乾いた町である。

加賀町警察署から元町交差点にいたる道筋は、前に述べた山下町南部のメインの一つだが、この地域は三角状で、堀川と横浜公園に沿い、その一辺は今はない派大岡川にかかっていた元の花園

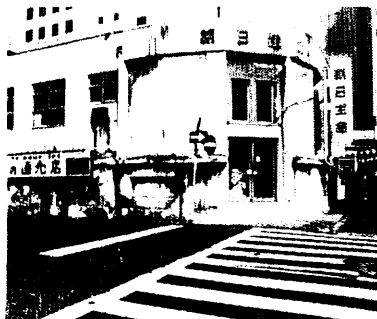
橋、吉浜橋と、西之橋間であり、横浜スタジアムに隣り合わせる。

この一帯は、警察をはじめ公共施設の集中している地域である。北から横浜統制電話無線中継所、横浜電電ビル(日本電信電話公社横浜都市管理部、横浜電話局横浜港営業所、横浜電報局など)、横浜市水道局中営業所、隣り合せて横浜市道路局中土木事務所、それに市立港高等学校・港商業高等学校(一つの校舎を昼・夜とに分けて使っている)、港中学校。この二つの学校の間には、高さ一五メートルの牌楼門(西門)があり、人々はこれを赤門と呼んでいる。さらに横浜中央病院、横浜中央看護専門学校、花園橋病院、神奈川県民生部、横浜市職能開発総合センター、横浜地域職業センターの各ビル、それに自衛隊神奈川地方連絡部、神奈川県労働福祉センター(神奈川県労働金庫、労災神奈川県本部ほか)、それに横浜YWCA横浜キリスト教女子青年会、横浜市土地開発公社山下町有料駐車場の建物がある。

震災のとき一階がすっぽりと地中にめり込んで半地下となったというスタジアム前の角地のデスコビル、ストロングビルなど戦災に残った古い外国商社のビルがこの地域に多い。旧商社が所々に残り、近代ビルがこの残存建物をつぎつぎと壊しながら建設されてゆくといった新旧の建物が混在する町となっている。この状況を再開発しようという声がしばしば出されているものの、それがはかどりを見せていない。しかしこの地区には、どこことなく活気がみなぎっている。そしてこの人々は国籍をこえて親密で



旧逓信銀行建物(現、警友病院別館)



旧逓信銀行建物―左手の横長の看板から下の基部(現、アクメ貿易 日本大通所在)

ある。前記のような商店会しかり、関帝廟の関帝祭は地区共通の祝事ともなっている。この親密さは、商売上での相互依存も一つの原因であるようだ。

山下町北部が旧欧米人の商社地域、南部はまさに東洋人の町、しかも華僑と市民がそれぞれ、依存し合っている町、ということが出来る。

●おもかげ——いまの山下町は、これまで述べてきたように、北部地域と南部地域、それに根岸線ぞいの地域とに分かれるが、かつての居留地のおもかげは、この南部地域にもわずかながらに見られる。

いま残っている建物は旧露亜銀行（山下町五一番地、現、警友病院別館）で、震災前の鉄筋コンクリートの建築、当時の外国銀

行の面影を残し、戦災でも残った。それと旧イギリス七番館（山下町八番地、現、戸田平和記念館）があり、大正十一年の鉄筋コンクリート造り、入口部分のみが残された。外国商館の型式を示す残り少ないものである。旧露清銀行の基礎の立上り部分（日本大通一七）が残り、いまでは、その部分を利用してアクメ貿易株式会社建物が建てられているが、部分とはいえ、震災前の商館の一部をしのぼせる。また山下町九十番地付近にも、震災前の建築の基が見られる。

そして山下町に隣接した日本大通の三井物産ビル・同倉庫は、明治四十四年の鉄筋コンクリート造り、遠藤於菟・酒井祐之助設計で、日本における鉄筋構造のビルのはしりとして著名なものであるが、こうしたなかに居留地貿易の名残りを見せてくれる。



三井物産ビル（日本大通所在）